

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

体育心理学専門領域会報

第 36号 (通巻第 64号)

体育心理学専門領域

2024年8月発行

体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育心理学研究の発展のため、会員の研究発表の場を提供するとともに他の研究領域と融合した企画を推進し、会員の研究と実践の促進に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長1名
 - (2) 理事12名
 - (3) 監事2名
- 第6条 役員の選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に会員の中から理事2名を会長が委嘱することができる。
 - (3) 理事長は、理事の互選によって選出する。
 - (4) 事務局は理事長および庶務・会計担当理事で構成する。
 - (5) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 会長および理事の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、理事の2期目に理事長に選出された場合は3期を重任限度とする。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、広報委員会
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、原則として日本体育・スポーツ・健康学会大会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育・スポーツ・健康学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、4月1日より翌年の3月31日までとする。
- 第16条 本会の住所は事務局と同じとする。事務局の住所は別紙に定める。
- 附 則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育・スポーツ・健康学会の依頼により、日本体育・スポーツ・健康学会関連役員等を選出する。
 3. 平成24年4月1日より、日本体育学会（現日本体育・スポーツ・健康学会）が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称する。
- 1) この会則は、平成21年8月27日から施行する。
- 2) この改正会則は、平成29年9月10日から施行する。
- 3) この改正会則は、令和3年4月1日から施行する。

事務局所在地 福岡県宗像市赤間文教町 1-1 福岡教育大学 兄井 彰研究室
事務局担当 兄井 彰

体育心理学専門領域の役員

任 期：2023 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

会 長：杉山佳生

理事長：兄井 彰

理 事：○樋口貴広、荒井弘和、國部雅大、笹場育子、田中美吏（学会大会委員会）

○坂入洋右、荒木香織、内田若希、村山孝之（広報委員会）

木島章文（庶務担当）、中本浩揮（会計担当）

監 事：森 司朗、横山慶子

幹 事：中須賀巧

○は委員長

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会

体育心理学専門領域会報

第 36号（通巻第 64号）

体育心理学専門領域

2024年8月発行

巻頭言

体育心理学専門領域会長 杉山佳生

今年は、夏季オリンピック・パラリンピックイヤーということで、忙しくされている先生方も多いことかと思います。体育・スポーツ心理学の研究知見を活かしたサポート活動が、選手の皆さんの活躍の後押しとなることを切に願っています。

さて、今年の日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会は、期せずして、会長、理事長（兄井先生）の地元の福岡での開催となりました。会場である福岡大学は、九州で最多の学生数を擁し、わが国屈指のスポーツ科学部とスポーツ施設を有する大学です。是非、福岡グルメと合わせて、お楽しみいただければと存じます。

大会については、応用（領域横断）研究部会企画を中心に据える構成になって4回目で、応用研究部会委員も、第2期のメンバーとなりました。体育心理学専門領域からは、第1期から継続の木島章文先生（学校保健体育研究部会）、樋口貴広先生（健康福祉研究部会）にくわえて、新たに、沖和砂先生（スポーツ文化研究部会）、筒井香先生（競技スポーツ研究部会）、田中美吏先生（生涯スポーツ研究部会）にご参画いただくことになりました。まずは、今年と来年の2回の大会で、テーマ別シンポジウムの企画等をご担当いただくこととなりますが、「体育心理学専門領域からの委員」ということに囚われることなく、個性を発揮し、それぞれの想いを具現化していただければと思っています。

また、今大会では、応用研究部会企画のスリム化（各部会のシンポジウムを3から2に削減）に伴って、専門領域への配分時間が増加しました。とはいえ、利用可能な時間帯が1日目と3日目に割り振られており、「使い勝手があまりよくない時間割」となっていました。それでも、これらの時間を有効活用すべく、本専門領域の学会大会委員会の先生方でご検討いただき、1日目の午後にキーノートレクチャーを、3日目に一般発表を行うことになりました。会員の皆さんにおかれましては、それぞれのご都合もあるかと思いますが、是非、これらの専門領域企画にご参加いただければと存じます。

また、学会大会委員会では、昨年度より、学会大会の「サテライト企画」として、「学位論文にかかる報告会」をオンラインで行っています。本原稿を作成している時点では、今年度の開催時期は未定ですが、体育心理学の将来を担う方々がご登壇される予定ですので、こちらにもご参加いただければ、幸いです。

ここまで、「学会大会委員会」の活動に触れましたので、体育心理学専門領域のもう一つの委員会である「広報委員会」についても、ご紹介しておきます。広報委員会は、事務局とも連携して、会報の発行や、日本スポーツ心理学会との合同企画である「中高生・市民のためのスポーツ心理学入門講座」の担当者の調整、体育心理学専門領域のホームページ（<https://www.psychology-jspehss.jp/index.html>）に掲載する情報の精選などを行っています。いずれも、当専門領域の重要な活動であり、委員会の先生方には、この場を借りて、感謝申し上げたいと思います。

なお、現役員の任期は、来年3月末までとなります。2025年4月からは、今夏の選挙で選出された新役員の先生方に、学会大会委員会や広報委員会の活動を継続・発展させていただくことになります。当選された先生方におかれましては、何卒ご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

体育心理学専門領域会報 第36号

目次

巻頭言	i
-----------	---

目次	ii
----------	----

I. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会関連

1. 専門領域別

1) キーノート

(1) レクチャー1

題 名：個人運動スキルから対人運動スキルへ—複雑さに潜む規則性を求めて—

司 会：木島章文（山梨大学） 1

演 者：山本裕二（新潟医療福祉大学） 2

傍聴記：林 大貴（鹿屋体育大学） 3

(2) レクチャー2

題 名：アスリートの誇りはどのような感情なのか —自分らしさと誇らしさ—

司 会：土屋裕睦（大阪体育大学） 4

演 者：近藤みどり（国立スポーツ科学センター） 5

傍聴記：相羽枝莉子（横浜国立大学） 6

2) 口頭発表（座長報告）

座 長：雨宮 怜（筑波大学） 7

座 長：片上絵梨子（共立女子大学） 8

座 長：松田晃二郎（城西大学） 9

座 長：山本真史（日本福祉大学） 10

3) ポスター発表記

小嶋岳（筑波大学・院） 11

須崎康臣（島根大学） 12

2. テーマ別（各研究部会）

1) テーマ別シンポジウム（部会員、演者報告）

(1) 学校保健体育研究部会

部会員：木島章文（山梨大学） 13

シンポジウム演者：木島章文（山梨大学） 14

(2) 競技スポーツ研究部会

部会員：荒井弘和（法政大学） 15

シンポジウム演者：木内敦詞（筑波大学） 16

(3) 生涯スポーツ研究部会

部会員：上野耕平（香川大学） 17

(4) 健康福祉研究部会

部会員：樋口貴広（東京都立大学） 18

シンポジウム演者：樋口貴広（東京都立大学） 19

2) テーマ別研究発表

小菅（町田）萌（大阪体育大学） 20

佐藤和之（東京都立大学大学院・院） 21

3. 大会参加記（支援金採択者）	
有井大芽（大阪体育大学）	22
豊田 隼（山梨大学大学院・日本学術振興会）	23
福村寿華（鹿屋体育大学院）	24
II. 研究会の活動報告	
スポーツ視覚研究会：樋口貴広（東京都立大学）	25
関西体育心理例会：内田遼介（流通科学大学）	26
臨床スポーツ心理学研究会：中込四郎（つくば木の花クリニック、筑波大学）	27
運動学習研究会：國部雅大（筑波大学）	28
スポーツ動機づけ研究会：梅崎高行（甲南女子大学）	29
学生 SMT 研究会：三石祐馬（大阪体育大学大学院）	31
III. 研究室紹介	
研究室紹介：夏原隆之（東京成徳大学）	32
IV. サテライト企画：学位論文発表	
三浦有花（武庫川女子大学）	33
藪中佑樹（京都先端科学大学）	34
V. 学位論文紹介	
小笠原佑衣（大阪公立大学国際基幹教育機構）	35
霜島駿太（帝京大学）	37
高山 彩（福岡大学）	38
當山貴弘（久留米大学）	39
三澤孝康（山梨学院大学）	40
藪中佑樹（京都先端科学大学）	41
VI. 海外情報	
岩崎 晋（Fort Lewis College, Durango Colorado, USA）、荒木香織（順天堂大学・(株)CORAZON）	42
VII. 事務局報告	
2023 年度体育心理学専門領域 第 2 回理事会 議事録	43
2023 年度体育心理学専門領域 総会議事録	45
2024 年度体育心理学専門領域 第 1 回理事会 議事録	50
2023 年度決算報告書	51
2024 年度予算案	52
VIII. 編集後記	
坂入洋右（筑波大学、広報委員長）	53

I. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会関連

名古屋大学に 36 年間お勤めであったこと、ご退職の機会に初めて知りました。昔の思い出を振り返りながら、タイトルにある内容に触れていきます。

運動学習研究会が先生との最初の出会でしたが、当時は何かと「お前、おもしろいやっちゃんやう?!」という安定評価を受け続け、ご発表のテニスの力学系の話はいつまで経ってもさっぱりわからず仕舞いのお付き合いでした。ただその時から、先生がスポーツの現象理解を最重要視していることはわかりました。現場そのものでも、あるいはそれを実験室に再現した実験であっても、要所で本質を見逃した事例を見つけると、周りが不安になるようなしなめ面をする様子をたびたび目にしました。

当日の講演について、てんこ盛りされた解析から明らかにされたことは全て質=パタンだということ、一見しただけでは単にごちゃごちゃな絵が、先生の手を入れると何個かのパタンにまとまったということが大事なんだと思います。登場する数々のエキスパートの本質は、まさにこういったパタンを高い精度で再現できることにあるのかと今更に思います。

ではこういう本質に到達するにはどういった学習が必要なのか、それは今後の課題なのですね。確かに当日の講演はテニスのストローク「学習」を促進する実験から始まりました。でもそれを対人動作の学習に拡張するには、またやり直さねばならない部分がかなり多くあるのでしょうか。体幹を回してフォアとバックを自由自在に打ち分けるエージェントが 2 体いたとして、2000 年出版の研究の要領をもって、そのそれぞれを鍛えることはできるのかもしれない。けれど、彼ら 2 体が熟練者と同等のレベルの試合を創るにはエージェント個体を鍛える要領では実現できない。

ソフトテニスの熟練選手間のボールのやり取りには、(複雑さに潜む形で) 規則性が大いに含まれるとのことでした。そこから規則を破って相手を打ち負かす連携機能がどうやって削り出されてくるのか、我々はほとんど知りません。それを考えるにはシステム全体を解析する秩序変数を知る必要がある。先生の講演内容は、先生がその秩序の解明に傾けた並々ならぬ努力を惜しみなく示していたと思います。木島はかつて、3 年というごく短期間ながら調枝孝治先生(大阪体育大学)のもとで研究室のお手伝いをさせていただいていたことがあります。そのとき「質=秩序を見つけなさい、そしたら一仕事になるよ」といわれました。当時のわたしは「へ?なに?」という反応しかできませんでした。今ならその意味がわかります。先生はテニス、剣道、サッカーと多岐にわたる現象をつぶさに解析し、その意味を明らかにしてきた。それぞれ一仕事の積み重ねが先生の業績なのだなとしみじみ思いました。

テニスの解析ででてきたフラクタル図形 (Figure 1) が、個人的には感慨深い一コマでした。横でお手伝いささせていただきました。Figure 1 のように左右に差がある千鳥模様が出てきたときのご反応がとても印象的です。思えばこれは先生ご自身が削り出したテニスの秩序そのものなのですね。これは最先端水準の選手のプレーを抽象しただけではありません。日々鍛錬を積みながらそこにはまだ行き着いていない、未熟練ではあっても初心者とは全くことなるテニス「選手」と熟達者との差=これがまさに熟練の方向を示す絵なのだろうと思

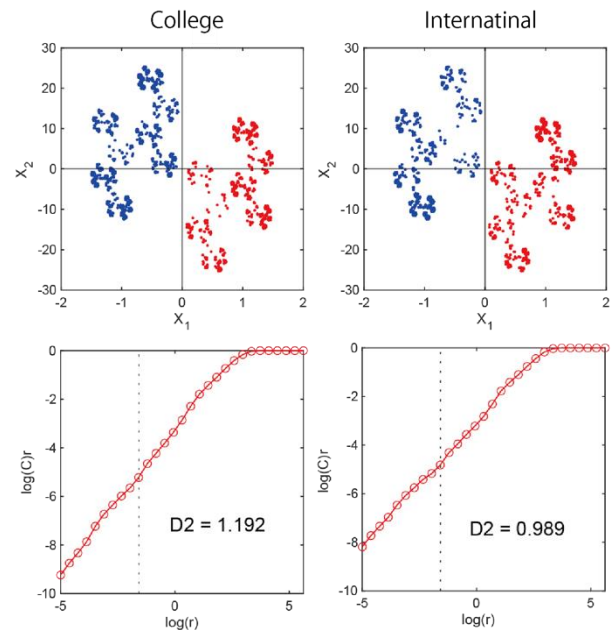


Figure 1: Poincaré maps (top) and correlation dimensions (bottom) for simulated data calculated based on two typical state transition probabilities of collegiate game (left) and international game (right).

います。

講演では最後まで質問が出ずに、なぜか私が大変寂しい思いをしました。質問が出ないのは私のふるまいが悪いからだと考えたからです。そこで私が疑問に思っている「現場、現場」というが、それを大事にした実験は実験室でもできるように聞こえる。でもその実験系にはどういった仕掛けが必要なのでしょうか?と質問しました。答えは「難しいね、わからんね。」でした。会場がなおさらに静まり返って、気の利いた質問ができずに大いに反省しました。

一連の課題を残しつつご退職され、新潟で更なるご活躍をされることになり本当に喜ばしい限りです。かつて当学会に呼んでいただいた Richardson, M. J. と Kallen, R. W. (Macquarie 大学) のご夫妻はじめ、みなさんがお喜びです。スポーツに関する集団秩序解明の道のりで得られた人との繋がりが先生の偉大な業績でありましょう。立場は大きく変わるかもしれませんが、みんなが応援しています。ぜひこれからも我々をリードしてください。

著者略歴: 筑波大学体育科学研究科単位取得満期退学、博士(体育科学)。山梨大学教育学部教授。二者以上の協応行為の心理を身体動作の解析から明らかにしたい。左投げ左打ち。



演者報告

「個人運動スキルから対人運動スキルへ—複雑さに潜む規則性を求めて—」

山本裕二（新潟医療福祉大学）

今年3月に36年間務めた名古屋大学を定年退職し、4月から新潟医療福祉大学の心理健康学科の設置準備室長として、新潟に赴任しました。ちょうど一区切りついたところで、体育・スポーツ・健康学会の場で「引退会見」の場を与えていただき、ありがとうございました。改めて、お礼申し上げます。せっかくの機会でしたので、私自身がこれまでやってきたことを振り返り、どこへ進もうとしてきたかを、今後も含めてお話しすることにしました。と言いながらも、20代、30代前半までは遅れず、それ以降ぐらいのお話しかすることはできませんでした。

私自身にとっての大きな転機は、郷原一寿先生（北海道大学名誉教授）との出会いでした。彼は工学者なのですが、いわゆるカオスやフラクタルといった非線形物理学を専門としていました。そしてひるがの高原（岐阜県）で開かれた、ある研究会で一緒になり、私がテニスの準備姿勢と打動作の学習過程のデータを発表したところ、「基本動作パターン」というところに変化興味を示してもらいました。そして、名古屋（小牧）空港まで、車でお送りしながら、当時彼が脳の基本原理として考えていたニューラルネットワークのモデル（切替ダイナミクス）を熱く語ってくれました。今でこそ、まるで私が考えたかのように、このモデルの説明をしますが、当時は全くついていけず、別れ際に「どんな本を読んだらいいですかね？」と尋ねると、「カオスやフラクタルの本は何冊もあるけど、このモデルの本はないですからね」と言われたのを覚えています。今思えば、当然のことで、彼自身が考えた独自のモデルであって、解説書が出ているようなモデルではなく、大変失礼な質問だったと恥ずかしくなります。

そして、その後、私にとっての初めての共同研究が彼と始まり、テニスの打動作の切替に関する実験を行い、解析しては、解析結果をメールで送り、また名古屋までも来てもらい検討し、また再実験して検討するということを2〜3年繰り返しました。彼の理論的予想では、「こうなるはずだ」という結果がなかなか得られなかったのです。でも、ついに、彼と一緒に地下の実験室で解析結果を見てみると、彼が何か書き始め、「山口先生のカオスとフラクタルの本（山口昌哉・ブルーバックス）ありましたよね」というもので、研究室から本を探してくると、「ほら、これですよ」とコントロール集合の図を見せながら、テニスの実験結果とぴったりと一致することがわかり、二人とも大興奮しました。

そして、この結果を学位論文の最後の締めになしようと思っていたのですが、指導教員の吉田茂先生（筑波大学名誉教授）から、「最後はやはり現実場面へのサービスだね」と言われ、この結果に基づく学習実験をするように言われました。その時には、「もう、勘弁してくださいよ」という気持ちでしたが、今となってはこの学習実験があったからこそ、郷原先生との共同研究もより深い位置づけを得られたと感謝しています。

ここまでの個人運動スキルを「切替ダイナミクス」から見た結果ですが、その後、共同研究が広がり、剣道の試合中の動きなどを分析するようになりました。力学系理論を運動に最初に適用した HKB モデルという二連結振動子のモデルに基づき、二者の詰め引きの動きを同期現象という観点で分析しました。さらに、ここでも郷原先生に手伝っていただいたのです

が、リターンマップという分析方法で、連続力学系を離散力学系に縮約し、二者の詰め引きをアトラクタ・リペラのパターンとして表現し、アトラクタ・リペラから状態を定義し、状態遷移確率を求めることで、熟練差を説明することができました。

ただ、この二連結振動子モデルは、外部入力を持たない自励系と言われるモデルのため、個々の選手が何をしているかはわからず、「二者として」どう振る舞っているかを説明するにとどまっていた。そこで、郷原先生の「切替ダイナミクス」に基づき、二者の出力が、それぞれ他者の外部入力となるように結合すれば、二者のやり取りの中での「個として」の振る舞いがわかるのではないかと、テニスのシングルスデータに適用しました。その結果、出力である打球コース系列に規則性が見られ、その規則性に対応したコート上の動きに、最初の打動作の実験で見られたものと同様のコントロール集合の時間発展と一致する履歴現象（ヒステリシス）が見られました。さらに、この規則性の特徴を明らかにするために、コート上の選手の動きを、質量一ばねダンパ系のモデルで表すと、熟練者に見られた規則性は、完全な規則性（左右交互）でもなく、完全なランダムでもなく、その間に位置すること、さらに、中級者はよりランダムに近い系列であることがわかりました。これらの結果から、熟練した対人運動スキルというのは、環境に対する不確実性を低下させたいという他者の意図を読み取り、自らの行為の予測可能性を高めるために自らの行為系列にあえて規則性を持たせ、他者に自らの行為系列を予測させたいという、その規則性を崩すことで、他者の予測を外す行為を行うことだと考えられます。

従来、運動技能の制御・学習に関する研究は、到達運動や照準運動などの実験課題も、打動作、捕球動作、走動作などのスポーツ課題においても個人の運動スキルに着目してきたと言えます。しかしながら、実際のスポーツ場面だけでなく、日常場面においても、誰かと協調や競合を行うことは多くあります。にもかかわらず、「基本」は「個人運動スキル」で、その上に駆け引きなどの「対人運動スキル」があると考えられてはいないでしょうか。しかしながら、協調や競合が前提となっているスポーツにおける運動スキルでは、「基本」は「対人運動スキル」で、その「対人運動スキル」を実現するために必要とされるのが「個人運動スキル」と考えられはしないでしょうか。

著者略歴:筑波大学体育研究科コーチ学専攻修了、博士（体育科学）。名古屋大学を定年退職後、現在は、新潟医療福祉大学教授。「切磋琢磨」によって運動技能が向上するダイナミクスを解明したい。また、柵形門と言われる城門の防御機能を、群集流のモデルから明らかにしたいと考えている。



本大会は同志社大学今出川キャンパスにて行われ、キーノートレクチャーは大会最終日の8月31日に開催された。講師として、新潟医療福祉大学の山本裕二先生にご講演頂いた。前半部分が運動制御・運動学習について、後半部分は対人スポーツや対人運動スキルについてのお話であった。

まず初めに運動制御を情報処理の観点からクローズドスキルやオープンスキルなどを踏まえてお話し頂いた。一方で、このような情報処理の観点では、ベルンシュタイン問題や不良設定性などの様々な問題があることも同時に説明頂いた。これらの問題の解決のために、山本先生が行った実験では、野球の打撃時に打者が左右に打ち分ける場合に脚の踏み込みのタイミングなどを巧みに調整して打ち分けを行っていることを明らかにされた。つまり、連続的に運動制御を行っていることを示された。私自身が野球を行っていたため共感できる内容であった。また疑問に対して、実際に実験で検証を行う重要性も同時に感じた。私が所属する鹿屋体育大学はスポーツを行っている場面を測定しやすい環境下であるため、実験室に籠るだけではないようにしたいと感じた。

次に運動学習についてお話し頂いた。複雑に見えるスポーツの動きも単純な規則性があり、環境との相互作用で行われる点が重要であることをお話頂いた。このようなメカニズムを明らかにした後に、初心者に対してフォアハンドやバックハンドを単体で行う練習よりもこれらを交互に行わせることで上肢優位性が解消されることをお話頂いた。私自身は高校時代に野球部ではなく素振り部かと形容できるほど何も考えずに素振りを行い、スイングスピードだけは速くなったがボールに当てる能力が低くなった経験がある。このようなことから現象のメカニズムを理解し、練習することの重要性を改めて確認することができた。

後半部分の内容として、対人の動きについてお話し頂いた。まずは2人を1つのシステムと考える自励系についてお話し頂いた。この自励系についてのお話しの中で特に興味深かった内容は剣道についてである。剣道の熟練者は私たちが気づかない微細な距離の違いの中で、間合いを調整している点と熟練度合いが数式によって導くことが可能な点が興味深い内容であった。次にそれぞれの人が1つのシステムでそのシステムが結合しているという見方も可能な非自励系についてお話し頂いた。これも実際の非自励系の対人スポーツ場面であっても、規則性が実は潜んでいる点と上級者が中級者よりも規則性が高い点が興味深いと感じた。

これらのことから対人運動スキルでは熟練者は他者が他者自身のサプライズを低下させたいことを予測し、自分の行為の規則性を生成し相手に自分を予測させることで、自らの規則性を破った場合に良い結果が出ることをお話し頂いた。剣道のような、相手を騙す必要がある競技においては、まず相手と協調を行う必要がある点が非常に興味深いと感じた。また、対人スポーツではラケットやバットとボールだけでは成り立たず、これらは相手がいることで初めてそのスポーツであること、加えて時間的及び空間的な文脈を意識して考える必要があることをお話し頂いた。自分自身も野球の打撃を題材として研究を行う際には投手との対戦の中でどのような振る舞いが生まれるのかを考える必要があることに加えて、

球場やファールゾーンやフェアゾーン、ストライクゾーンといった文脈も考慮して実験を考えていく必要があると感じた。

最後に、他者と競い合って勝敗がつくような「競争」という状況を見ていく必要があること、切磋琢磨した中で新たな記録を「競創」を行うことがスポーツスキルの醍醐味であることに加えて、このスポーツスキルの研究を通して、人間そのものの成長や学習の話につながるのではないかとということをお話し頂いた。

ド文系である私は沢山の数字と数式に最初身構えていたが、最終盤では数字の虜になったかのように数式の凄さを感じた。山本先生によって数式への不確実性が低下し、予測可能なものになっている可能性があるため、今後その予測を裏切られて何も分からなくなってしまうことを避けるため、改めて数字と真摯に向き合う必要があると感じた。また、今回のお話を通じて、スポーツの1場面を切り取ってしまうと本質的に何も分からなくなる場合が存在するため、文脈や相手との関係性を適切に設定した上で考えていく必要があり、そうすることで複雑なものがシンプルなものに見える可能性があると感じた。

オンラインでの活動に加えてオフラインでの活動も比較的しやすくはなってきたため、鹿屋体育大学内で競創するだけでなく、学外の様々な方々と競創しより良いものを生み出していきたいと本キーノートレクチャー及び学会参加で強く感じた。

著者略歴: 京都産業大学現代社会学部健康スポーツ社会学科卒業。鹿屋体育大学大学院体育学研究科体育学専攻（修士課程）在学中。野球の打撃に興味があります。特に野球の打撃の困難性の要因を知覚-運動制御の面から明らかにしたいと考えています。写真は研究室から見える桜島の写真です（この風景を見るたびに活力がみなぎってきます！）



司会報告

「アスリートの誇りはどのような感情なのか ―自分らしさと誇らしさ―」

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理専門領域で取り上げられるテーマの範囲は広く、昨今社会的に関心の高いメンタルトレーニング指導などの競技心理のみならず、運動学習や社会心理、健康心理、臨床心理と広範囲にわたって研究がなされている。そのため本専門領域では例年、2つのキーノートレクチャーを聞くことができる。今回は司会者として、その1つである、近藤みどり先生の「アスリートの誇りはどのような感情なのか」を拝聴することができた。誇りという感情を扱った今回のテーマは、体育心理の広範囲なフィールドを横断するものと捉えてよいだろう。

そもそも人の「こころ」はどこにあるのかも議論が分かれるところであり、本専門領域会員に「あなたのこころはどこにあるか」と尋ねたとしても、自然科学に足場を置く会員であれば「脳」を指すだろうが、人文・社会科学を専門にする会員であれば「胸」に手を当て、こころとはすなわちハートやスピリットだと言うかもしれない。前者の多くはこころを“mental”と訳すが、後者は“psychological”と訳す場合が多い。とりわけ心理学者は、見えないこころを研究するために、行動の背景に「心」という機能を仮定することで調査を行ったりしている。しかし一方で生身の私たち自身は、こころの動き、すなわち日々揺れ動く「感情」により、自身の中には見えないながらも確かにこころがあると実感している。このことから感情を扱った近藤先生の話提供は、体育・スポーツ心理学研究の中でも、こころのより本質や実感に迫る重要なテーマと言える。

さてキーノートでは、近藤先生の自己紹介に始まり、誇りの全体像に触れ、続いてアスリートは何に誇りを感じるのか、そして誇りはどのような感情体験なのかについて、具体的な調査データをもとに、ストーリー仕立てで紹介された。誇り感情についての先行研究の多くは北米で行われたものが多く、誇りという“hubristic”、すなわちうぬぼれのような「自己過大感」のイメージがあるが、本邦のアスリートを対象とした近藤先生の研究では、それ以外にも「自他肯定感」「高揚感」「充足感」から構成されることを明らかにした点が興味深い。また、競技での卓越を志向する中で生まれる自分らしさに対する誇りが、自身の殻を破って新たな自分を創造することにつながるといった自己成長に関する考察は、「守破離」のイメージを彷彿させるものであり、アスリートの心理臨床に携わる筆者には、彼らの個性化のプロセスをよく描写しているように感じられた。

近藤先生は大学卒業後、結婚・育児などをしながら長くテニスコーチをされてきた実践家である。体育・スポーツ心理学に興味を持ったことから大学院に進み、大阪体育大学にて博士（スポーツ科学）の学位を取得後は国立スポーツ科学センターに勤務されている。誇りを胸に世界と戦う我が国のトップアスリートに対して、誇りをもって心理サポートを行っている実践家（Scientist-Practitioner）であり、今回のテーマはまさにそんな心理サポートの現場で着想を得た、オリジナリティの高いものであった。

冒頭に述べた通り、感情は心理学研究の中でも領域横断的なテーマになりうるものである。また、感情はこころとからだをつなぐ最も重要な心理的機能の1つであることから、今後体育心理専門領域においては新たな分野として、「感情スポーツ心理学」のような研究が活性化することを願っている。タイ

ムリーなことに令和6年5月31日～6月2日には、本専門領域会員でもある手塚洋介先生が実行委員長を務める第32回感情心理学会が、大阪体育大学にて開催された。そこでは、僭越ながら筆者が「スポーツ感情心理学への期待」と題して特別講演を行い、シンポジウムでは「アスリートの感情」と題して、近藤先生に加えて本専門領域会員である田中美吏先生（武庫川女子大学）、相羽枝莉子先生（横浜国立大学）が登壇して議論がなされた。このことから、本キーノートレクチャーが、体育心理専門領域における感情研究活性化の起爆剤になることを期待している。

最後に個人的な学びを述べておきたい。筆者はこれまでも近藤先生とはトップアスリートへの心理支援、さらにコーチへのメンタリングを行うコーチデベロッパーとして活動を共にする機会を得てきた。もともと博士課程の指導教員という立場でお付き合いが始まったが、年齢こそ近いものの、コーチとしてのキャリアは質・量ともに近藤先生の方が圧倒的に上である。にもかかわらず常に謙虚で、周囲から学ぼうとする姿勢を持ち続けていながら、自他肯定感や充足感に満ちた近藤先生の誇り高い取り組みを見るにつけ、誇りには前述した“hubristic”な面だけではなく、“authentic”な側面のあることを強く実感してきた。そのため、今回のキーノートの内容には得心することが多く、また近藤先生の他者から学ぼうとする姿勢に、指導教員としても多くを学ばせていただけてきたことを改めて感じたキーノートであった。

当日会場には、コーチ仲間、あるいはコーチデベロッパーの仲間たちであろうか、体育心理専門領域以外からも多くの参加者に来場いただき、短い時間であったが誇り感情のコーチング現場での活用などを巡って有意義なディスカッションを行うこともできた。体育心理専門領域の一員として、学会大会においてすばらしいキーノートを提供することができたことを、大変誇らしく感じた時間であった。

著者略歴：筑波大学体育科学研究科修了。博士（体育科学）。中国復旦大学留学、筑波大学技官・助手を経て、現在は大阪体育大学教授。日本スポーツ心理学会理事長、公認心理師・スポーツメンタルトレーニング上級指導士。スポーツカウンセリングを専門とし、アスリートへの心理支援を担当。剣道七段。



演者報告

「アスリートの誇りはどのような感情なのか ―自分らしさと誇らしさ―」

近藤みどり（国立スポーツ科学センター）

「誇りを胸に戦う」スポーツニュースなどで時折目にするこの言葉から、皆さんはどのようなイメージを持たれるでしょうか。誇りは、社会の中でより良くあろうとする私たちの欲求に支えられた社会的感情です。感情は環境に適応するために、進化の過程で私たちに備わった心の働きだとする適応論では、誇りには社会的地位を高めるための行動を動機付ける機能があると考えられています。誇りは快感情故に、誇りの経験がその行動を強化するように働きます。これまで、誇りを感じると成功のために重要な自己コントロール、勤勉さ、粘り強さなどが向上することが明らかにされています。冒頭の言葉には、どうやら誇りを持つことで逆境でも諦めることなく最後まで戦えるというメッセージが込められているようです。しかし、誇りと言っても、その感情体験は様々です。多岐にわたるアスリートの誇りの感情体験を分類整理して理解することができれば、誇りの個人差によって異なる行動傾向を予測できます。キーノートレクチャーでは、そもそも「アスリートの誇りはどのような感情なのか」について、全体像を概観したのち3つの視点からお話させていただきました。

大学生アスリートの誇りのエピソードをまとめると、誇りは自己の誇り以外に、先輩がプロで活躍しているなど他者の誇りや、伝統あるチームに所属しているなど集団の誇りに整理されます。そのうち、他者の誇りや集団の誇りは同一視による代理体験であることから、以降は自己の誇りに絞って知見を紹介しました。第一にアスリートが何を誇りに思うのかについては、①他者からの支援やチームメイトとの仲の良さなど他者と良好な関係にあること、②困難に耐え、目標達成のために努力すること、③アスリートであること、そして④他者より優れていることを示しました。日本は集団主義文化に属し、個人の利益より他者との調和や協調が重視される傾向にあります。個人主義文化圏である北米で発展した誇りの研究では、個人の成功に焦点が当たるのに対して、他者との関係に焦点が当たり誇りを感じる点は興味深い結果だと思います。他者との関係に誇りを感じやすいアスリートは、「恩返し」に象徴されるように他者の期待に応えようとする他者志向的な達成行動が動機付けられるかもしれません。第二に誇りはどのような感情体験なのかについては、①‘自分らしい’‘名誉のある’など自他ともに肯定的が高まった「自己肯定感」、②‘うきうきした’‘挑戦的な’など気持ちが高揚した「高揚感」、③‘うぬぼれた’‘自画自賛の’など自己を過大に評価した「自己過大感」、そして④‘やりきった’‘解放感’など精神的に満たされた「充足感」であることを示しました。中でも「自己過大感」は自分の有能さを誇示し、肯定的な評価を得ようとする遂行接近目標や、自分の無能さが公になる事態を避け、否定的な評価を回避しようとする遂行回避目標と関連する可能性が考えられます。達成行動に正の影響も負の影響も与え得ることから、今後の研究に期待したいところです。第三に日本を代表するトップアスリートへのインタビューから、誇りが人を成長へと導く可能性について示しました。社会的階層構造を前提とした議論では、誇りの機能はもっぱら権力や影響力を手にするべく社会的地位の向上という「成功」への動機づけに集中しているように思われます。もちろん、競技スポーツでは勝利と言う「成功」を手にすることが活動の目的であり、その意味で誇りが担

う役割は大きいと言えるでしょう。しかしながら、トップアスリートの語りからは、「成功」により社会的に高い評価を得たことで感じる誇らしさが、さらなる「成功」を動機づけることだけでなく、成功の過程で見つけた自分らしさに対する誇りが自分自身の殻を破って新たな自分を創造すること、すなわち「成長」を動機付けることも見出されています。誇りは他者の目を通して自己が意識されたとき生じる自己意識的感情ですが、他者の目（社会的評価）に偏重することなく、深く自己を理解することで感じられる肯定感がより本源的な誇りだと筆者は考えています。

この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。学会の開催地であった同志社大学は母校であり、非常に感慨深い気持ちで、レクチャーに臨みました。発表の機会をくださった体育心理学領域の先生方、ならびに大会を企画・運営してくださった先生方、そしてご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。

著者略歴：大阪体育大学大学院修了。博士（スポーツ科学）。2022年4月より現職、心理研究員としてトップアスリートの心理支援および研究に従事する。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士。日本スポーツ協会認定コーチデベロッパー。関西テニス協会医科学委員。現在の研究での興味は、



誇りの個人差による目標達成行動の差異。誇りを感じるによって、どのような達成行動が促進されるのか、あるいは抑制、回避されるのかについて研究を進めている。

この度、近藤みどり先生（国立スポーツ科学センター）のキーノートレクチャーを拝聴した。はじめに、近藤先生ご自身が研究者を志すまでの道のりや熱い思いが語られた。近藤先生は、これまでの競技スポーツ現場での実践経験から研究を展開され、現在、研究活動や現場のサポート活動を含め多岐に渡りご活躍されている。

レクチャーの冒頭では、誇りの実験で有名な Williams & DeSteno (2008) の研究が紹介された。先行研究の結果からは、誇りを感じると、「勝ちたい」「もっと上手になりたい」という意欲が増すことが推察されるが、そこで近藤先生はそもそも“誇りとはどのような感情なのか”といった疑問を抱いたそうである。競技スポーツの文脈では、「誇りを胸に戦う」という言葉に象徴されるように、アスリートが誇りを感じることは良いものとされ、実際に誇りを感じる状況は多くあるように見て取れる。一方で、アスリートの誇りの感情の正体や概念構造を解明するような基礎研究は、これまでにあまり行われていない。そこで近藤先生は、“アスリートの誇りはどのような感情なのか”に対する解を導くべく、3つの Topics を立てていた (Topic 1: 大学生アスリートの誇りの全体像, Topic 2: 大学生アスリートは何を誇りに思うのか, Topic 3: 誇りはどのような感情体験なのか)。

まず、近藤先生は、心理学領域で定義されている誇りとは、社会的感情に分類される自己意識的感情として位置づけられていると述べた。また、誇りを体験すると、セルフコントロールを高め、長期目標の達成に向けた行動が動機づけられるという知見を紹介した。その他の先行研究も踏まえて、近藤先生の研究では、感情は社会・文化に基づいた状況についての認知評価や人間関係のあり方、価値や規範などによって構築されるという社会構成理論に立脚し、誇りの感情の概念構造を明らかにすることを目的としている。

Topic1 では、大学生アスリートの誇りの感情体験の全体像を把握し、特徴を探った研究の成果が報告された。質的調査法を用いて、個人の主観的感情体験の事例などの感情エピソードを収集し、誇りの典型的な感情体験を整理・抽出していくという手順が踏まれていた。Topic 2 では Topic 1 の質的調査を踏まえ、誇りの感情体験の個人差（誇りの特性）を測定する尺度作成の研究の成果が報告された。因子分析の結果、4つの下位尺度（他者との関係、忍耐・努力、競技者アイデンティティ、優越性）から成る尺度が開発された。また、Topic3 では認知言語的アプローチに基づき、インタビュー調査から誇りの感情語を収集し、感情体験の構造を実証した研究の成果が報告された。ここでは、探索的因子分析により、4つの因子（本来感、高揚感、優越感、充足感）が抽出された。そして、この4因子の得点は、Topic 2 で明らかにされた特性誇りを想定したシナリオ条件によって異なることを示した。

競技スポーツは、必然的に勝敗がつくため、どの競技レベルにおいても、優越感が生じやすい場面の一つであると捉えることができる。優越感は、勝利体験や、他者との比較、過去の自分との比較などによって生起するものであると経験則的に感じるが、Topic 3 で報告された研究成果からも、この「優越感」が誇りの下位概念として存在することが示された。最後に、これらの3つの Topics をテーマとする研究の成果を踏まえ、

現在、近藤先生が取り組まれている研究について紹介された。

近藤先生のお話の中で、誇りを体験することで更なる成功を目指すよう動機づけられるという先行研究が紹介されたが、これらを踏まえて、アスリートにおいてはどのようなのだろうか？といった疑問を抱かれたそうである。さらにこの疑問が、誇りの経験による長期的な目標達成への動機づけは、「成功」を目指すだけの動機づけなのか？といったリサーチクエスチョンへと発展し、誇り感情の体験が、競技を超え、人間的成長や新たな自己探求に繋がるかどうかについて、検討を進めていると報告された。このお話を拝聴し、競技スポーツを通して誇りの感情を体験すると、目標へ向かって長期的に努力するよう動機づけられる感覚が備わり、その経験から、競技スポーツ以外のことでも誇りの感情を体験することで、目標へ向かって努力する態度に繋がる可能性があると考えた。そして、これはトップアスリートに限った話ではないであろうと考える。これらのことが立証されれば、実際の競技スポーツの現場において、誇りの感情体験を促すコーチングやメンタルトレーニングが、その競技者のスポーツライフを超え人生そのものを豊かにするためにも、重要なアプローチであると言える。

近藤先生のレクチャーが終了すると、フロアから、「メンタルトレーニングやコーチング等の現場を想定すると、今回発表された基礎研究がどのように発展されていくのか」という質問が出た。これに対しては、目標が達成される過程で、誇りがどのように変化するのかを縦断研究で進めていると述べた。これらの議論を拝聴し、誇りの感情体験の蓄積が、競技スポーツに加え、体育実技授業やメンタルトレーニング、リハビリテーションなど多岐渡る場面で、長期的な目標達成に向けた動機づけに繋がると考えた。また、スポーツ心理学領域で感情研究が果たす役割の大きさや感情研究の広がりの可能性を改めて感じると同時に、今回お示しいただいた基礎知見は、スポーツ心理学領域の感情研究に、強い刺激を与えてくださったように感じた。

本来であれば質疑応答の時間は設けられていないため、発表時間内での議論は短時間であったが、司会の土屋先生が会を閉じた直後、近藤先生の前には、あっという間に質問者の列が出来ていた。これは、多くの研究者が、誇りの感情の概念構造を明らかにされた近藤先生の研究の今後の発展や、現場への還元を、心待ちにしていることの表れだろうと考えた。

末筆ながら、この度は、多くの研究知見に関する貴重なお話をいただきました近藤みどり先生に、厚く御礼申し上げます。

(引用文献) Williams, L. A., & DeSteno, D. (2008) Pride and Perseverance. The Motivational Function of Pride. Journal of Personality and Social Psychology, 94, 1007-1017.

著者略歴：九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻博士後期課程修了博士（心理学）。北九州市立大学、長崎国際大学を経て、現在は横浜国立大学に所属。スポーツ競技者の感情制御に関心があり、最近では感情制御とパフォーマンスの関連について研究している。



大会最終日である9月1日（金）に、専門領域別研究発表の体育心理学/口頭発表2が開催されました。僥倖ながら、私が3演題の座長を務めさせていただきましたので、ご報告申し上げます。

1 題目は、「A comparative study of personality traits of athletes and non-athletes of male intercollegiate students—Sports Psychology- Personality—」というテーマのもと、University of MumbaiのMane Manohar先生が発表されました。本発表は国際交流協定学会から招聘された先生のご発表であり、Mane先生はインド体育スポーツ科学学会（National Association of Physical Education and Sports Science）からお越しくださいました。本演題では、インドの男性アスリートと非アスリートを対象とし、パーソナリティ特性の比較を行った研究の成果が発表されました。アイゼンク性格検査を用いて調査を行った結果、精神病的傾向においては有意な差が認められたものの、神経症傾向や外向性といった他の下位尺度では、アスリートと非アスリートの間に、有意な差が認められなかったことが明らかとされました。また本研究の結果に基づき、今後は種目差や女性アスリートを対象とした検討が必要であることが示唆されました。アスリートが有するパーソナリティ特性の特徴や、非アスリートとの違いに関する研究は、これまで国内外を問わず、数多く報告されています。しかしながら、本発表を拝聴する中で、相互作用論的な観点から、置かれた環境だけではなく、より高次のシステムとも言える文化や風習などの影響についても、考慮することの重要性を痛感いたしました。また、本大会が開催された2023年は、新型コロナウイルスの感染拡大がようやく収まり始め、コロナ前の社会活動が少しずつ戻ってきた状況であり、このような状況の中で、今回のように、国外の先生とディスカッションを行うことが出来る機会は大変貴重であると、改めて感じました。

2 題目は、「大学スポーツチームを対象としたチームビルディングプログラム実施による効果の検討」というテーマのもと、石巻専修大学の稲葉健太郎先生が発表されました。本発表では、近年スポーツ領域で注目され始めている、心理的安全性とアスリートエンゲージメント、共同作業認識を取り上げ、大学生スポーツチームに対してチームビルディングを行った成果が紹介されました。硬式野球チームにチームビルディングを実施し、統制群との群間比較を行った結果、上記の変数の変化に対するチームビルディングの有効性が報告されました。これまで、チームビルディングの有効性に関する先行研究は、国内外を問わず広く報告がなされています。しかしながら、時代の変化とともに、アスリートやチームが求めるアウトカム：成果・効果も当然、変化していくことが予想されます。そのため、既存の研究成果のみに注目するだけではなく、常に新たな効果や取り組みの有効性を検討することは、現場が求めるニーズに応え、エビデンス・ベースドなメンタルトレーニングを実現するためにも必要な活動であると、本発表を通して感じました。

3 題目は、「価値の明確化・キャリア探索行動とキャリアレディネスとの関連性の検討—大学運動部に所属する学生アスリートを対象に」というテーマで、並木伸賢先生が発表されました。本発表は、大学生アスリートのキャリア探索と価値の明

確化が、キャリアレディネスにどのように関連するのかを検討した研究です。本研究の結果、価値の明確化がキャリアレディネスと関連し、キャリア探索の環境探索もまた、キャリアレディネスに関連するものの、自己探索とは直接的な関連性が確認されないことが報告されました。加えて、上記の結果に基づき、キャリア探索の自己探索が価値の明確化と環境探索に関連し、キャリアレディネスに関連するという間接的な関係性を仮定したモデルによる再分析が行われたところ、基準値を満たすモデルの適合度が示されたことが説明されました。このような研究の結果から、アスリートのキャリアレディネスに繋がる過程を説明するモデルが提案されたこと、このモデルに基づく支援の重要性が示唆されました。アスリートに対するキャリア支援の流れも年々、変化している昨今のスポーツ界において、アスリートのキャリア構築にも貢献する方策として、価値のワークやキャリア探索行動に注目する取り組みの重要性を示唆する知見であると感じました。

以上のように、3名の先生方から、国際的または最新の研究知見を共有していただくことができ、体育心理学という専門領域で実施される研究の、幅広い新規性と独創性の高さを改めて認識する機会を得ることが出来ました。演者の先生方に、貴重な成果を共有していただけたこと、深く御礼申し上げます。またフロアの先生方には、限られた時間の中で、英語・日本語を問わず、数多くのコメントをいただきました。先生方の積極的なご参加に感謝申し上げますとともに、時間の関係で、ご質問があるにもかかわらず、マイクをお回しすることができなかった先生方には、この場をお借りしてお詫び申し上げます。また、素敵な大会を運営して下さった大会関係者の皆様にも、心より御礼申し上げます。

昨今の学術的な研究活動の評価軸として、以前から重視されている「新規性」や「国際性」に加えて、「学際性」が重視されますが、同じ領域の研究者の中で連携を強め、そこから他領域とのより大きな規模での連携を図ることが、「学際性」を実現するうえで重要なステップであるようにも感じます。体育心理学領域における口頭発表の機会は、そのような「学際性」に繋げるための、体育心理学領域の中での先生方の繋がりを強める機会でもあるのだと、改めて考えました。末筆となりますが、この度はこのような報告の機会をいただき、誠に有り難うございました。

著者略歴：筑波大学体育系助教、臨床心理士、公認心理師、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士。筑波大学大学院博士後期課程修了（博士：体育科学）。研究課題として「健康と実力発揮のためのマインドフルネス・プログラムの開発と実践」や「アスリートのメンタルヘルス」を中心に研究を行っているが、最近はメタバースなどの仮想空間を活用した研究も進めている。



本セッションは、パフォーマンスに影響し得る心理的要因、スポーツ心理学の知見に基づく心理支援の介入事例や、尺度を用いたアスリートの心理的競技能力の測定及びその活用可能性など、スポーツ現場における実践的な研究の発表でした。心理学領域のみならず、コーチングや医科学サポートに携わる先生方や大学院生が多くご参加くださり、それぞれのご専門やお立場から積極的に質問やコメントをご共有頂きました。また2演題がインドのスポーツ現場における心理支援や介入に関する発表であり、質疑応答でのディスカッションを通して国際的動向についても理解が深まる時間となりました。

一つ目の演題は、Dr. Deepak Ram Bairy (NAPESS, Deputy Director of Physical Education Mahe Manipal) による「A Study on the Influence of Psychological Factors Affecting Physical Performance—Role of psychological factors affecting physical performance—」でした。まず発表の冒頭に、本学会大会で発表されている研究テーマの多様性や独自性について触れつつ、各セッションにおける研究者同士の活発な議論の様子など、学会大会に参加して感じられた印象と共に、運営事務局・運営スタッフへの感謝の言葉が述べられました。発表では、インドのスポーツ教育や競技スポーツ支援において広く認識されている心理的要因の重要性を挙げ、その中でも特に主要であると認識されている概念について丁寧に紹介されました。スポーツにおける身体的パフォーマンスに影響を与える重要な要因として、アスリートの性格、知能、態度、動機、攻撃性、覚醒と活性化、不安、注意と集中、心的イメージ、集団力学などを挙げ、インドのスポーツ現場における現状の課題やアスリートそれぞれの個人差や競技種目を考慮した教育や支援的介入の必要性が述べられました。（写真1）



二つ目の演題は、Dr. Meena Nivrutti Pawar (National Association of Physical Education & Sports Science) による「Effect of meditation on mental toughness and sport competitive anxiety among Indian tribal archer—Meditation, Mental-Toughness, Sports Competitive Anxiety, Archery—」でした。アーチェリー選手20名を対象とする6週間の瞑想プログラムを導入した群における介入前後のメンタルタフネスと競技不安の変化が示され、瞑想を中心とした心理介入の有用性について述べられました。フロアでは瞑想プログラムに興味を持たれた方が多く、プログラムの具体的な内容、介入前後での効果測定法、参加者の感想について詳細に尋ねる質問が挙がりました。Dr. Pawarからは瞑想プログラムにはヨガの訓練や考え方が多く取り入れられていることや、カパラバディと呼ばれる呼吸法などが紹介されました。アーチェリーは特に心理状況がパフォーマンスに大きく影響し得る競技であることから、心身のコントロール法を身につける重要性は認識されているものの、競技者が実践的にスキルを習得するための指導とその科学的根拠となる知見の必要性を感じていることなど、研究の背景も共有されました。Dr. Pawarはヨガの実践者及び指導者でもあることから、本研究を通して得られた

知見を基にアスリート教育や心理支援においてもヨガの瞑想プログラムを積極的に取り入れていくことを目指し、その為の研究の展望についてもお話しされました。ヨガというインドの競技者にとって比較的馴染み深い手法を導入し、工夫されている実践者としての姿勢が印象に残りました。

本セッションの最終演題は、松山博明先生(追手門学院大学)による「ドイツ連邦共和国と日本サッカーの心理的競技能力の比較研究—ブンデスリーガU21選手に着目して—」でした。日本で広く用いられている心理的競技能力診断検査をドイツで活動するサッカー選手を対象に実施した調査結果から、日本人選手の特徴との比較を基に国外で活動するサッカー選手の特徴を捉えようとする試みが紹介されました。フロアからは、得られたデータの詳細や尺度についての質問が挙がりました。心理的競技能力診断検査の英語翻訳版ではなく、ドイツ語に翻訳して使用することの意義などについてディスカッションが発展し、今後の研究の課題についても様々な意見が交わされました。松山先生からは、ドイツで活動する選手の心理的特徴を捉えるための基礎的な調査であり、今後データ収集を重ねて更なる知見蓄積に繋げていく予定であると、今後の研究の方向性が述べられました。

三演題ともあっという間に質疑応答の時間が過ぎ、スポーツ心理学を援用した教育や実践について多角的に考える事が出来た時間でした。セッション前に Dr. Bairy, Dr. Pawar とお話する機会があり、インドにおけるスポーツ参加の現状や教育現場の課題、アスリートやスポーツチームを対象とした心理サポート活動の実態について教えて頂きました。スポーツ現場における指導者と選手の関係性に関する問題や女性アスリートの育成や女性コーチの活動支援など、近年日本のスポーツ現場においても議論されるテーマのお話を伺い、国際学会などにおいて国内外の研究者及び実践者との意見交換を重ね、視野を広げて研究に繋げていくことの重要性を改めて感じる事が出来ました。

三名の先生のご発表及びフロアとのディスカッションより、現場で心理支援や介入研究についての理解を深め、貴重な学びの機会となりました。各演題の発表について様々な視点から積極的に質問やコメントを共有し、活発な議論の場を盛り上げてくださったフロアの諸先生方に感謝申し上げます。最後になりましたが、初めての座長で不慣れな進进行を、手厚くきめ細やかにサポート頂きました会場運営スタッフの皆さま、またこの度貴重な機会を頂きました事務局の先生方に厚く御礼申し上げます。

著者略歴：同志社大学文学部心理学科卒業後、University of Portsmouth, MSc. Sport and Exercise Psychology, 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程修了。博士（スポーツ科学）。2018年～共立女子大学文芸学部所属。研究テーマは、スポーツにおけるソーシャルサポート。



専門領域別研究発表『体育心理学』の口頭発表会①は、大会最終日の15時10分から16時9分の時間帯で行われました。本セッションは、バラエティに富んだ3演題で構成されました。座長を拝命いたしましたので、この内容について、私自身の理解が不足している点もあるかもしれませんが、報告させていただきます。

一演題目は「アスリートの反芻・省察が Acceptance & Commitment Therapy (ACT) におけるコア・行動的プロセスに及ぼす影響」(内川義弘1, 高井秀明2 (1 日本体育大学大学院体育学研究科, 2 日本体育大学体育学部)), 二演題目は「日本人大学生アスリートはどのような場面で心理的安全性を認知しているのか? 性差による特徴」(松原旭飛1, 高井秀明2, 浦佑大3, 折茂紗英1, 内川義弘1 (1 日本体育大学大学院, 2 日本体育大学, 3 環太平洋大学)), 三演題目は「自分に自信がないと訴えたアスリートが歩んだ成長のプロセス」(野村美穂, 豊田則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)) でした。

まず、内川先生はACTにおける価値づけ・コミットメントを促す、或いは抑制する要因としてのパーソナリティ特性である反芻・省察に着目した研究の結果を報告しました。そこでは、認知的フュージョンの媒介効果を仮定し、反芻・省察が価値づけ・コミットメントに及ぼす影響について検討されました。既存の尺度を使用した質問紙調査を実施し、データを解析した結果、仮設モデルの適合度指標は概ね基準を満たしたことが示されました。また、反芻は認知的フュージョンを媒介して、価値づけコミットメントを阻害すること、省察は、価値づけ・コミットメントに直接影響することと、脱フュージョンを介しての間接効果は弱い正の影響があることが示されました。以上の研究成果は、今後、アスリートのパフォーマンス向上に主眼を置いた、メンタルトレーニングを確立するための有益な知見となるものであり、スポーツ現場にこのような知見が還元される日を期待しています。



二演題目では、松原先生が、大学生アスリートがスポーツの文脈で心理的安全性を認知している場面の性差について検討を行った成果を発表されました。そこでは、大学生アスリートに心理的安全性の認知に関して自由記述で回答を求め、その回答をKJ法によって解析した結果が報告されました。まず、男女問わずスポーツの文脈における心理的安全性を認知する上で重要な要因として、「パフォーマンス評価」「組織風土」「充実した競技環境」「情緒的サポート」「競技街の時間」の5つのカテゴリーが生成されたことが報告されました。続いて、男子大学生アスリートは、競技パフォーマンスに関する内容を捉えることが心理的安全性を認知する要因になりやすく、女子大学生アスリートは、周囲の他者との情緒的なつながりを捉えることが心理的安全性を認知する要因になりやすいといった、心理的安全性の認知の性差が報告されました。日々刻々と変化していくスポーツ環境の中で、アスリート自身や周囲の他者が、心身の安全・安心を確保していくことは極めて重要な課題です。そういった中で、本研究の結果では、性差を加味した質的研究手法による丁寧な検討が行われ、スポーツの文脈

における心理的安全性の概念が整理されたように感じ、今後更なる発展や広がり期待される興味深い研究でした。

最後の演題では、野村先生によって、「自分に自信がないと訴えたアスリートはどのような成長プロセスを辿るのか」というリサーチクエストンに対し、複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて検討した研究成果が報告されました。ここでは、「自分に自信がない」などの悩みを抱えた1名のアスリートから得られた発話データを、TEAによって解析し、検討がなされました。この結果、「自分を見失い迷走する段階」「不調の要因に気づき悩み続ける段階」「自分の役割を果たすことに集中できる段階」と、3つの段階を辿っていることが確認されました。このような研究の結果から、1) TEAによる多角的な視点から個人の成長を可視化することによって個人の理解を深めることができる、2) 個人の理解を深めることは、今後のメンタルトレーニングを実践していく上で有益である、などの有益な仮設的知見が導き出されました。本研究は、1名のアスリートにおける心理的変容過程を多面的かつ丁寧に検討した大変興味深い研究であり、発表を拝聴しながら、個別性を追求して深い意味を見出すことの重要性和面白さを改めて感じることができました。

末筆となりますが、研究発表及びフロアの先生方と発表者のやり取りから、貴重な学びの機会をいただきました。発表された3名の先生方と会場に足を運んでくださった先生方、並びに会場運営をしてくださったスタッフの皆様はこの場を借りて厚くお礼申し上げます。



著者略歴：城西大学経営学部助教、九州大学大学院修了、博士（心理学）、九州栄養福祉大学助教、熊本学園大学講師/准教授を経て、現職。現在は、「イップスの評価方法の確立」と「イップスの悪化要因及び効果的な予防法の解明」を主たるテーマとして、他大学の先生方と学際的な研究を進めている。



大会最終日 16 時 15 分より開始された口頭発表③セッションの座長報告を致します。本セッションでは 4 つの演題が予定されていましたが、1 演題がキャンセルとなり、最終的に 3 演題の発表が行われました。以後、発表が行われた演題に関する報告を致します。

まず 1 つ目の演題は、山梨大学大学院の越水悠介先生による発表で、発表のタイトルは「四足歩行哺乳類の歩容類型における杖を用いたヒトの歩容の位置づけ」でした。発表の内容は、ヒトがトレッキングポールを使用した際の歩容が、馬やラクダ、サルといった四足歩行動物の歩容とどのように類似するかについて検討されたものでした。実験室内および実験室外のハイキングコースにおいて、錘の入ったザックを背負った状態で段を登った際のヒトの歩容を分析した結果、馬、ラクダおよびサルが示す歩容のうち、馬に近い歩容であることが報告されました。ただし、ハイキングコースにおいて段差が大きくなった場合には、サルと同様に足をストックの近くに置く歩容も確認されたとのことでした。15 分間にわたる研究内容の説明後、会場からの質疑応答に移り、「トレッキングポールの高さの選定基準」に関する質問や「下り坂を歩く際の歩容」に関する質問などが出されました。本研究は、二足歩行であるヒトがトレッキングポールを使用する状況を四足を用いているように見立て、馬やサルなど四足歩行の哺乳類との比較を行っており、その着眼点はとても独創的であると感じました。本研究テーマが将来的にどのように発展していくのか、今後の研究発表が楽しみです。

2 つ目の演題は、芝浦工業大学大学院の佐藤広歩先生による発表で、発表のタイトルは「ダーツ投擲における心理的プレッシャーが上腕部の筋活動量及び前頭前野の脳活動量の左右差に及ぼす影響」でした。発表の内容は、ダーツ投擲を運動課題として、心理的プレッシャー条件および非心理的プレッシャー条件を設定し、ダーツ投擲に関わる脳活動および筋活動、ダーツスコアを両条件で比較検討されたものでした。非プレッシャー条件に比べて、プレッシャー条件で右背外側前頭前野（rDLPFC）の活動が大きかったことが報告され、この結果を「接近-回避」の枠組みにおける回避反応に関連づけた考察が為されました。15 分間にわたる研究内容の説明後、会場からの質疑応答に移りました。会場からは、「心理的プレッシャーの操作チェック（例えば、心拍数による操作チェック）」に関する質問などが出されました。本研究は、心理的プレッシャー下におけるダーツ投擲に関して、筋活動および脳活動という生理学的指標に着目した研究ですが、特に脳活動に着目している点は、体育・スポーツ心理学の重要なテーマのひとつである「チョーキング」の神経科学的な機序の理解に寄与するものと考えられます。今後のさらなる研究の発展が期待されます。

3 つ目の演題は、東京大学の小笠原倫汰先生による発表で、発表のタイトルは「陸上競技長距離走の授業における目標ペース変動練習の効果」でした。発表の内容は、体育・スポーツ心理学でよく知られる「変動練習」を長距離走に適用し、目標ペース走の学習および長距離走タイムへの影響について検討されたものでした。事前テストでの長距離走タイムに応じて各生徒の目標タイムを設定し、目標タイムを固定して練習させる群（F 群）と目標タイムを変動させて練習させる群（R 群）に生徒を分けることで、変動練習の効果を検証するという実

験デザインでした。実験の結果、いずれの群でも目標ペース再生の学習が確認され、また F 群に比べて R 群で有意な長距離走タイムの短縮を示したことが報告されました。これらの結果は、長距離走の練習におけるペース再生練習の有用性を示すものであり、特に目標タイムに変動を組み込むことの肝要さを示唆しています。15 分間にわたる研究内容の説明後、会場からの質疑応答に移りました。会場からは、中学校での測定における「倫理的配慮」に関する質問などが出されました。本研究は、実験室を中心に検証が重ねられてきた練習法の理論を、中学校の教育現場で検証した研究であり、体育・スポーツ心理学の理論と実践をつなぐ非常に重要な研究だと考えられます。体育・スポーツ心理学でよく知られる練習法の理論が、教育現場など実践的場面でどのように活かされ得るのかという視点に立つと、実践的場面では未検証の理論が多くあることから、今後の研究の発展が大いに期待されます。

今回、座長を務めるにあたり、各発表演題に対して事前に下調べを種々行いましたが、これまでに読んだことの無かった文献を読む機会に恵まれたことや、研究テーマの多様な着眼点や発想の独創性に触れることができたことは、私自身にとって大きな学びの場となりました。

一点、残念だったのは、本セッションが大会全体を通して最終日最後のセッションであり、会場におられた参加者の人数がやや寂しかった点です（遠方の先生方にとって、旅程上、参加が難しい時間帯だったのかもしれませんが）。それでも、会場におられた参加者からは多様で示唆に富んだ質問を種々出して頂き、質問への回答も含めて、研究における議論の重要性を再確認した場ともなりました。今後の学会大会において、口頭発表のセッションがもう少し早い時間帯で実施されると、当該セッションへの参加者数が増え、さらに活発な議論が展開されるのではないかと思います。

なお、本セッションの会場では、石倉忠夫先生（同志社大学）が会場の運営を担当されており、演題キャンセルに伴う諸対応はじめ、石倉先生には種々のサポートを頂きました。また、タイムキーパーやフロアマイクの係員はじめ、他のスタッフの方々にもサポートを頂きました。ここに感謝申し上げます。

最後になりますが、今回このような貴重な機会を頂いたことに専門領域関係者の皆様に感謝を申し上げるとともに、ご発表を頂いた先生方および会場で質問や意見を頂いた先生方にも円滑なセッションの運営にご協力頂いたことに、心より感謝申し上げます。

著者略歴：京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。大阪体育大学体育学部助手を経て、現在、日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科准教授。ヒトや物体の運動における物理的特性の知覚や推論、またそれらに応じた行動の制御について最近興味があり、実験的に検証を行っています。



2023年8月30日-9月1日の期間に開催された、日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会において「直線狭路における自転車走行中の頭部動作と眼球運動の相互相関」というテーマのもと、ポスター発表を行わせていただきました。今回、演者報告の機会をいただきましたので、発表および質疑応答内容についてご報告させていただきます。

本発表では、自転車走行中に発生する視野のブレを補償する眼球運動について検討を行いました。視野の安定性を補償する眼球運動として主に視機性眼球反応 (Optokinetic Response, 以下 OKR) と前庭動眼反射 (Vestibulo-Ocular Reflex, 以下 VOR) が挙げられます。OKR は、網膜上を移動する像が刺激となり、像を追従する緩徐相と眼球位置を瞬時にリセットする急速相が発生します。一方、VOR は頭部の動きが刺激となり、頭部と逆の方向に眼球が動きます。先行研究において自転車走行中に OKR が発生すると報告されていますが、眼球運動測定装置による測定に限られていたため、眼球運動に対する頭部の動きの影響は不明です。そこで、眼球運動と頭部動作を同時に測定することにより、自転車走行中に OKR 成分と VOR 成分のどちらが優位にはたっているか検証しました。

自転車競技経験のない19名の実験参加者は、グラス型の眼球運動測定装置およびワイヤレスモーションセンサーを付着したヘルメットを装着し、一般的なシティサイクルに乗車しました。課題は幅12cm、長さ30mの木製の板上をなるべく逸脱しないように走行することとしました。垂直方向の頭部動作を Head pitch、垂直方向の眼球位置を Eye position とし、相互相関係数を算出し、ラグがゼロの値を評価しました。

結果として、まず19名中16名の Eye position のグラフに OKR 成分を示すと考えられる鋸歯状の波形が確認されました。次に相互相関分析の結果、16名のうち過半数(11名)が正の相関、数名(3名)が負の相関を示しました。負の相関は頭部と眼球が逆方向に動いていることを示しており、VOR 成分を示していると考えられます。このことから、自転車走行中に VOR 成分が小さく、OKR 成分が優位にはたっていることが示唆されました。

先生方からいただいた質疑のうち、3つを要約いたします。1つ目に、数名にみられた負の相関は、走行の乱れなど受動的な頭部の動きを反映しているのではないかとご質問をいただきました。本研究では高さ13mmの板上を走行するため、逸脱や進入時に上下動が発生します。そのため、逸脱と侵入を繰り返すような乱れた走行を行なったことは、負の相関を示した一つの要因であるかもしれません。例えば、マウンテンバイクのような不安定な環境で走行する場合は VOR が多く発生している可能性があります。また、ペダリングに伴って頭部が上下に動いている参加者もいらっしゃいました。脚の筋力や自転車の形状が頭部動作の有無に繋がったのではないかと推察しております。少数の参加者に負の相関がみられた点について深く考察ができなかったため、今回の議論を参考にさせていただこうと思います。

2つ目に、正の相関の解釈についてご質問をいただきました。正の相関は眼球と頭部が同じ方向に動いていることを示します。つまり、奥と手前を交互に見るような OKR の動きに伴って頭部も上下に動いているということです。自転車走行して

いる時に上下に頭部を動かしているとは考えにくいと思います。しかし、データをグラフ化して確認しましたところ眼球的動きと同じ方向に頭部が小さく動いておりました。この点について、異なる先生からもご意見をいただきました。OKR の機能は視野のブレをなくすように外界の像を繰り返し追従することであるため、頭部がこの機能を補うように像を追従しているのではないかとご助言いただきました。安定した環境での自転車走行中には頭部はほとんど動かないと想定していたため、無意識に頭部が動いていた点は面白いと思いました。

3つ目に課題に用いた板の横幅についてご質問をいただきました。本課題では幅12cmの板を用いましたが、これは参加者にとって難易度が高い条件を想定して設定しました。予備検討ではより広い幅での測定を行いました。視線は正面や周囲の環境に向けられ、視線行動に一貫性はありませんでした。そこで、今回用いた高い難易度の幅に設定することで、安定した走行に特徴的な頭部や眼球的動きがみられると考えました。実験の結果、19名中16名は走行中に経路に視線を向け続け、11名は OKR を発生させていました。多くの参加者にみられた OKR という眼球的動きが、安定した走行と関連しているのではないかと推察しております。次の研究では眼球的動きを抑制した際に走行のパフォーマンスに影響を与えるか検討しようと考えております。

加えて、カーブ走行では頭部の安定がより重要になるのではないかとご意見をいただきました。実体験からも、カーブ走行時は内側に頭部を維持しているように感じられます。これまで、カーブ走行時の視線の向け方は着目されていましたが、頭部の動きについてはあまり知見がないように思われます。今後、例えば直角カーブの走行において、頭部の安定性や視線の向け方と走行パフォーマンスの関連を検討できたらと思います。

今回のポスター発表では、多様なご専門の方と議論させていただき、充実したセッションとなりました。異なる領域の方からご意見をいただくことができ、有意義な時間だったと感じております。改めまして、第73回大会の開催にご尽力された大会実行委員会の先生方、学会運営関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

著者略歴：筑波大学体育専門学群卒業、筑波大学大学院人間総合科学研究群博士前期課程修了。現在、筑波大学大学院博士後期課程に所属。自転車走行などの移動行動中の視線行動や身体動作に興味を持って研究を行っている。



ポスター発表での題目は「中学校体育授業における自己調整学習の予備的検討」になります。自己調整学習とは、学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与している学習過程のことです。言い換えると、自己調整学習とは、学習目標の達成に向けて、自らの行動や思考、動機づけを調整しながら行う学習になります。そして、自己調整学習では学習過程を予見段階、遂行コントロール段階、自己省察段階に分け、これらが循環する段階モデルが想定されています。つまり、自己調整学習を行う学習者は、各段階で目標達成に向けて必要な行動を調整して学習を進めることによって、各段階が影響して、学習を進めることになります。そして、各段階が影響し合うことで、循環的な学習過程が生じることによって、パフォーマンスの発揮につながると考えられます。

これまで、体育授業における自己調整学習を測定する尺度は大学生を対象にしたものであり、発達段階が異なる中学生を対象にした尺度がない現状でした。また、大学生を対象に作成された尺度は、段階モデルに想定されているカテゴリーから作成されており、実際に体育授業で用いている自己調整学習方略を捉えていないという問題もあります。そこで、本研究では、各学習段階で用いられている自己調整学習方略について、中学生に自由記述で回答を求め、体育授業における自己調整学習の構造について検討を行いました。分析では、得られた回答について KJ 法を参考にしてカテゴリーごとに分類を行いました。

分析の結果、予見段階は、目標設定、課題の再確認、意欲の向上の 3 つのカテゴリーに分類されました。遂行コントロール段階は、課題への挑戦、観察学習、イメージ、試行錯誤、モニタリング、仲間との協同の 6 つのカテゴリーに分類されました。自己省察は、自己評価と適応の 2 つのカテゴリーに分類されました。これらの分類されたカテゴリーは、大学生の体育授業における自己調整学習方略と類似するカテゴリーが示されました。また、分類されたカテゴリーは、大学生のカテゴリーとは異なる、本研究の独自のカテゴリーが示されました。今回の研究を通して、中学生が体育授業で用いている自己調整学習方略を幅広く抽出できたと考えられます。

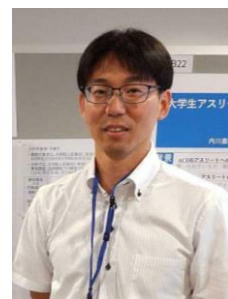
ポスター発表を行った際の質疑についてですが、この研究をどのように次の研究に進めていくのかというものがありました。今回の研究では、中学校体育授業における自己調整学習方略について自由記述でまとめたものになります。現在、本研究で得られたカテゴリーから項目を作成し、自己調整学習方略を測定するための尺度開発の研究を行っています。この研究では、中学校体育授業における自己調整学習方略尺度の因子構造がどのようにまとまるのが楽しみであり、それが学年間といった発達段階によって異なるかを検討する計画になっています。また、開発された尺度を用いて、自己調整学習を促進する要因と抑制する要因について検討を行います。この研究を通して、自己調整学習の形成を意図した授業計画や実践を行うための知見を得ることを目的としています。さらに、実践場面での尺度の利便性を高めるために、短縮版を作成することを計画しています。これらの研究を通して、まずは中学校体育授業における自己調整学習の形成を意図した授業実践の評価、改善に寄与できればと考えています。加えて、異なる

校種での体育授業での自己調整学習についての検討や、体育授業を通して異なる教科への般化や、学校生活への効果について明らかにしていければと考えています。

他には、今後の研究で尺度開発を行った際には、研究成果を論文としてまとめることに対するご意見をいただきました。私の悪い癖として、研究成果を知ることができて満足してしまうということがあります。そして、その研究成果をまとめるのではなく、次の研究計画を考えてしまうことや、別の研究に手を伸ばしてしまうことがあります。これによって、研究成果が論文としてまとめるのが遅くなってしまうことが、多々あります。しかし、研究成果を論文としてまとめることによって、わずかながら学術的な貢献に寄与できると思います。また、体育授業における自己調整学習については、各校種の教員からの問い合わせもあるので、実践現場への有益な情報を提供できると思います。今回のポスター発表を通して、先延ばしをせずに、研究成果をまとめるようにしていければ、決意した次第です。ですが、動機づけの高さだけに頼ってしまうと、途中で筆が止まってしまうことがあるので、環境や動機づけを自己調整しながら、論文をまとめていければと思います。ポスター会場では多くの方がポスター発表を行われていました。そして、その発表を聞きに来られている多くの研究者の姿があり、研究に関する議論が活発に行われていました。今回、ポスター発表の様子について写真を撮るのを失念しており、報告書に掲載できておりません。その様子を写真でお伝えできず、申し訳ありません。

今回、久しぶりの学会への参加と発表を行ったのですが、学会でポスター発表を行うことで、様々な方との交流を育むことができた機会となりました。特に、研究者の方だけではなく、中学校の教員の方が私のポスター発表に質問に来ていただきました。その教員の方は、最新の知見を知ることが、授業実践に必要なことで、そのためにも学会に参加されたということでした。また、どのように授業をするかといった際に、生徒だけの視点ではなく、教員のウェルビーイングを高めるといった教員側の視点もこれからの授業実践には必要と考えられていました。私の研究は、生徒へ自己調整学習の形成だけではなく、教員が授業を行う際の一つの視点を提供できるものと考えております。質問に来られた教員の方との議論を通して、得られた研究知見については、現場で実践されている教員にも情報発信をしていくことの重要性を確認することができました。今後は、島根県にあまり引きこもらずに、学会への参加・発表を通して、自身の研究に対する動機づけを自己調整して研究を進めていきたいと思います。

著者略歴：福岡教育大学まで修士課程、九州大学で博士課程を経て、現在、島根大学教育学部に在籍しています。主な担当科目は、スポーツ心理学、陸上競技、ソフトボールになります。研究では、自己調整学習を一つの軸として、体育授業や部活動に関する研究を行っています。また、運動やスポーツの効果がその文脈だけではなく、学校生活といった異なる文脈に及ぼす効果についても検討をしています。



学校保健体育研究部会課題 C では、「科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導」について 3 年間の活動を続けてきた。初年度は「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」というテーマで学習指導要領の編纂に関わった先生をお招きし、現行の指導要領が本来志向すべきとしていたカリキュラムと学習内容を勉強させていただいた。議論を通して分かったことは、能動的な探索過程が授業内の活動に必須であること、それは従来から体育科教育領域でなされてきた問題提起と合致することであった。その認知機能は認知心理学において盛んに検討されており、すでに乳幼児期からその発露が見られることが示された。2 年目のテーマは「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」とし能動的に環境を探る「身体」の教育活動が必要であること、そして当該機能の行動学・神経学的実体と理論的枠組みが示された。そして今回、3 年の活動のまとめとすべく、「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとした多角的な研究・実践・論考を示すシンポジウムを開催し、部会員 5 名全員が何らかのかたちで登壇する体制をとった。

まず春日晃章氏（岐阜大学）から「アクティブ チャイルド プログラム（ACP）を用いた体育実践とその効果」という話題提供があった。氏によれば、放課後の遊びを通した身体活動が困難である現在、体育実技が学校における唯一の身体活動時間であるという。授業で楽しさを感じさせ、一定の身体活動量を確保することを重視し、その授業展開の例として準備運動の実践例が示された。示された例は ACP を参考にした運動遊びと基礎運動能力向上の要素を盛り込んだプログラムであった。活動的な子どもの様子がその場に参加しているように体感され、日頃の部会の議論で春日氏が盛んに主張していたコトがわかりやすく示されていた。難しい理屈ではなく、楽しくて動かずにいられなくなる仕掛けが今後の体育に必要なのだろう。春日氏の授業時間「前」の取り組みに続き、ペース走の授業に変動練習を組み入れた授業実践例を木島が示した。本研究は山梨県南アルプス市の櫛形中学校において行われた。ここには大学生が計測係として参加し、彼らに加えて著者も多大な労力をかけた。そして何より調査校には、さらに多大な労力を頂いた。その上での成果の詳細は後述するが、同じ部会員である末永祐介氏（熊本大学）より、武田雅裕氏（熊本市益城中学校教諭）による授業導入の映像が提示されたことをここで付記しておく。

最後に松田恵示氏（立教大学、東京学芸大学）より、「身体を楽しむこと」「身体を護り育てること」「身体を知り活用すること」の 3 つのスコープを領域横断的に貫く教育コンセプトが提案された。現場、研究、政策が三位一体となって実践を作り出す保健体育改革と、その実践のエビデンスを支える学会活動の在り方が示された。フロアから「中高の教員は、遊びの価値や重要性は理解していると思うが、それを生徒に理解させた上で、かつ領域の特性を失わず、スポーツを作るということはやっていないと思う。その具体例を聞かせてほしい。」「子どもになりその授業を受けてみたい。」などのコメントが寄せられた。氏の講演は社会的な論考であり、当然、そこに授業

のビデオが示されることはない。ただ我々が「身体」を考える指針を与えてくれたように思うし、それが社会学という学問なのだろうと大いに納得した。

以上に氏名を拝借した 4 名と柏木悠氏（専修大学）が部会 C 班のメンバーであるが、最後にこうした内容で 3

年間を締め括った引き金は、現在の保健体育学習指導要領に対する各メンバーの疑義にあることを示しておきたい。例えば中学校でバレーボールの授業を見ると、上がったボールがなかなか相手コートまで届かない、あるいはそもそも最初のサーブが相手コートまで届かないなどといったことがよくある。そこでどうしても入らなければ前からサーブを打つとか、バドミントンのコートでやると色々工夫をするのだが、そもそもなぜ、そうまでしてこれらの競技をやらねばならないのか？という疑問が部会員の共通意識としてあった。ここでは例としてバレーを挙げたが、こうした問題が散見されるのは、もちろんこの種目においてだけではない。そしてさらにもちろん、バレーボールあるいはその他のスポーツ競技を授業に導入すべきではないということでは絶対でない。ただ今更に教育・研究内容が後退するようではあるが、その競技ができるようになる過程のどこがどう面白いのか？を児童生徒を含む皆が理解するコト、その価値に対して教員や生徒が自発的にアプローチするコト、教員が仕掛けを考えたり、研究者が既存の理論からそういった価値を紡ぎ出す教育体制を考えたりするコト、これらが論じられて然るべきではないかということである。そもそも身体を楽しむ・活用する体育のあり方を、銘々が与えられた場所で考えたらいいのではという提案である。

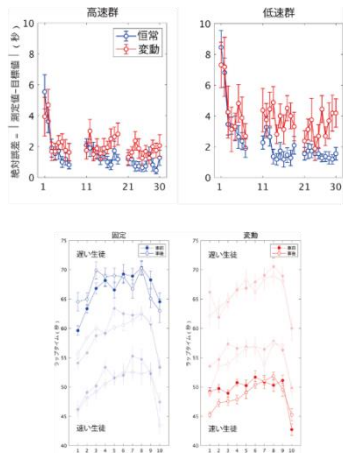
1 回につき 1-2 時間程度を費やした部会の準備会議では、銘々が持ち寄った問題意識を楽しくすり合わせてきた。木島個人の指導要領に対する最初の疑義としては、「主体的・対話的な深い学びとあるが、学ぶべき身体機能を探索する過程に主体性を付与する仕掛けが指導要領その他のどこに記載されているのか？」といった問いがあった。この部会への参加は、自身がお世話になってきた体育心理学が、そこに対してどう具体的に寄与できるのかを考える良い機会になったと思う。他の領域から選出されてきた部会員諸氏との集まりを通して、現場の授業にその考えを適用できたことはさらに良い機会になった。来年度から始まる第二期の取り組みでは、変動練習から自己調整学習へと方法論を移行させ体育心理学ができることをさらに具体化させたい、と個人的には考えている。これまでと同じく、他の領域との対話を通して当該領域の存在感をアピールできたら本望である。

著者略歴：p.1 の右段を参照



2021-2023 年度学校保健体育研究部会課題 C 班のメンバー。各氏のご氏名は前垂れ記載の通り。

2021 年度の第 1 回シンポジウムにおける佐藤善人氏（東京学芸大学）の報告では、小学校低学年の運動遊びの授業では走ることにに関して意欲的であるのに、学年が上がって陸上競技の授業になると、走ることにに対する意欲が失せ、特に長距離走に対して嫌悪感を抱くようになるという。一方で得意なことを競争することに対する関心は、学年が上がっても比較的失せることがない。次に 2022 年度の第 2 回シンポジウムにおける工藤和俊氏（東京大学）の報告では、知覚と行為の循環による生体と環境とのつながりについて解説があった。その仕組みを裏打ちする理論として自由エネルギー原理が紹介され、能動的推論の機能を伸ばす「身体」教育の実例が示された。今回のシンポジウムでは、ペース走授業に変動練習を導入し、その効果がペース再生能力に及ぼす影響を木島が示した。



図：3 日間にわたる 200m ペース走授業で観測された誤差の変動（上段）と、前後の 2000m 走で観測された 200m ごとのラップタイム（下段）。

実験参加者は、中学校 3 年生の 5 つのクラスに属する合計 163 名（女子 75 名、男子 93 名）であった。事前事後テストとして、彼らに 2,000 メートルのタイムトライアルを課し、所要時間と 200 メートルごとのラップタイムを計測した。訓練課題として、連続する 3 回の授業において 10 回ずつ 200 メートルのペース走を行わせた（ただし初回のみペース走の回数が 8 回に限られた）。ペース走の目標タイムを個々の参加者の能力に合わせて設定し、実際の所要時間と目標タイムとの差を毎回フィードバックした。インターバルは約 100 秒に設定した。事前テストと事後テストは訓練課題を行わせた 3 回の授業の直前と直後それぞれ 1 回の授業内で実施した。ここで 163 名という参加者数は開始当初のものであり、実験実施期間を経て参加者数は減少したことを、以下は全てのデータが揃った参加者を対象に分析した結果であることをおことわりしておく。

実験では訓練課題のスケジュールが異なる二群を設定した。恒常ペース再生群（34 名）では目標タイムを規定の式（本稿では省略）で一定に設定し、変動ペース再生群（49 名）では、同じ式で算出した目標タイムから $\pm 10\%$ 、 $\pm 5\%$ 、または $\pm 0\%$ の 5 通りにランダムに上下動させた。また事前テストおよび事後テストの平均値に基づいて各群の参加者を走速度が異なる 3 つのグループに分割した。高速群に属する参加者は恒常ペース再生群で 11 名、変動ペース再生群で 16 名の合計 27 名であり、中速群に属する参加者は 29 名、低速群に属する参加者は恒常ペース再生群で 11 名、変動ペース再生群で 16 名の

合計 27 名で、最終的な参加者数は 83 名となった。

質問紙（形成的授業評価）で全ての生徒が授業の目的である「ペース再生能力の開発」に（ある程度）真剣に取り組んでいることを確認した。図の上段に示した結果は、高速群；そのなかでも特に変動群に配置された参加者がより効率的にペース層の誤差を減少させたことを示している。この結果から、長距離走が速い生徒は単に体力があるだけでなく、自己のペース再生能力を探索的に洗練する能力があると考えた。一方でともと長距離走が遅い生徒でも、早い生徒に比べて精度は劣るものの、ペース調整の方略を探索的に洗練できると考えた。よって所要時間の短縮や体力の維持増進を目標とするだけでなく、自らの身体と対話しながら能動的に調整のコツを探索する機能増進を長距離走授業に組み入れられるのではないかと考えた。加えて図下段の結果から、変動＋高速群は授業で鍛えた調整能力をタイム短縮に活かすことができ、もう一方の恒常＋低速群は、調整能力を走速度の向上に活かすには至らなかったが、ペース走のポリシーに準じて自分の能力付近のペースを安定的に調整できるようになったのではないかと推察した。

変動＋高速の生徒と恒常＋低速の生徒のどちらが高評価されるかは、担当教諭（あるいは学習指導要領？）が定める授業のめあてによる。ただ経験をどう活かすかは生徒個人が決めることで、高速群は調整能力をタイム短縮に活かすが、低速群は安定したペース走を維持するという差異があったことに興味を持った。そしてこういった指向の個人差が文科省の掲げる生涯体育・スポーツにどういった意味を持つのか、松田氏から社会的な予測を聞いてみたいと思った。しかし残念ながら当日はその雰囲気ではなく、疑問をフロアに広げる間もなかった。いずれにせよ、この成果を以て昨年度シンポジウムまでの伏線を回収することを試みたのだが、それはうまくいかなかった。それでも先述した末永氏（発育発達）と「言いっぱなしで終わらず授業に実装するところまでやってみる」という目標には到達できたかと思うし、何より当方の研究室そして最終的には山梨大学体育科の 4 年生のみんなが実験に参加してくれたことで、調査先の男女中学生が大喜びで迎えてくれたことが大変に嬉しい経験となった。実は、昨年のシンポジウムで示された知覚と行為の循環をゲームに仕立てて教材化し、能動的な探索を促した事例として熊本県益城中学のビデオを用意していた。しかしこれを十分に示すには至らず、やむなく 2024 年度シンポジウムで紹介してもらうことで計画を進めている。

生徒たちが長距離走を少しでも楽しく感じ、自ら考えることで楽しむことができれば何もうることはないのだが、それを学会がどうにかしてやろうするのは何か烏滸がましいように感じた。この線引きを含めて、学会が現場に何ができるのか、次回新規の部会員が主導するシンポジウムの成りいきに期待する次第である。

著者略歴：p.1 の右段を参照

競技スポーツ研究部会の2023年度シンポジウムのコーディネーターは、田原陽介先生（青山学院大学）と私が担当し、聖域なき議論を徹底的に交わそうと臨みました。会場は296名の参加者で満員御礼、立ち見ありの盛況ぶりでした。

シンポジストお一人目は、筑波大学の木内敦詞先生です。「高校大学期におけるスポーツとの関わり方：部長教員の視点から」について話題提供されました。冒頭紹介された事例は、多くの体育・スポーツ関係者が小耳に挟んだことのあるエピソードだったと思います。部活動での経験や部の組織風土がキャリア成熟に与える影響を研究した成果として、大学運動部に所属するだけでなく、「スポーツ・セルフ・マネジメントスキル」（竹村ほか、2013：体育学研究）の獲得を介してキャリア成熟が促されることを明示されました。現場では学生アスリートに寄り添って徹底的に試行錯誤しながら、部活動の恩恵を学術的に検証しようとする、木内先生の真摯な姿勢に心打たれました。

お二人目は、「高校生アスリートの身体—成長スパートの体組成変化：トレーナーの視点から」について、柴田真紀子先生（アスリートのいまと未来を考える 運作）の話題提供でした。米国で女子プロ野球選手とした活躍されたご経験を端緒として数々の話題に展開され、除脂肪量（Lean Body Mass: LBM）を評価することの重要性を説明し、疲労骨折をはじめとしたFATに警鐘を鳴らしてくれました。現場で経験された不条理なエピソードも紹介してくれましたが、柴田先生はそんな時も怒りを肚に収めて、アスリートセンタードをどうしたら徹底できるか、しなやかにひたむきに、現場で活動されているのだろうと感じられました。

お三方目、関西大学の神谷拓先生による「スポーツ推薦入試の課題：運動部活動の歴史と教育論の視点から」という話題提供です。スポーツ推薦入試という切り口から、わが国のスポーツ界が抱える問題を腑分けされました。スポーツ推薦入試を変えることで、高等学校と大学の運動部活動を変容させることができる。さらにいえば、スポーツ推薦入試とアドミッションポリシーとの関連への言及から、スポーツ推薦入試は大学の在り方すら変容させることができると示唆してくれたように思います。現実を見つめつつ、理想の追求も諦めない。そんな神谷先生の姿勢は、私たちに自省を求めるものであったと感じています。

シンポジストの先生方が発表時間を厳守してくれたおかげで、質疑応答に1時間を費やすことができ、12名の方々から質問を受けることができました。以下、印象に残った発言を摘記します。

木内先生：「大学で競技を行うことの恩恵は、大学という場に多様性があること。そして、自らの価値観が動く場であるということ」「大学の学びと、大学での競技との関連を具体的に示すことが期待されている」

柴田先生：「トップアスリートに文武両道のモデルケースを示してほしい。その際、そのアスリートが持っている価値観も、合わせて披露されるはずである」「米国ではきめ細やかな指導が行われていた。そして、指導者は選手と議論してくれる存在という印象が強い」

神谷先生：「アドミッションポリシーに関して、競技成績以

外とアドミッションポリシーとのつながりを考えようと主張したい。両者のつながりを考える上で、ループバックを作ることができるかという議論が導かれるはずだ」「どういうアスリートに入学してほしいのか。スポーツ推薦入試のオルタナティブは何か。大学は問われている」「個別事例が大切なことはもちろんだが、それだけを考えていては議論が進まない。私たちは今こそ『グランドデザイン』を描こうとすべきだ」

会場から「勝利至上主義はよくないと思うが、勝利主義は許容されるべきではないか？」という問いかけがありました。神谷先生は「スポーツの競技性を否定しているわけではない。そこを勘違いしないでほしい」。柴田先生は「勝つことは良いこと。しかし、勝った人が偉いというのは間違い」。木内先生は「『よく戦う』ことが大事。勝利至上主義について考えることも大切だが、競技至上主義になっていないか、私たち関係者は自らを顧みるべきではないか」と回答されました。この「競技至上主義」は木内先生がその場で咄嗟に発せられた言葉だそうですが、非常に納得感がありました。

「スポーツ推薦入試で入学して大学の運動部に入部しない学生、途中で退部してしまう学生をどう考えればよいか？」という問いもありました。木内先生が「入学の条件がどうなっているかに拠るのではないかと合理的な示唆を授けてくれました。こういった論点は、まさに聖域といえるでしょう。今後の議論に期待しつつ、私自身も聖域に突入する気概は十分です。この論点にかかわらず、議論の場があれば、誰が相手でも喜んで飛び込みます。

ちなみにそんな私は、質疑応答を捌くことに執心してしまい、議論を深めることに貢献できませんでした。「何でもっと上手に場を回せなかったのだろうか…」と終了後に自己嫌悪に陥り、その日は夜も眠れませんでした（苦笑）。そんな私を救ってくれたのは、柴田先生が最後に語ってくれた、米国時代の「送りバント失敗」のエピソードです。バントを失敗してベンチに戻る柴田選手に、監督や他の選手は「マキ、ナイストライ！」と言って頷き、全ての感情を理解しトライを認めてくれたそうです。トライを評価する姿勢こそ、私たちに求められているのでしょうか。私自身も、今回トライしたことを前向きに受け止め、次こそは！と固く心に誓いました。

ご登壇くださった先生方、参加者の皆様、開催校の同志社大学の皆様、そして、遠路ビデオカメラを持参して動画を撮影するだけでなく、動画の編集まで行ってくれた須甲理生先生（日本女子体育大学）、数取器で参加者数を数えながら、マイクを持って会場を走り回ってくれた内田若希先生（九州大学）、本稿に添付した5名の集合写真のみならず、多くの写真を撮影してくれた谷釜尋徳先生（東洋大学）に、深く感謝申し上げます。

著者略歴：日本大学文理学部心理学科卒業。早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。自称「戦うスポーツ心理学者」。「付度なし！本音！本気！」を合い言葉に、様々な座談会を開催しています（YouTube 荒井弘和チャンネルで配信中）



2023年8月30日から9月1日の3日間、同志社大学今出川キャンパスにおいて日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会が開催されました。「知徳体を育む『体育とスポーツ』の未来」を大会テーマに、5つの応用研究部会からのテーマ別研究発表が180演題、16の専門領域別研究発表が410演題、会場への来場者数1,879名と盛況でした。応用研究部会とは、体育学会として取り組むべき重要課題について、競技や専門研究領域を超えて議論する場として2021年に設置されたものです。競技スポーツ研究部会は、3年目のテーマを「トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅲ—トップアスリートの高等学校から大学への接続に着目して—」とし、荒井弘和先生（法政大学）と田原陽介先生（青山学院大学）によるコーディネートのもと、シンポジウムが開催されました。私はここで、高校大学期におけるスポーツとの関わり方について、現場指導する監督やコーチではない部長教員の視点からお話しする場をいただきました。

1. 発表内容

まず、1)私のこれまでの経験や見聞のなかで、スポーツとの関わり方で違和感を覚えた具体例を、少年野球から大学野球にわたり概観した後、2)私が学生とともに進めている、アスリートのキャリア発達研究の一部を紹介させていただき、最後に3)大学期にいかに関わるかについて展望しました。1)については紙面の都合上割愛し、2)と3)について以下へまとめます。

女子バスケットボール実業団をすでに引退した元選手へのインタビュー内容を複線経路等至性アプローチ（TEA；サトウ、2006）に基づいて整理したところ、大学を経て実業団入りした元選手は、大学期における学生生活や部活動が多様な価値観に触れる機会を保証し、彼女らのキャリア発達につながった可能性を示唆する結果を得ました。その一方で、引退後の進路選択に関する相談を、一番身近なはずのチームメイトにはできないという実態も浮き彫りとなりました。続いて、大学運動部活動に内在するいかなる経験が学生アスリートのキャリア成熟を促すのかについて、男子野球部・サッカー部員を対象に調査した研究成果を解説しました。部活動がアスリートのキャリア成熟に正の効果をもたらすには、部に所属して様々な経験/体験をするだけでなく、選手自身が主体的に思考・行動し、実践する自己活用力である「セルフマネジメントスキル（SMS；竹村ら、2013）」の獲得を介する必要性が、共分散構造分析から示唆されました。そして、SMS獲得には、チームの組織風土としての開放性よりも管理性が影響している可能性や、周囲からの支援や生活指導よりも挑戦達成や努力忍耐、自己開示の経験が影響することが、重回帰分析から示唆されました。さらに、学生アスリートの自由記述回答を整理したところ、SMSの中の行動的・思考的な側面よりも、態度的な側面を大学スポーツの中で獲得したと感じていることが示されました。最後に、年間を通じた縦断調査から、SMSを高めたアスリートは、そうでない者と比較して、自己開示、挑戦達成といった経験を多く積んでいたことも明らかになりました。これらの結果は、学生アスリートのキャリア発達を見据えた大学スポーツ指導にSMSを位置づける根拠となり、普段の「ブカツ」を通した人としての成長への鍵となる具体的な経験を示す基礎的研究として位置づけるものと考えています。

最後に、大学期にいかに関わるかについて、以下

のように整理しました。（学生アスリートや指導者は）普段の（部活動や日常生活における）経験/体験からの学びを大切に、自己の（偏っているかもしれない）価値観を更新するべく、（同一種目だけでなく、スポーツだけでなく、学問だけでなく）多様な経験/体験のできる場へ、（指導者や他者にガイドされればなしにならずに）意図して自らを置き、学び続けること。このような姿勢が、スポーツ・ライフ・インテグレーション（荒井、2022）へ繋がるのではなか、との考えを述べさせていただきました。これらの内容の意味するところは、「グッドコーチに求められる資質・能力（日本体育協会、2016）」の一部とも共通していると思われます。

2. 受けた質問内容と返答

フロアからいただいた質問のうち2つを挙げさせていただきます。まず、「文武両道やスポーツ・ライフ・バランスではなく、『スポーツ・ライフ・インテグレーション』という言葉による新しい視座はなにか？」との質問をいただきました。コーディネーターの荒井先生がこの言葉を提唱されているので回答をお願いしたところ、「スポーツで学んだことが人生の他の部分でも生きてきたり、他の部分で学んだことがスポーツでも生きてきたりするような相互循環的な流れある状態のことである。それをどのように実現していくのかのヒントを得ることが本シンポの狙いである」とのコメントをいただきました。文武両道や文武不岐、スポーツ・ライフ・バランスよりも、スポーツとの関わり方の方向性を指し示すものとして、「スポーツ・ライフ・インテグレーション」という言葉が広く知られていくことが期待されます。

2つ目は「大学で運動部活動を行うことの良さは何だと考えているか？」との質問をいただきました。これに対して私は、「中高の時よりも多様な価値観を持つ仲間や指導者と4年間過ごす経験/体験がその1つである」と回答しました。同じく登壇者の神谷先生（関西大学）は、「大学の学びと関連づけて、運動部活動の意義を（現時点では十分に）主張できていないことが問題である。その大学でスポーツをやる意味を言語化する必要もある。競技成績だけで評価しないスポーツ推薦入試の可能性を考えるべきである」と述べられていました。大学スポーツ周辺の不祥事が続くいま、重い腰を上げて推薦入試のあり方を見直す時機に来ていることを痛感しました。

3. セッションに関する雑感

私の演題の副題に「部長教員の視点から」と添えているにも関わらず、その視点からの話題提供や質疑応答ができていなかったと反省しています。神谷先生が最後に語られた「大学の部活動やスポーツ推薦入試を変えることは、中学校の部活動に大きな影響を及ぼすはずである」との言は重みがあり、本シンポ来場者の記憶に残ったことと思われます。

著者略歴：筑波大学・体育系教授、硬式野球部長、首都大学野球連盟・理事、全国大学体育連合・常務理事（研究部長）、筑波大学体育専門学群卒業、同大学院修士課程体育研究科修了、大阪工業大学助手/講師/准教授を経て、2014年より現職。博士（教育学、九州大学）。専門は大学体育論。研究テーマは、大学生が育つ体育授業と運動部活動。



一昨年度より、専門領域間の連携協力による研究成果を統合し、各専門領域を横断して取り組むべき重要な実践的（社会的）課題の解決を図ることを目的とする「応用（領域横断）研究部会」の一つとして、生涯スポーツ研究部会が設置されました。そして部会内での検討を経て、最終的に本研究部会では、以下の3つの上位課題の解決に向けて、それぞれ3年間をかけて取り組むことになりました。

課題A：スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会と
いかに関連するか

課題B：共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働シ
ステムをいかに構築するか

課題C：人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権
を保障するか

以下では私が司会として関わった課題Cのシンポジウムを
中心に報告致します。

本年は3年計画の最終年にあたります、そこでは1）一昨年度検討した、若年世代、中年世代、女性のスポーツ参加の現状と問題、2）昨年度検討した、障がい者、元アスリート、さらには性別や能力に縛られないみんなのスポーツ参加の現状と問題を踏まえ、3）国民のスポーツ権を保障する施策立案に向けて、施策立案者や実施者、研究者などが、互いの専門知識や経験を活かして協力する（共進する）上で研究者ができることに焦点を当てて検討することになりました。そこには、「あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものになりたい」という部会の共通認識があり、本シンポジウムを通じて実際の施策立案に効果的に関わる研究者を増やしたいとの思いを実現するために、方法論的な内容をテーマとして選択しました。

さて、当日の研究発表の様子についてですが、生涯スポーツ研究部会課題Cのシンポジウムは、同志社大学今出川キャンパス良心館3階RY305教室の会場に100名程度の参加者を迎えて行われました。参加者には、研究者ではなく施策立案者や実施者として関わったことのある自治体の関係者も、少数ではありますが含まれていました。

一人目のシンポジストである辻大士先生（筑波大学体育系助教）からは、「スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究－国・自治体・個人レベルの重層的アプローチの構想」と題する発表を頂きました。ご発表ではRISTEX 社会技術研究開発センター「科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム」の第4期研究開発プロジェクトの一つである、「スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究－国・自治体・個人レベルの重層的アプローチ」（研究代表者：近藤克則・千葉大学）について、チームの一員として関わられた辻先生のお立場から、プロジェクトの概要、目標、計画などの構想や、進捗状況についてご紹介されました。そこでは、スポーツ参加の促進要因の探索と支援政策の評価研究が国、自治体、個人の3つのレベルで行われ、1）国レベルでは利用者の追跡調査を通じたスポーツ施設整備推進政策のブラッシュアップ、2）自治体レベルではグッドプラクティスの抽出やデータの比較を通じた市町村のスポーツ振興政策の底上げ、3）個人レベルではアプリを利用した個人の身体活動量の増加に向けて行われた取り組みについて説明が行われました。辻先生のご発表はまさに本部会が求める「エビデンスに基づ

いたスポーツ施策の推進方法」を明確に示すものでした。

二人目のシンポジストである本多良樹先生（名古屋市教育委員会事務局生涯学習部活動振興室）は、「部活動改革における共進について」と題して発表されました。本多先生は名古屋市が実施している小学校部活動の民間委託化について、その立案から実践に渡り、研究者と関わった経験などをもとに、多様な価値観を持った市民の合意形成のための客観的・科学的なエビデンス活用等、行政の施策立案・実践における研究者との共進の事例についてご紹介いただきました。また、今日の行政は裁量が拡大し、行政が判断し政治がチェックするような関係に逆転していることから、多数決等の仕組みを持たない行政にとっては、客観的な判断根拠として学術研究が必要とされているとのご意見をいただきました。

三人目のシンポジストである金子史弥先生（立命館大学産業社会学部准教授）からは「スポーツ政策におけるエビデンスに基づく政策立案の実践と課題－英国の事例」と題する発表を頂きました。金子先生からは、スポーツ政策領域における「エビデンスに基づく政策立案（Evidence-Based Policy Making）」の実践と課題について英国を事例にご紹介頂き、英国ではスポーツ参加に関わるデータベースが構築され、国、各競技団体、地方自治体の施策立案に活用されていること、現在では施策が目指すアウトカムの測定方法に向けて研究が行われていることが紹介されました。また、EBPMを実行できる分厚い専門職の存在、さらには議会等第三者によるチェックが行われていることも合わせて紹介されました。

以上3名のシンポジストの発表に対して、フロアからは自治体の施策立案に関与するアプローチの方法や、自治体の調査を継続する上での自治体側の懸念等について質問がありました。それに対して、行政側は説明責任に留意していることから、過去の調査実績等の理由があると受け入れ易い、また、調査継続によってネガティブな結果が明らかになることを懸念しているなどの回答がありました。

スポーツ権の保障という見地から、当初はスポーツ参加者や参加頻度の増加等の視点からの議論が多かったように思います。しかし、自治体等による施策には、スポーツ参加による心理的効果の検証も必要とされていました。英国の現状からは、施策立案に資するデータベースの構築が我が国でも重要であると思います。誰でも利用できるスポーツ参加に関わるデータベースの構築に、体育・スポーツ心理学も今後貢献できると思われます。

著者略歴：筑波大学大学院体育研究科を修了後、阿南工業高等専門学校講師、鳥取大学大学教育総合センター准教授を経て、現在香川大学教育学部教授、博士（体育科学：筑波大学）現在は「スポーツ指導者による体罰を許容しない状況」に焦点を当てた研究を行っています。「子どもを体罰から守るためにはどうすればいいのか？」をリサーチクエスションとし、スポーツ指導者の性格傾向や思想信条に関わらず体罰が行われにくい状況の解明に向けて、指導者を取り巻く周囲の状況に注目して研究しています。



「健康福祉」部門は、応用研究部会 5 部門の中で唯一、そのタイトルに「体育・運動・スポーツ」の用語を含まない部門である。そうした意味もあり、表面的には体育心理とのつながりが見えにくい部門でもある。しかし、応用研究部会としての活動が 3 年目を迎えた今大会においては、これまで 2 大会と比べて、体育心理部門との親和性が高くなったという印象を受ける。本稿では、こうした今大会の状況を概説する。第 1 に、健康福祉部門のコンセプトや構成について説明し、体育心理とのつながりについて説明する。次に、筆者が主として関わった上位課題 B（運動と認知）について説明する。最後に、3 年間の任期を終えて感じた、本部会活動に対する筆者の想いを述べる。

健康福祉部門は、「健康の保持増進及び福祉社会の実現につながる身体活動や体育・スポーツに関する科学的エビデンスを蓄積し、それに裏付けられた健康福祉対策の具現化に向けた取り組みを行う」ことをミッションとしている。3 つの上位課題は、A：「健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか（以下、健康増進）」、B：「認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか（以下、運動と認知）」、C：「運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか（以下、不活動の予防）」である。

筆者は、上位課題 B「運動と認知」に従事している。近年、継続的運動が認知機能改善に有効であるという数多くの報告から、運動に対する認知症予防効果が強く期待されている。このため、体育・スポーツ全般として「運動と認知」というと、どうしても継続的運動がもたらす認知機能改善のテーマを連想する。しかし実際には、体育心理領域で扱う「運動を支える知覚認知機能」の話題や、「運動を長期に継続させるための認知・動機付け」の話題など、幅広い話題が包含されるはずである。筆者はこうした考えのもと、認知が運動にもたらす影響についての話題をできるだけ多く、本部会で取り上げるための努力を行っている。

上位課題 B のシンポジウムのテーマは、「認知と運動の支援：テクノロジーの活用」であった。過去 2 年間にわたって議論してきた運動と認知の諸問題に対して、IoT、ロボット、AI などの最先端のテクノロジーがどのように貢献しうるかについて議論した。具体的なトピックとして、「AI を用いた認知症早期スクリーニング技術」、「没入型バーチャルリアリティ（VR）による半側空間無視患者に対する評価・介入システム」、「VR を用いた運動学習の支援」の 3 つの話題提供があった。体育心理領域からは筆者が登壇した。シンポジウムに関する内容の詳細は、本会報内にあるシンポジウム報告をご参照いただきたい。

上位課題 B の一般発表として、8 演題の発表があった。昨年度は一般発表演題数が 3 演題と低調であり、いかにして多くの会員に興味を持てただけかが課題となっていたため、発表数の増加を喜んでいる。体育心理領域からの発表は 2 名であり、その内容は、「バーチャルリアリティを用いた身体協調性を向上させる方法の提案」、ならびに「高齢者における道路横断判断に対する知覚トレーニングの効果検証」であった。これ以外の 6 演題についても、内容は体育心理領域と密接に関わる者が多く、体育心理領域の研究者が聴衆として参加しても、十分意味のある内容であったと考えている。例えば「非

利き手による筆記作業が注意機能に及ぼす影響」、「近赤外分光法を用いたヒト運動抑制機能への軽運動の影響」、「等尺性ハンドグリップトレーニングが認知機能に及ぼす影響」といった発表は、体育心理領域の中でも意義ある議論が展開できる内容と言えよう。一般会場は 2 会場に分かれ、第 1 会場が参加者数約 70 名、第 2 会場が約 50 名であった。

最後に、3 年間の任期を終えて感じた本部会活動に対する筆者の想いを、テーマ B における活動経験から述べる。テーマ B では、3 年間でシンポジウムをどのように継続・発展させるかということに主眼を置いて、企画・人選をおこなってきた。その結果、3 年間のシンポジウムのテーマは、それぞれ「認知機能改善のための身体活動の在り方」（2021 年度）、「運動から認知へ、認知から運動へ」（2022 年度）、そして「認知と運動の支援：テクノロジーの活用」（2023 年度）となった。初年度のテーマは、多くの会員にとって関心があるだろう、運藤が認知機能・認知症へ及ぼす好影響の問題を主軸において企画した。このテーマは 3 年を通して必ず 1 名の専門家が話題提供をするように構成した。2022 年度は体育心理の田中美史氏（武庫川女子大学）を話題提供者としてお招きし、認知が運動に及ぼす影響があるのだということ主張していただいた。三年目は体育心理から樋口が話題提供し、バーチャルリアリティの活用を通して認知・運動にアクセスし、運動学習を支援できる可能性について言及した。こうしたテーマ設定・話題提供者の選定を通して、体育心理の研究が健康福祉の問題に広く貢献できるということを、潜在的にアピールできたものと考えている。応用部会の在り方については今後継続的に見直しが必要とされていくと思われるが、どのような内容であったとしても、体育心理の委員が積極的にその活動に関わることによって、体育心理の会員に意味のあるテーマ・情報提供を提供することができるのだということを体感できた。私は次年度以降も本部会に携わる予定のため、この想いを忘れることなく活動を続けていきたい。

著者略歴：東北大学文学研究科修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、ウォータールー大学（カナダ）客員研究員、首都大学東京人間健康科学研究科助教・准教授を経て、現在、東京都立大学人間健康科学研究科・教授（2020 年 4 月に大学名称が東京都立大学に変更）。専門は実験心理学。運動制御を支える知覚・認知的な情報処理過程に着目した研究を行っている。得られた成果をリハビリテーションに応用するための試みを行っている。主な著書として、「身体運動学：知覚・認知からのメッセージ」（2008、三輪書店）、「運動支援の心理学：知覚・認知からのメッセージ」（2013、三輪書店）、「姿勢と歩行：協調からひも解く」（2015、三輪書店）、「知覚に根ざしたリハビリテーション」（2017、シービーアール）。



「健康福祉」部門における3つの上位課題は、A：「健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか（以下、健康増進）」、B：「認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか（以下、運動と認知）」、C：「運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか（以下、不活動の予防）」である。各課題における本年度のシンポジウムテーマと発表内容は下記の通りであった。いずれも120分にわたるシンポジウムであった。

課題 A 「ヘルスリテラシーから考える体力・運動の在り方」（コーディネーター：朝倉雅史，筑波大学）

- 高尾将幸（東海大学）「ヘルスリテラシー時代の保健科教育」
- 上地勝（茨城大学）「子供たちのヘルスリテラシーの育成と体力・運動との関わり」
- 本田由佳（慶應義塾大学）「はかる・知る・楽しむ・おしゃれ」から始まる産学官医・メディア連携のソサエティ 5.0 時代の女性の健康教育」

課題 B 「認知と運動の支援：テクノロジーの活用」

（コーディネーター：辻大士，筑波大学，木伏紅緒，神戸大学）

- シンポジスト：根本みゆき（筑波大学）「AI を用いた認知症早期スクリーニング：日常生活動作解析から」
- 安田和弘（東京保健医療専門職大学）「没入型バーチャルリアリティによる半側空間無視に対するリハビリテーション支援機器の開発」
- 樋口貴広（東京都立大学）「バーチャルリアリティを用いた運動学習の支援」

課題 C 「基礎研究と実践（指導，支援）の橋渡しで心身機能の低下を予防する」

（コーディネーター：菅谷美沙都，上武大学），田中愛，東京学芸大学）

- 岩沼聡一朗（帝京科学大学）「実践から見る橋渡しの景色：障害のある人を対象にした実践からの気づき」
- 重松良祐（中京大学）「橋渡し研究に使えるチェックリスト“PAIREM”」
- 高岡敦史（岡山大学）「健康づくりエビデンスの社会実装にある崖と壁」

筆者は課題 B に関わったため，ここではその詳細について説明する。我が国の科学技術政策として「Society 5.0」が提唱され，IoT，ロボット，AI などの最先端のテクノロジーをあらゆる産業や社会生活に取り入れ，多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスの提供が目指されている。これは「認知と運動の支援」というテーマに対しても親和性が高いと考えられ，体育・スポーツ・健康に携わる研究者がどのように貢献しうるのかを考える機会として，本シンポジウムが企画された。参加者数はおおよそ120名であり，会場をほぼ埋め尽くすほどの人数となった。

第1発表者の根本氏は，企業との共同研究として，AIを用いて日常生活動作から認知症早期発見のためのスクリーニン

グ手法の研究開発に取り組んでいる。歩行の速度，リズム等の歩行動作の特徴，言いよどみの頻度や発話速度といった言語・音声の特徴，描画の速度や筆圧といった描画動作の特徴から，認知機能低下の程度をどの程度正確に評価できるのかについて，これまでの成果を報告した。

第2発表者の安田氏は，脳血管障害後に生じる半側空間無視の評価や介入手段としてVR機器の開発について紹介した。VR技術を用いた評価手法として，患者における無視領域を3次的にマッピング化する技術が紹介された。さらに，新たな介入手段として，非無視側からの注意の「解放」と無視側への注意の「移動」を同時に誘導するための可動スリットシステムについて，開発経緯とその成果が報告された。

第3発表者として筆者は，VRを運動学習の支援に生かすことを目的とした研究課題として，「高齢者を対象とした衝突回避能力の向上」ならびに「スポーツ動作が苦手な，いわゆる不器用な子（発達性協調運動症）を念頭に置いた協調能力の向上」という2つの課題について，その経緯や研究成果を報告した。（VR）を運動学習の現場で活用することには，様々な期待がある。例えばドレッドミルを用いた単調な歩行リハビリに対して，連動して動く風景をVRで提示することにより，飽きずにトレーニングを継続できたり，環境に応じて歩行を調整する能力を高めたりする効果が期待される。しかし，いくらVR環境のリアリティ（没入感）が大きくても，奥行き知覚の違いや映像呈示の時間遅れなど，VR環境は実環境とは異なる側面がある。発表では，こうした期待と現実をまとめたうえで，VRが運動学習の研究や支援にどのように活用できるかについて考えを述べた。

最後の総合討論では，次のような質問がなされ，各話題提供者から意見が出された。

- ✓ Virtual ではない現実世界における ADL 課題やボール捕球動作などが，実際にどれくらい上達しているのか，効果やその評価方法についてははかりつされているのか
- ✓ 介入の継続性を確保するために工夫されていることは何か，またはどのようなことが障壁となっているのか
- ✓ 最先端のテクノロジーは，初期は限られた人しか恩恵を受けられないが，より広く普及・実装という点ではどのような工夫が考えられるか

いずれの質疑も各発表者全体にかかわる重要な議論であり，3名の話者提供者がそれぞれの立場から，多角的な意見を主張できたと考えている。

本シンポジウムは過去2年間のシンポジウムと比べても最大の参加者数であったこともふくめ，生協で会ったといえる。これまでの積み上げに基づくテーマ設定や情報提供が良い方向に向かっているものと解釈している。

著者略歴：p.18の右段を参照

私は第73回日本体育・スポーツ・健康学会大会で、テーマ別（競技スポーツ）のセッションでアスリートのリーダーシップスキルとその成長に関する研究の口頭発表を行った。本学会大会での口頭発表は、キーノート講演をさせて頂いて以来の9年ぶり、かつ参加も4年ぶりとなる。発表の申し込みの際、自身の専門分野である体育心理での発表も考えたが、テーマ別セッション（競技スポーツ）に挑戦することにした。日本体育・スポーツ・健康学会大会の特徴として、教員、研究員、学生、実践家など、いろいろな立場の様々な分野を専門とする参加者と意見・情報交換ができることがあるが、このテーマ別セッションではさらに「競技スポーツ」を軸にした多様な視点に触れられるのではないかと考えたからである。

今回、私が発表した研究は、スポーツチームでリーダーシップの発揮を求められる選手（＝アスリートリーダー：athlete leader）の成長に着目したものである。リーダーシップは、個人が集団の共通目標の達成に向けてメンバーに影響を与えるプロセス（Northouse, 2010）と定義される。そして、リーダーはこのリーダーシップのプロセスでメンバーに影響を与える個人であると考えられている。歴史的にリーダーシップの研究はコーチが中心であったが、キャプテンやキャプテンなどの公式な役割を持たずともリーダーシップを発揮する、アスリートリーダーに着目した研究が、特に2010年以降行われるようになってきた。アスリートリーダーがどのような特徴を持ち、どんな影響を与えるかに関する知見は積み上げられてきている。しかしながら、このアスリートリーダーがどのように育つのか、その成長のプロセスに関する研究はほとんど行われていない。この研究では、まずアスリートリーダーの成長に必要なリーダーシップスキルを評価する方法の検討と、その成長に関連する要因としての集団凝集性の役割を明らかにすることを目的とした。結果、アスリートリーダーシップスキルは4つのスキルで構成されることを確認し（図1）、集団凝集性がアスリートリーダーシップスキルの成長を正に予測する可能性が示された（図2）。この研究から、アスリートリーダーの成長に関する研究を進めていくための知見が得られたと考えている。

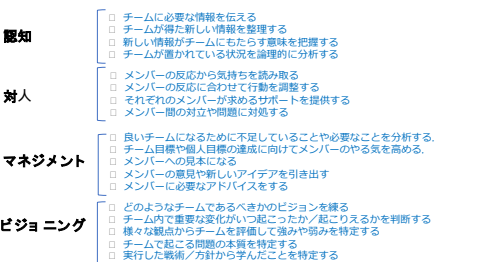


図1. アスリートリーダーシップスキル4因子と尺度項目

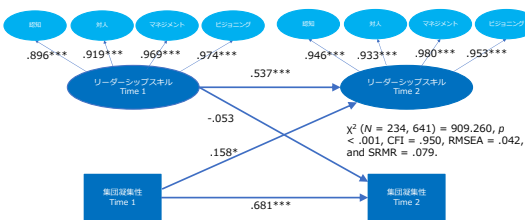


図2. アスリートリーダーシップスキルの変化と集団凝集性の関係

「競技スポーツ」をテーマにしたセッションということで実際にこのセッションは、多岐に渡る分野の発表で構成されていた。最初に、女子の集団競技におけるマウンティングの行為に関する検証結果が発表された（発表者：筑波大学 湯浅暁子先生）。その後、私の研究に続いて、中心選手をメンバーからは外すことを含めた、ベンチメンバーの選択におけるコーチとしての権限の行使についての考察（発表者：筑波大学：中澤翔大先生）、体操競技選手の「アカピアン」の技修正における実践知の研究（発表者：鹿屋体育大学：山下龍一郎先生）についての発表も行われた。座長は、日本女子体育大学の須甲理生先生が務められ、発表者と参加者の間で、活発な意見交換がなされた。

発表に際しては、このセッションの参加者の多様な専門分野を反映して、様々な角度からの質疑がなされていた印象である。私の発表では、スポーツマネジメントを専門とする参加者から「リーダーシップの自己評価のデータはあるか」という質問を頂いた。スポーツマネジメントの分野においても、リーダーシップは大きなトピックである。実際に、私の研究を含むスポーツにおけるリーダーシップの研究はマネジメントの分野の研究を多く参考に行っている。リーダーシップの研究において、自己評価が使われることはほとんどないが、リーダーシップに関する自己効力感はリーダーの成長に影響を与えるという知見も得られており（Machida-Kosuga et al., 2017）、それも合わせて見ていく必要はあると感じた。

また、研究の対象者が団体競技の選手に限られていることについての指摘もあった。スポーツにおけるリーダーシップの研究は団体競技を対象に行っていることが多い（e.g., Fransen et al., 2020; Loughhead et al., 2016）。集団におけるリーダーシップのプロセスを検証していく上で、やはりパフォーマンスにおけるメンバー間の相互作用がある団体競技の選手を対象にすることは妥当であると考えられている。しかしながら、個人競技でももちろんリーダーシップのプロセスは存在することが考えられ、個人競技におけるリーダーシップ、リーダーの成長に関する検証は必要である。例えば、今回の研究で示されたような集団凝集性のアスリートリーダーのリーダーシップスキルの変化への影響は、パフォーマンスにおけるメンバー同士の相互作用性の少ない個人競技では見られない可能性がある。

久方ぶりの日本体育・スポーツ・健康学会大会への参加、そして発表で新たな学びと今後の研究へのアイデアが得られた。また、大学院を修了して10年が経ち、大学院生に研究指導をする立場にもなったが、学会大会の発表そして参加は「研究を楽しむ」という初心に戻らせてくれる機会であることを改めて実感した。日々の雑務に追われて忘れがちなの気持ちをしっかりと持って、今後も研究に取り組んでいきたいと考える。

著者略歴：大阪体育大学大学院、准教授。Association for Applied Sport Psychology（応用スポーツ心理学会）、Certified Mental Performance Consultant®（CMPC）。米国ミシガン州立大学博士課程を修了後、大阪体育大学大学院助手、順天堂大学助教、大阪体育大学講師を経て、現職。現在は、リーダーの成長に関する研究に取り組みながら、理論・研究結果を活かしてスポーツ現場でコンサルタントとしての活動も行っている。

私は昨年に引き続き、健康福祉研究部会の企画で開催されたセッションで口述発表をさせて頂きました。私が参加したセッションでは、社会科学から基礎研究までの多岐にわたる研究報告と活発な議論が行われました。私の発表についての概要を以下にご報告致します。

道路横断判断に着目した背景には、高齢者における衝突事故の数にあります。全国的に歩行中の死亡事故は減少傾向にはあるものの、全年齢層に対する高齢者事故の割合に限っては増加傾向にあります。そして、およそ 76%が道路の横断中に発生していることから、いかに高齢者の衝突事故を予防できるかは重要なテーマだと言えます。多くの横断中の死亡事故は判断ミスに起因すると言われていています。高齢者は車の速度に対する知覚感が低下し、結果的に車との距離情報をもとに横断するかどうかを判断する傾向にあります。この特徴は、車が速かったとしても車との距離が遠いというだけで横断を選択する可能性が高いことを示します。そのため、距離や速度を正確に知覚し、安全な横断判断ができるかどうかは、衝突事故を予防するために重要な役割を持つことが推察できます。

私たちの研究室では、高齢者の知覚機能の特性をより詳しく明らかにするため、VR 環境にインターセプション課題（衝突予測課題）を構築し、衝突予測能力の加齢変化に関連する要因を検証しました。この課題では、移動するターゲットの軌道を予測し、制限時間内にインターセプトできるかどうか判断することが求められます。この課題における衝突予測判断には、物体の拡大情報や空間的位置情報を正確に知覚することが重要になります。この課題を用い、高齢者と若齢者の特性を検証したところ、加齢により物体の拡大情報に対する知覚感が低下することが、低い衝突予測能力に繋がる可能性が明らかになりました（昨年度の第 72 回大会でも報告）。この研究結果から、高齢者における物体の拡大情報に対する知覚感を向上させることができれば、衝突予測能力や道路横断判断の改善に貢献できるのではないかと考えました。

そこで私たちは、物体の拡大情報の集中的な暴露を通して知覚感度向上を狙うトレーニング課題を考案しました。具体的には、視環境を無背景（床面と周囲のオブジェクトを排除した環境）とし、正面から接近する物体との距離を推定する知覚トレーニング課題になります。物体のみが投影された環境であれば、物体の拡大情報のみが距離を推定するために用いられる唯一の視覚情報になるため、拡大情報に対する知覚感度の向上を図ることができると考えました。18 名の高齢者の方々に参加して頂き、新たに構築した拡大情報の知覚に特化したトレーニングの方がインターセプション課題を反復するよりも衝突予測能力や道路横断判断に繋がるという仮説のもと、効果検証を行いました。練習効果の判定には衝突予測能力（インターセプション課題）、物体の拡大情報に対する知覚感度（ターゲット接近検出課題）、道路横断判断（VR 道路横断課題；図 1）の 3 つをアウトカムにし、それぞれのトレーニング前後でこれら 3 つのパフォーマンスが変わるかどうか検討しました。

その結果、拡大情報の知覚に特化した距離推定課題は、インターセプション課題を反復するよりも、道路横断判断の改善に繋がる可能性が示されました。具体的には、横断できるチ

ャンスを見逃す回数が少なくなっており、過度に保守的な判断が是正されたような結果でした。しかし、衝突予測能力や物体の

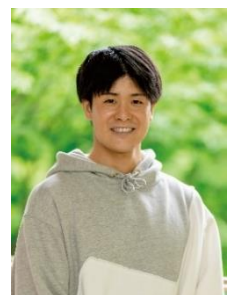


図 1. 本研究で使用した道路横断課題
知覚感度に対する効果は練習課題によって有意な差はなく、完全に仮説を支持する結果ではありませんでした。この結果に対する考察として、知覚トレーニング課題におけるタスク特異性（トレーニング課題は特異的であり他の課題には転移しない）が影響したと考えています。今回の各課題における知覚要素に着目すると、拡大情報の知覚に特化した距離推定課題は文字通り、距離情報をもとに意思決定がなされます。道路横断判断も同様に、距離情報は意思決定を担う 1 つの要因になります。特に高齢者の道路横断判断は距離情報に依存する傾向が強いため、距離に対する知覚感度の向上は、正しい道路横断判断に繋がる可能性は十分に考えられます。実際に、距離推定課題中の距離推定精度はトレーニングを重ねると向上する傾向にありました。そのため、距離推定課題による距離推定精度の向上が道路横断判断の改善に貢献したと考えています。今後はタスクの特異性を十分に考慮し、車の速度や到達時間を推定するようなタスクを構築するなど、最適なトレーニング課題を模索し、交通事故予防に資する研究を進めていきたいと考えています。

発表後にはフロアの先生方から、60 分間の知覚トレーニングによる参加者の疲労、道路横断課題における車の接近方向の選択理由、参加者の視力や認知機能の統制についてなど大変貴重な質問やご意見を頂戴しました。いずれのご指摘も重要かつ示唆的であり、今後の実験に役立てられるよう検討を続ける必要性を感じました。限られた少ない時間ではありましたが、こうした貴重なご意見を頂くことができ、改めて学会発表の重要性を実感することができました。

私は理学療法士がバックグラウンドであるため、主にリハビリテーションに関わる学会に参加することが多いです。本学会ではリハビリテーション系の学会と比べて、基礎メカニズムの探求を目的とした研究発表の多さが特徴の一つだと感じています。そうした基礎的な研究はリハビリテーションにおいても極めて重要であるため、リハビリテーション専門職に対して積極的な参加を勧めたいと思っています。

著者略歴：了徳寺大学健康科学部理学療法学科卒業。目白大学大学院リハビリテーション学研究科修了。現在、東京都立大学大学院人間健康科学部ヘルスプロモーションサイエンス学域の博士後期課程に在籍。VR を活用して高齢者における知覚と認知の情報処理に関する研究に従事している。東京都健康長寿医療センターで高齢者の疫学研究にも携わり、基礎と社会科学の実験を通して社会貢献を目指している。



2023 年 8 月 30 日（水）から 9 月 1 日（金）に同志社大学今出川校地 良心館・寒梅館で開催されました第 73 回日本体育・スポーツ・健康学会に参加させていただきました。岡山県の環太平洋大学から大阪府の大阪体育大学大学院へ進学した私にとって学会大会への参加は初めての経験でした。私は、3 日目のポスター発表させていただきました。発表当日は非常に緊張しておりましたが、多くの先生がポスターに足を運んでくださり、研究のディスカッションを進めていく中で緊張が徐々に和らいでいったことを今でも鮮明に覚えております。本研究では、スポーツ競技場面における不安が野球競技のパフォーマンスに及ぼす影響について制球力に着目し、関係性を明らかにすることを目的としました。その結果、プレッシャーのある課題難易度の低い条件で不安高群が不安低群と比較すると有意に高い制球力を示す結果となりました。本発表は、私が学部生時代に取り組んだ研究であり多くの改善点があったように思われます。しかし、多くの先生方から研究のアドバイスやご意見を頂戴することができました。この経験を通して、今後の研究計画をより緻密に検討していくために必要な視点や考え方を学ぶことができました。次大会では再度発表を行い、先生方とディスカッションすることのできるよう、研究活動に励んでいきたいと思ひます。

また、自身の発表以外にも本部企画シンポジウムやキーノートレクチャー、テーマ別シンポジウム等に参加をさせていただきました。大会初日の本部企画シンポジウムである 1“「知徳体を育む」体育スポーツ”では岡出 美則先生（日本体育大学）、1-1“スポーツの価値に基づく教育の推進に向けたスポーツ界の取り組み”では山本 真由美先生（公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構）、1-2“OECD 未来の教育スキル 2030 プロジェクト国際比較カリキュラム分析から見る示唆”では田熊 美保先生（OECD 教育・スキル局シニア政策アナリスト）が登壇され、今後の体育・スポーツの価値についてお話を聞かせていただきました。私は大学卒業後、中学校・高等学校（保健体育）の教員免許を取得し学校教育に大きな関心を持っております。私が専攻しているスポーツ心理学はスポーツ場面のみでなく学校教育場面でも大きな役割を持つ分野であると考えております。そのような背景もあり、日本の今後の体育・スポーツの価値について他国と比較を行いながらのお話は非大変勉強になることが多くありました。

このような本部企画シンポジウムの他にも、キーノートレクチャーやテーマ別シンポジウム等でも学内だけでは得ることのできない多くの学びがあり、学外での交流も多く経験することができました。

本学会大会での参加を通して、今回の日本体育・スポーツ・健康学会のテーマである“知徳体を育む「体育とスポーツ」の未来”について改めて考えることができ、大変勉強になりました。来年度以降の学会大会にも積極的に参加させていただき研鑽を積んでまいりたいと思ひます。

最後に、この度は大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成に採択していただき、誠にありがとうございました。助成いただいたおかげで、参加ならびに発表することができ、多くのことを吸収することができました。今回の発表経験を自身の研究へと活かし、よりよい研究へと発展させていきたいと思ひます。また、大会組織委員会、大会実行委員

会の先生方、会場運営を担当してくださった関係者の皆様、体育心理学領域の先生方にも重ねて御礼申し上げます。

著者略歴：環太平洋大学卒業後、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科に進学。現在、博士前期課程 2 年。特性不安、注意、あがり、プレッシャーに関心を持ち勉強をしています。現在は、高特性不安アスリートの選択的注意について、事象関連電位（event-related potential:ERP）を用いてシフト機能の検討を行っています。



2023年8月30日（水）から9月1日（金）に同志社大学今出川校地にて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会に参加させていただきました。対面での参加は2回目でしたが、昨年に引き続き、参加されていた多領域の研究者の方々と内容の濃い議論を多くさせていただき、ご指導を賜ることができました。今回も、テーマ別研究発表のスポーツ文化研究部会【課題B】「人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか」にて口頭発表をさせていただきました。当該セッションでは、哲学、人類学、社会学といった社会科学の幅広い研究分野から大変興味深い発表がなされ、スポーツ文化の醸成という共通意識のもと、活発な議論が印象的でした。

私の発表タイトルは「対人暴力被害と失感情症」というものでした。スポーツ指導場面における指導者からの対人暴力被害者がPTSDやうつ症状といった様々な精神健康問題を呈することがよくよく学術レベルで蓄積されてきました。他方で、被害者が有する内在的特性として、主に質的研究では、被害者が当時の被害経験に関する気分や感情を言語化することが困難であったり、場面沈黙したりする様子が広く見受けられています。こうした情動反応は、児童虐待でしばしば失感情症の側面から議論がなされますが、スポーツの文脈では未検討でした。そこで本研究では、対人暴力被害に由来する失感情症の形成とその特徴を定量的に検討することを目的とし、18歳から24歳の中高運動部所属経験者である調査モニター319名を分析対象としました。共変量を統制した階層的重回帰分析の結果、高頻度の心理的暴力被害が「感情の同定困難」「感情の伝達困難」「外的志向」の全ての失感情症傾向を予測していました。則ち、デモグラフィック属性と対人暴力の被害者リスク要因を統制した上でも、人格否定といった心理的暴力を高頻度で受けてきた人々は、自己の感情の識別が困難であったり、感情を他者に言葉で表現できなかったり、想像力が過度に制限され外的な事実を好んだりする傾向に陥りやすいことが示唆されました。対人暴力被害とPTSD症状を交絡因子とした逆確率重み付け法による傾向スコア分析の結果、男性よりも女性の方が全ての失感情症傾向が高く、競技の早期専門化群よりも非専門化群の方が「感情の同定困難」「感情の伝達困難」は高いことが推定されました。一般的に失感情症、特に感情の同定と伝達の困難性は女性に高く見られ、スポーツの文脈では、女性は男性よりも対人関係の葛藤や不利な差別を多く経験し、心理的ストレスを抱えやすいことが明らかになっています。これらを踏まえ考察では、生物学的性という限界点を含みつつ、対人暴力被害に起因する女性特有の要因に着目して論を展開しました。また、競技の早期専門化について、そもそも競技の早期専門化は、怪我やバーンアウトのリスク増加要因となり、競技の好成績へのアドバンテージはないことが指摘されています。昨今の先行研究では、競技の早期専門化の経験が対人暴力の被害リスクを増加させることも明らかになってきました。しかし本研究では、むしろ専門化の経験がない人々の方が、失感情症傾向は高まるという結果が得られ、これについては運動部活動という特定の対象時間軸の中での議論という点を考慮しつつ、中学校入学時点までに複数の競技種目を多様に行なっていたり、そもそも競技に触れてこなかったりした場合における、対人暴力が存在するトラウマ環境に

身を置いたことによるリアリティショックの弊害、という観点で論を展開しました。日本のスポーツの対人暴力研究は、精神医学・疫学的観点からアプローチしている欧米諸国に比べて知見が不足していますし、2013年以降、一過的に体罰をはじめとした対人暴力研究は増加しましたが、現在は下火な現状があると感じています。こうした状況も鑑みれば、学術レベルの地道な知見の蓄積は、スポーツの対人暴力の根絶に向けて、今後にも必要不可欠だと考えられます。

本発表セッションにて座長を務めてくださいました日本体育大学の高尾尚平先生による円滑な進行のもと、質疑応答では、大変有意義な時間を過ごすことができました。研究領域は異なるものの、同じ指導者の暴力について創造的なご研究をされている高尾先生には、セッション終了後・大会期間中に今後の暴力研究の方向性などについて多くの議論・ご助言を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。実際の質疑応答の場面では、まず、身体的暴力被害による影響が見られなかったのはなぜか、という核心的な問いを頂戴しました。対人暴力研究では、身体的暴力よりも心理的暴力の方が精神医学的症状を強く予測するという知見が多くみられ、これについては身体的暴力（＝体罰）の正当化・常態化の構造が関係していると考えられます。日本では体罰容認論という切り口で多様な研究領域から議論が蓄積されてきました。身体的暴力の容認・正当化の方略がこうした症状形成の機序には深く、複雑に関連しているのかもしれませんが、続いて、運動部活動だけではなく、他のスポーツ環境やスポーツ以外の家庭や日々の学校生活における関係性の中では症状の違いがあるのではないかと、被害経験の程度や強度によって症状は異なってくる可能性はあるのか、といった今後の研究の新たな可能性を探る上で不可欠なご質問を頂戴しました。本研究ではあくまで運動部活動場面の指導者からの暴力、という特定の状況にのみ着目をしていましたが、今後は、被害者の家庭環境や運動部活動以外のスポーツ環境・学校生活による影響も幅広く見据え、多様なダイナミクスの関係性の中で対人暴力を捉える必要があるのかもしれません。

末筆ではございますが、本大会開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました大会組織委員会・実行委員会をはじめとした諸先生、同志社大学の教職員、全ての関係者の皆様に改めて心より感謝申し上げます。また、大会期間中に様々な場面でお心遣いいただいた学生スタッフの皆様にも、お礼申し上げます。最後になりますが、この度の「大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成（体育心理学専門領域）」に採択していただきましたこと、誠にありがとうございました。今後とも体育・スポーツ・健康科学のさらなる発展に寄与することができるよう、精進して参ります。

著者略歴：山梨学院大学スポーツ科学部卒業、上越教育大学教職大学院修了後、現在、山梨大学大学院医工農学総合教育部博士課程に在籍。2024年4月より日本学術振興会特別研究員（DC2）。専門は、スポーツ精神医学・スポーツ心理学。



2023 年 8 月 30 日から 9 月 2 日に同志社大学今出川校にて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 73 回大会に参加させて頂きました。今大会ではポスターにて発表を行わせていただきました。私にとって、学会での発表は初めてであり、多くの研究者の方々から貴重なご意見をいただける場となり、大きな学びを得ることができたと感じております。

私の演題は、「アーティスティックスポーツ（AS）の視聴による観戦者の感情生起」でした。アーティスティックスイミングや新体操といった AS の特徴である芸術的な身体表現に着目し、観戦者の感情生起メカニズムと感情が生起する要因を明らかにすることを目的としました。その結果、観戦者は感情を表現した身体運動の映像を視聴した際、観戦者自身に視聴した映像と同様の感情に変化する傾向が見られました。また、視聴した映像が表現する感情を正しく推定（理解）できたかを検討したところ、感情の生起と理解には関係が見られませんでした。このことから、AS 観戦者の感情は、意識的なものよりも無意識な感情の伝染である可能性が明らかとなりました。加えて、運動学的情報のみによる映像の視聴では、感情が生じないことが明らかとなりました。これまでの研究では、身体表現の理解に焦点をおき、観戦者は身体表現から感情を理解できるという報告が多く文献にあります。ですが、実際に観戦者にどのような感情が生じているかまで検討されているものは見受けられません。私自身がアーティスティックスイミングの競技者として、観る人に「感動してもらいたい」という想いを持って競技を行ってきました。AS は、技術が素晴らしいだけの演技が感動する演技ではなく、競技者の感情が観る人に伝わることで、さまざまな感情が湧き起こり、その結果が感動を起こすと私自身は考えております。本大会でいただいた貴重なご意見をもとに、今後より一層追求し、AS だけではなく、身体運動機能にとっても、有益な知見になるよう励んで参りたいと思います。

本大会では、自身の発表以外に、口頭発表、シンポジウム、キーノートレクチャーなど幅広い発表を拝聴いたしました。先生方の発表後、直接ご挨拶させていただいたり、専門分野外の先生方から新たな知見を教えていただき、幅広い議論を経験することができました。

末筆ながら、この度の「大学院生に対する日本体育・スポーツ・健康学会参加助成」に採択していただきましたこと、誠に有難うございます。今後も有意義な研究ができるよう、自身の研究をさらに発展されるように日々精進して参ります。また、本大会開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました大会組織委員会をはじめとした諸先生、同志社大学教職員の皆様、関係者全ての皆様に重ねて深く御礼申し上げます。

著者略歴：近畿大学卒業後、近畿大学職員として従事し、2020 東京五輪アーティスティックスイミング日本代表として出場。その後、引退し、鹿屋体育大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程卒業。同大学院博士課程後期課程に在学中。現在は、身体表現と感情の関係をモデル化することを目指し研究を行なっている。



II. 研究会の活動報告

本研究会は、スポーツ選手の眼球・視機能をサポートしている眼科医、松原正男氏と枝川宏氏により設立された研究会である。スポーツと視覚の関係を科学的に議論するためのプラットフォームとして設立された。過去13年間にわたる研究会では、申請者をはじめ、複数の体育心理学専門領域に属する研究者が話題提供者ならびに参加者として貢献している。過去の研究会では講師謝礼・会場使用費が経費として必要であったが、それらについて設立者個人が支払っている状況が続いていた。こうした状況を改善する手段として、申請者が世話人を務める第14回については、本助成によって必要予算の一部を補填したいと考えた。この度このように助成をいただいたこと、世話人一同心より感謝申し上げたい。

第14回大会は、10月14日（土）16:00-18:30にオンラインにて開催された。参加者数は最大で90名程度であった。このうち、体育心理専門領域の会員参加者は10名程度であった。大会では2名の研究者から話題提供を頂いた。1人目の話題提供者は、東京都立大学人間健康科学研究科の福原和伸先生（体育心理会員）であった。タイトルは、「熟練アスリートの動作予測を支える視覚情報処理特性」であった。スポーツ熟練者のもつ予測能力に関して、ご自身の研究事例や関連研究をご紹介いただいた。特に、バーチャルリアリティ技術を駆使した方法により、スポーツ熟練者の動作情報を自由に操作することで、スポーツ熟練者の優れた予測に、「いつどのような情報」が利用されているのかを解説していただいた。

2人目の話題提供者は、玉川大学脳科学研究所の武井智彦先生であった。タイトルは、「身体の時遅れを克服する中枢神経メカニズム」であった。体性感覚情報に基づく予測と運動制御に関する関係性について、神経科学的実験ならびに計算モデルを組み合わせた研究について紹介いただいた。実験計測で見られる外乱応答の変化を数値モデルのシミュレーション結果やパラメータと合わせて解説するとともに、脳の予測メカニズムに関して計算論と観測に基づく統合的な解釈を呈していただいた。

最後に総合討論の機会を設けた。筑波大学の國部雅大先生（体育心理会員）から、ご自身のスポーツ選手の視線行動と状況判断特性に関する研究の紹介いただいた上で、各話題提供者に対して5つの質問が提示された。時間の都合上、各話題提供者がその中から2つの質問を選んで回答いただいた。各先生から、自身の専門の立場からスポーツとのつながりや今後の研究の展開に関する回答があり、リアルタイムで研究に取り組まれている先生方の視座や考えを知る機会となった。

著者略歴：p.18の右段を参照

第14回 スポーツ視覚研究会

世話人：樋口貴広（東京都立大学人間健康科学研究科） **オンライン配信**

10/14 2023 16:00 ~ 18:30

【参加費】
ミーティングアプリ「Zoom」によるWEB配信 **参加費 無料**

話題提供

1. 福原和伸先生（東京都立大学人間健康科学研究科）
熟練アスリートの動作予測を支える視覚情報処理特性
2. 武井智彦先生（玉川大学脳科学研究所）
身体の時遅れを克服する中枢神経メカニズム

総合討論

予測の機能からスポーツと視覚を考える
国部雅大先生（筑波大学）氏

申し込み方法 URL: <https://forms.gle/cZzjxfEo2Jm1J6Qj8>

事前登録締切日 2023年10月7日(土) 12時

本大会の開催には賛助会費の徴収があり、賛助会費は以下のメールアドレスにお送りいたします。

問合せ先：樋口貴広 (higuchi@ntmu.ac.jp)

関西体育心理例会は、関西地方で活動する体育・スポーツ心理学の大学教員が中心となって運営している団体で、毎年6月と12月に大学教員や大学院生の研究発表の場として小規模な研究会を開催している。最近では、学会大会における口頭発表と同水準の研究発表だけでなく、博士論文・修士論文の構想発表や、これから実施する実験や調査の研究計画について議論する場として機能しており、各人の研究をさらに深める場として利用されている。発表者に割り当てられる時間も20～50分と学会大会での研究発表よりも長く時間が確保できることもあり、大学院生を中心に毎回3～4件程度の発表エントリーをいただいている。大学院生の方が減っているなかであって小規模研究会の研究発表にこれだけのエントリーがあるのは有難いことである。ちなみに大学院生以外でも研究発表は可能であるが、近年はほとんど見られなくなっている。この点は継続的な研究会運営を考えた時にやや気がかりな点である。

特別セミナーの開催

このたび体育心理学専門領域より研究会助成をいただいたこともあり、令和5年度第2回関西体育心理例会では、通常の研究発表に加えて特別セミナーを企画した。今回は、関西スポーツメンタルトレーニング研究会との共催で、横浜 DeNA ベイスターズにおいてメンタルスキルコーチとして活動されている遠藤拓哉氏にご講演いただいた。

遠藤拓哉氏は、カリフォルニア州立大学フラトン校においてスポーツメンタルトレーニングで高名なケン・ラビザ博士に師事し、スポーツメンタルトレーニングの専門家としてのありかたについて直々に指導を受けられた研究者 兼 実践家（メンタルスキルコーチ）である。日本に帰国後は、広島大学大学院の関矢寛史先生のもとで研究活動に取り組むとともに、日本スポーツ振興センター・ハイパフォーマンスサポート事業の心理スタッフとして女子ソフトボール日本代表チーム、車いすラグビー日本代表チームのサポート活動をするなど順調にキャリアを築かれてきた。

講演当日は、ご自身のキャリアについて手短かに振り返っていただいた後、「プロ野球チームにおける帯同サポート——葛藤の連続——」というテーマで、横浜 DeNA ベイスターズにおいて現在取り組まれている活動、そしてこれまで体験されてきた心理的支援という立場ゆえの葛藤について詳らかにお話しいただいた。オンラインでの参加も可能にしたことから、当該テーマについて興味・関心を寄せる多くの大学教員や実践家の方々にご参加いただいた。最終的におよそ80名（対面参加者50名程度、オンライン参加者30名程度）の参加者数となり大変な盛会となった。

講演では、心理的支援という立場ゆえの葛藤について詳らかにお話しいただいた訳であるが、同様の活動に携わる方々にとって大変共感できる内容であったように思われる。プロ野球選手のようなトップアスリートの支援に携わる方々（アスレティックトレーナーやストレングストレーナー、投手コーチ、野手コーチなど）は実に多様なキャリアを経て指導に当たられている。そのため、スポーツメンタルトレーニングに対して抱く印象もバラバラであり、支援に携わる方々の全員が無条件に肯定的な反応を示すわけではない。特に、スポーツメンタルトレーニングの活動を実際に評価する運営サイドの方々に

に活動内容を理解してもらうのは容易ではないことが遠藤氏のお話から伺い知れた。

心理的支援の効果はどうしても目に見えて表れ難い。そのため、何をもってスポーツメンタルトレーニングの活動を評価するのか、トップアスリートを支援する我々も、そして雇用主である運営サイドも共通理解が築きにくいのが現実である。こういった現実にあって、プロ野球球団から複数年にわたって契約を結ぶことができていているという事実は、なにより遠藤氏がメンタルスキルコーチとして絶えず信頼関係を築くべく試行錯誤しながら献身的に活動されてきた結果であるように思われた。

講演時点では、引き続きプロ野球球団においてスポーツメンタルトレーニングの活動を継続されたいとお話しされていた。今後もプロ野球球団での貴重な経験、とりわけ「チーム外の専門家」ではなく「チーム内の専門家」として日常的にトップアスリートの心理的支援を行うといった本邦では珍しい立場での経験について、定期的にスポーツメンタルトレーニング指導士や資格取得を目指す方々に還元していただければ、本邦における心理的支援のさらなる充実に繋がるように感じた。

継続的な研究会運営のために

関西体育心理例会は関西地方で行われる小規模な研究会である。現在に至るまで、特に参加者を関西地方の方々に限定していた訳ではなかったが、実際のところ小規模研究会に遠路はるばる参加して下さる方々は（コロナ禍以前は）ほとんど見られなかった。ただ、ここ数年間でオンライン会議システムが急速に発展した結果、地方で行われる小規模研究会への参加ハードルはずいぶんと下がったように感じている。世話人として令和5年度は2度の研究会を開催したが、ここでは武庫川女子大学の田中美吏先生や助手の三森裕希子先生、大学院生にご協力いただきハイブリッド方式（対面とオンラインの並行開催）による研究会運営を行った。その結果、関西地方以外で活動されている方々が多数オンラインで参加して下さった。できれば関西地方にお越しいただき対面にて参加、研究発表を行っていただくことが世話人としての理想であるが、まずはどのような形であれ多くの方々に参加いただくことが小規模研究会の継続的な活動を考えた時に大切であるように思う。この研究会報告に最後まで目を通して下さった方々には、ぜひこれから開催される関西体育心理例会に参加いただければ幸甚である。

著者略歴：2017年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。2018年法政大学スポーツ研究センター客員所員を経て、2019年流通科学大学人間社会学部に着任。現在に至る。運動部活動場面での体罰をなぜ容認するのか、その心理的メカニズムについて研究を行っている。日本スポーツ心理学会、日本心理学会各会員。



臨床スポーツ心理学研究会の活動

中込四郎（つくば木の花クリニック、筑波大学名誉教授）

第10回目の開催となった本年度は、後ほど述べさせていただきますこととなりますが、本研究会にとって区切りの年となりました。本会の主な活動は、事例検討（1事例につき2時間半）を中心とした1泊2日の研究会開催、そして会員向けのニュースレターの発刊です。事例検討は、何らかの普遍的な結果や新たな知識を得るというのではなく、発表者は言うまでもなく、参加したフロアーも含めた臨床のトレーニングの場となっています。

令和5年の研究会は、例年通り日本の中央に位置する岐阜市にて対面で開催いたしました。なお、参加者数は会場の収容人数の制約により30名少々に制限させていただくことになりました。

研究会プログラムは以下の通りでした。

10/28：13：00～15：30 事例検討 司会：岸 順治（岐阜協立大学）

事例提供者：奥田 愛子（びわこ学院大学）

題目：『『自然狙点』を求め続ける射撃選手とのカウンセリング』

指定討論者：鈴木 壯（中部学院大学）

16：00～17：30 レクチャー

演者：江田 香織（法政大学）

題目：「思春期アスリートの心理的発達とその支援」

18:30～20:30：情報交換会

10/29：9：15～11：45 事例検討 司会：岸 順治（岐阜協立大学）

事例提供者：秋葉 茂季（国士舘大学）

題目：「動作のうまくいかなさとともに歩み続けるアスリートの競技人生」

指定討論者：中込 四郎（筑波大学名誉教授）

11：50～12：20 話題提供

話題提供者：鈴木 壯（中部学院大学）

題目：「アスリートの心理支援における“からだ”の語り」

上記の奥田先生と秋葉先生による事例の発表内容については、タイトルからご想像ください。事例発表では、相談事例を通して発表者とフロアーとの間で様々な水準での活発な交流が展開されるなか、発表者は自身の関わった事例や相談の流れ、そしてカウンセラーとしての自身の課題への理解を深めていくこととなります。また、フロアーは疑問、感想、意見等を発表者に投げかけることによって発表事例への理解を深めるだけでなく、自己理解そしてカウンセラーとしての力量の向上に繋げていくこととなります。事例発表では、事例の報告（説明）が1時間少々そして残りの1時間半弱は指定討論者のコメントも含め、発表された事例を挟んだ意見交換を行っているのですが、近年は、2時間半枠の事例検討では足りなくらいに充実したセッションとなっています。

また、レクチャーは江田先生に担当していただきました。先生はJISSを中心にジュニア期のアスリートの心理サポートに

関わる機会を多く持っており、そこでの臨床経験や関連の先行研究をもとにご発表いただきました。スポーツ心理学領域での競技スポーツの研究発表の多くが青年期年代を研究対象としており、江田先生ご自身の相談事例に基づいたジュニア期の発達年代にあるアスリートの心理的問題や課題についての研究は貴重だと考えます。ジュニア期あるいはそれ以前からの専門的な競技者養成のなかで、歩んできたアスリートが、その後どの様に競技で活躍していくのか、競技を行っているのかフォローアップすることも重要な課題となっていくようです。まずは、生涯発達を見通したジュニア期のアスリート養成が如何になされるべきか、また心理臨床の立場から何ができるのか、さらには研究成果や相談事例での経験に基づいた指導現場を動かすような提言のなされることが期待されます。

鈴木先生からは、アスリートのカウンセリングや心理療法場面でクライアントがしばしば語る広義の身体の語り（例えば、体の痛みや不調、動き、パフォーマンス）を3つの水準（ノーマル水準・身体化の水準・身体/心理の水準）で捉えてはどうかといった話題提供がありました。アスリートの場合、“体の動きの語り”が“こころのあり様の語り”と置き換えられることがあります。先生の言われる3つの水準での捉え方は、クライアントの主訴にからむ身体の語りが病態水準の理解への手がかりともなると言えるようです。広義の身体についてのアスリートの語りは、内的体験に繋がる「窓」となり、それはスポーツカウンセリングの独自性の一つともなっています。

本研究会の前身は、1991年（第42回日本体育学会大会：富山大学）の学会大会の開催期間中の半日を使いスタートした「臨床スポーツ心理研究会」でした。その後、会は20年以上にわたり継続されてきましたが、プログラムをさらに充実させるために、新たに1泊2日の「臨床スポーツ心理学研究会」として、毎年9-10月頃に日本の真ん中に位置する岐阜にて開催し、すでに10年が経過いたしました。この間、中込・鈴木が中心となって研究会の企画・運営を行なっておりましたが、そろそろ我々は後方支援にまわり、次の世代にバトンタッチしようと話し合ってきました。

そこで、令和6年の第11回臨床スポーツ心理学研究会の開催は、次なる20年目を目指すスタートの1年目となり、区切りの良い年と考えました。ここからは武田先生と秋葉先生が会の共同代表となり、運営を引き受けていただけることになりました。今後、お二人の先生が新しい色を徐々に出していかれ、会が益々、充実されんことを願っています。なお、鈴木&中込にとっても本会はこれからもスポーツ臨床を学びそして実践する上で貴重な場となっていくことから、私たちは“煩い小姑”とならないよう肝に銘じながら、引き続き参加して参ります。

日本体育学会体育心理学専門分科会から日本体育・スポーツ・健康学会体育心理学専門領域と位置付けが変わっても、私は毎年変わらず「会報」誌上で私たちの研究会活動について紹介させていただきました。事例を中心に守秘義務を遵守しながらの研究会活動の報告であったことから、本会の活動における他にはない特徴であり魅力を具体的にお伝えすることができませんでしたが、これまで拙稿に目を通していただいた方には感謝申し上げます。

2023年8月9日（水）～10日（木）に、筑波大学筑波キャンパスに於いて第31回運動学習研究会を開催しました。これまで長く年1回各地で開催されてきた研究会ですが、2020～2021年度には新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの活動を余儀なくされました。ようやく2022年は対面開催（@岩手大学）ができたものの制限があり、2023年は久しぶりに制限のない形での研究会を開けました。開催方式は、これまでオンライン活動を通して気づいた便利さと築いたノウハウを利用して、前年度同様に対面参加とweb参加のハイブリッド方式としました。本研究会世話人の平川武仁先生（大阪体育大学）、前年に開催をご担当くださった長谷川弓子先生（岩手大学）からご助言をいただきながら準備を進めていきました。

本年の研究会には現地参加26名、web参加8名の計34名（内訳：一般22名、学生12名）と各地から多くの方々にご参加いただきました。さらに、研究発表の演題数は20演題（すべて現地で口頭発表）と多くの参加者から研究発表がありました。当初の予想を超える参加・発表申込があり、本研究の特長のひとつであるじっくりと議論をする時間設定に苦しみました。今回は基本的に1件30分の発表時間枠（一部長短あり、質疑応答含む）でスケジュールを組むこととし、1日目の終了時刻と2日目の開始・終了時刻を当初予定から変更したものの、それでもかなりタイトになってしまいました。

発表順は、1日目は学部生・大学院生や、比較的若手の先生方による発表（12演題／13:00～19:00）、2日目はキャリアの長い先生方による発表（8演題／8:20～13:15）に割り振りました。各演題では、運動学習に関する様々な事象をテーマとした研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。特に今年の研究テーマの特徴や傾向としては、サッカーを題材とした研究、対人場面や集団場面での行動・振る舞い・駆け引きや意思決定に関する研究、仮想現実空間（VR）を用いた研究がいくつかみられました。日中の発表の際には議論や空き時間をなかなか十分にとれませんでした。1日目の夜に開かれた懇親会には現地参加のほとんどの方が参加され、発表を終えた方々が研究発表内容に関して参加者から更なるコメントをもらい、ざっくばらんにディスカッションする様子が所々の席でみられました。特に初めて参加された方々にとっては、多くの方々と新たに話をすることができたようです。これから研究を進めるうえで有意義なネットワークやコミュニケーションが形成されていくことが期待されます。

全ての研究発表終了後、若手研究発表賞として「門田浩二賞」の発表が行われ、学生（学部生・大学院生）の発表を対象に、参加者の互選（投票）により受賞者が選出されました。この賞は、若手の研究活動を奨励するために前年度の研究会から新設され、本年度は4名の方々が受賞されました。今後も、本研究会にて多くの学生の方々に積極的に発表していただければ幸いです。

本研究会では例年、各参加者がいずれかの発表者に対して研究会終了後にコメントを送り、発表者はそのコメントにリプライするというやりとりが行われています。研究会終了後に気づいた点や、研究会当日だけでは十分に伝わりきらなかった点などについて議論や意見交換を行い、研究の発展につなげるための取り組みとなっています。発表者はご自身の発表内容と合わせて、参加者からのコメントとそのリプライを

まとめ、報告集に掲載する原稿を作成いただきました。発表者、参加者のみなさま、ご協力ありがとうございました。ここに感謝申し上げます。

以上のように、本年の活動報告として研究会を振り返ってみました。今回の研究会は予想以上に多くの参加者にご参加・ご発表いただき、運動学習に関する大変有意義な学びの場となりました。一方で、先に記したように2日間での日程では時間的な余裕があまりありませんでしたので、最近ではなかなか行われていない3日間での日程を検討してみてもよいかもしれないと感じました（みなさま忙しいのでなかなかスケジュール調整が難しいでしょうか…?）。

本研究会の活動の様子や詳細は、運動学習研究会のホームページ（<https://www.pmcl-ouhs.jp/jmls-top.html>）に掲載していますので、ぜひご覧ください。また、研究会の開催案内や、運動学習に関する情報共有を研究会のメーリングリストでも行っています。メーリングリストの入会方法は同ホームページに掲載されていますので、興味のある方はご加入ください。

最後になりましたが、本研究会の開催にあたっては、体育心理学専門領域から研究会助成をいただき、研究会当日の運営費用に充てさせていただきました。この誌面をお借りしてご支援に厚く御礼を申し上げます。



著者略歴：京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位取得退学、博士（人間・環境学）。現在、筑波大学体育系に所属（体育心理学領域）。専門は体育・スポーツ心理学、実験心理学。主な研究テーマは、知覚と運動学習、視覚性運動制御、眼と手の協調、注意と注視、各種運動・スポーツ場面における状況判断など。



第 18 回スポーツ動機づけ研究会が、2023 年 7 月 29 日（土）～30 日（日）、甲南女子大学（神戸市）にて開催されました。2019 年に予定されていた会がコロナのため見送りとなり、4 年振りの開催でした。参加者は初日 61 名、2 日目 19 名でした。

主な活動報告

セッション 1 運動遊び・体育における動機づけと幼小連携

健康的な生活には、適度な運動習慣の形成が有効であることが知られています。調査によれば、成人期のスポーツ習慣と児童期に味わった運動の楽しさとの間には、強い相関が認められるそうです。さらに「運動が好き」「運動が楽しい」と答える児童は、幼児期から身体を使った遊びを盛んに繰り返していることも指摘されています。加えて近年では、運動経験が育む認知や社会性の発達に関する報告も相次ぎ、身体活動の保障が極めて重要な、子どもの発達支援に当たることが示されています。

ところが、新型コロナウイルス感染症の流行は、こうした活動の機会を阻害しました。スクリーンタイムの増加も相まって、最新の報告によれば、子どもたちの肥満傾向や運動の不得手さが深刻さを増しています。あるいは不登校など、増加を続ける学校の不適応の現象も、身体活動を通じて他者と関係する機会の喪失が、遠因として挙げられるのかもしれません。

上に示す問題意識から本セッションでは、子どもの運動遊びや体育に関わる研究者や実践者にご登壇いただきました。活動に取り組む子ども自身、あるいは、活動を支える先生の動機づけについて話題や実践の提供をいただきました。これら題材を通して、幼児期から児童期における楽しい身体活動環境の整地に向けたバトンパスを企画しました。加えてこの取り組みを、幼小連携・接続の視点からも議論しました。発達や学校種別間の移行を越え、子どもがふさわしい経験を重ねるための運動遊びや体育の留意点と、必要な動機づけ支援についての意見交換を活発に行いました。ご登壇いただいた方々（敬称略）の報告内容は以下の通りです。



登壇者

話題提供 1 畠中 智恵（純真短期大学）：幼児期における“からだ”を使った遊びの必要性を考える

年長児を対象として、からだを使った遊び（鬼ごっこ）経験が視点取得能力の獲得・拡大を通し、他者理解の促進に寄与する実証的な知見について報告された。

話題提供 2 塙 佐敏（甲南女子大学）：運動遊びを通した縄跳びとボール投げの支援 ～動きの習得・意欲の向上・主体的な取組の形成を求めて～

幼児を対象とした縄跳び指導や小学生を対象としたボール投げ指導の実践から、子どもの課題を抽出し、できるように導

く保育者・教師の支援について報告された。

話題提供 3 大平 誠也（関西国際大学）：児童期の体育と動機づけ ～ドラマチックな体験を例に～



人生に対する転機の話として、体育大会における表現運動への取り組みが、女兒 B の自信・意欲（心性）や他者への思いやり（社会性）を育んだ過程について報告された。

話題提供 4 有持 哲治（明石市教育委員会）：体育における児童の動機づけ ―競い合いと親密さの視点から―

間断なく展開される活動の中で、児童の仲間との出会いや競い合いの機会を保障し、運動に親しむ生活の基礎を育てるモデル体育授業が実演された。保育者・教師を目指す学生が児童役を担った。

コメント 幼小連携の留意点と課題：運動遊びや体育における子どもや先生の動機づけにも目を向けながら

コメンテーター 1 岡部 祐輝（幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園）

共通する 2 つの視点（「就学前教育・保育の視点で」「幼保一小接続・連携の視点を踏まえて考えると」）から 4 つの話題が論じられ、幼小連携の留意点と課題が議論された。

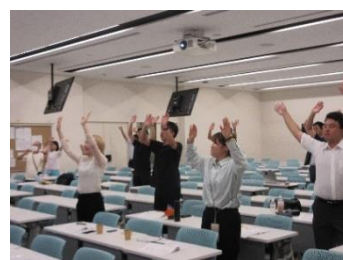
コメンテーター 2 吉田 伊津美（東京学芸大学）

教育要領に記述レベルで幼小の断絶はなく、内発的に動機づけられた遊びを中心とすることにより、健康・体育領域でこそ幼小連携が達成できる点について述べられた。

個人発表

1. 田中 あゆみ（同志社大学）低強度の身体活動が教室での動機づけに及ぼす影響

大学生を対象とした 9 週に及ぶ介入により、授業の取り組みに対する低強度の身体活動の効果について検証された。線形混合モデルを用いた分析によって、活力の向上や疲労の抑制といった効果が確かめられた。On-task 課題に対する効果検証など、小学校等への導入に向けた課題について議論された。



2. 北村 勝朗（日本大学）・服部 英恵（日本大学短期大学部）ギフテッドの視点から捉える動機づけ

特異な才能の持ち主であるギフテッドは、興味・関心の向く対象に対しては非常に高い動機づけを発揮し、成果を発揮するが、それ以外の一般的な生活場面などでは不適応を起こす

研究会の活動報告

ことも多い。身体活動領域でギフトドに注目した研究は希少であり、動機づけに示唆をもたらす可能性があるとして、今後の研究に向けた意見交換が行われた。

3. 廣瀬 光輝（日本大学大学院） 日本人の運動継続を促す高校体育授業—高校体育授業における動機づけ雰囲気・基本的心理欲求・内発的動機づけに関する研究—

成人期以降の運動継続に、高校の体育授業で経験した運動に対する動機づけのありようが関わっているとの仮説を立て、大学生を対象に検討が行われた。この結果、先行研究が示唆するような動機づけの影響が再現されるとともに、現在の運動継続者と非継続者との間では異なる影響も確認された。結果に基づく現場への示唆が提示された。

セッション 2 社会的実践における動機づけ：体育・スポーツ指導を含む様々な実践へいかに貢献するか

本セッションでは、動機づけ研究の社会的貢献について議論することをねらいとしました。この目的に向け、スポーツ指導・体育をはじめ、様々な文脈で研究を進める研究者に登壇をいただき、実践者や現場との協働において意識されている知恵や工夫ないし課題について、特に動機づけの視点から語っていただくことをお願いしました。動機づけ研究のプロパーでないにもかかわらず、趣旨を理解し、ご登壇くださった先生方に、この場をお借りしてあらためてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

ところで動機づけ研究の社会的貢献としては、次のような内容が考えられるように思います。

たとえば、教師を目指す学生や学び続ける指導者に対し、私たちはいかに動機づけ研究の成果を伝えていくことができるでしょうか。動機づけは、人の行動を説明し、予測する、有効な手立て（心理的構成概念）です。実践者にこのことを実感いただき、自身の教育や指導に活かしてもらう上で、「論文をお渡しすること」以外に、何かできることがあるのでしょうか。

あるいは動機づけは、アカデミックな厳密性に基づかないまでも、社会的実践のあちこちで意識され、触れられることの多い心性です。たとえば職員のエンパワメントやクライエントの主体性の保護などはそれに該当するでしょう。研究者は働きやすい職場や穏やかな日常の回復を願って、こうした心の働きに言及することがあるはずです。このような営為は、視点資源（宮崎、1998）として、どの程度まで実践に有効な影響をもたらすのでしょうか。あるいは研究者の助言は実践者にとって、実践知として自明の範囲に留まるといった可能性はないのでしょうか。

私たちスポーツ動機づけ研究会は、スポーツ動機づけ研究の活性化を願い、2018年（第17回）大会以来の再会を果たします。スポーツ動機づけ研究のリスタートに際し、他の文脈からも学びながら、あらためて動機づけ研究のデザインや社会的貢献について考えるべく、様々な観点から意見交換を行いました。

ご登壇いただいた方々（敬称略）の報告内容は以下の通りです。

登壇者

話題提供 1 中須賀 巧（兵庫教育大学）：体育・スポーツ指導と動機づけ

研究成果を現場で活用してもらうための工夫について報告

いただいた。例：中学体育の男女共習化における個に応じた指導や主体的な授業に対する目標理論の援用など。

話題提供 2 伊藤 篤（甲南女子大学）：“育児に向かう”意欲を引き出すコネクション・プログラム—子育てひろばのエンパワメント実践—

子育て支援における最初のハードルを下げるためのビギナーズ交流会の実践について報告いただいた。参加者の態度変容につながるエンパワメントの効果が示された。

話題提供 3 則定 百合子（和歌山大学）：心理臨床における動機づけ—解決志向アプローチの実践例—

3つの実践に通底する、自身が有するリソースへの気づきを促す心理臨床的な実践—原因探しから解決志向アプローチへの移行の有用性・可能性について報告いただいた。

話題提供 4 岡田 涼（香川大学）：学校教育における動機づけ研究の役割

教育現場における動機づけ研究者の一つの役割として、〔実践知—科学知〕の齟齬に基づき開発された自律性支援に関する実践プログラム等について報告いただいた。

指定討論 北村 勝朗（日本大学）：社会的実践における動機づけ研究の課題

登壇者との対話を通し、取り組みにおける「もどかしさ（課題）」と「明るい見通し」の2つの観点から、動機づけ研究の課題と可能性が語られた。変換、エンパワメント、解釈志向アプローチ、自律性支援プログラムといったキーワードが抽出され、これらを視点刺激的な知とした今後の研究について、参加者各々が考えた。

総括

教員養成校としての大会主催校の特徴を活かし、かつ、対面での久しぶり大会であることからあらためて、動機づけ研究の社会的貢献に関するディスカッションを行いました。個人発表もそれぞれに特徴のある豊かな内容で、中でも院生の発表があったことは、会の今後にとって好ましいできごとでした。会期の設定に課題があり、必ずしも多くの参加を集めることはできませんでしたが、今回の再会（再開）を契機として、再び会として、社会に有意な動機づけ研究の蓄積を目指していければと願います。酷暑の中、ご参加いただいた皆さまに、深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

文献：宮崎清孝（1998）心理学は実践知をいかにして超えるか：研究が実践の場に入るとき 佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭（著）心理学と教育実践の間で 東京大学出版会 Pp. 57-101.

著者略歴：早稲田大学、九州ルーテル学院大学を経て、甲南女子大学教授。子どもの適応と発達に及ぼす個人内外の要因の時系列的相互影響分析に取り組んでいます。スポーツはポジティブな影響をもつ個人外要因の一つと考えています。



本研究会は、2024 年 2 月 28 日午後・29 日午前の二日間にかけて、大阪体育大学にて 4 年ぶりの対面による形式で研究会を開催いたしました。大阪体育大学、日本体育大学、筑波大学、東海大学、広島大学、関西学院大学、びわこ成蹊スポーツ大学、立命館大学、慶應義塾大学といった複数の大学の大学院に所属する学生を中心に、大学教員や職員の先生方、大阪体育大学学生 SMT チームの OBG の先生方にもお越しいただき、総勢 36 名の方々にご参加いただきました。

本研究会は、日本スポーツ心理学会認定の「スポーツメンタルトレーニング指導士（以下、SMT 指導士）」の資格取得を目指し、SMT について学んでみたいと考えている学生を中心に集い、研究会を通じてさらなる研鑽を積み、本研究での学びを各々の今後の心理サポート活動に活かすことを目的として開催しています。また、より質の高い研究会となるように、SMT 上級指導士である土屋裕睦先生（大阪体育大学）、菅生貴之先生（大阪体育大学）をスーパーバイザーとしてお招きし、研究会の内容や運営についてご意見をいただきながら開催に向けた準備を行い、今年度で 16 回目の開催を迎えることができました。

今年度（第 16 回）の研究会は、4 年ぶりとなる対面形式での研究会を開催できるということで、参加した方々の学びが深まることはもちろん、研究会の講義の中で、各々が感じたことや考えたこと、自身の研究テーマなどについてのディスカッションを行う機会を多く設けました。そして、参加者間での交流を深め、研究会以降にも各々の交流が続いていくようにとの思いも込め、「共に学び・考え・実践する-心理的側面から“支える”スポーツへの関わり-」というテーマで研究会を開催いたしました。今年度は、筑波大学より雨宮怜先生、関西学院大学より相川聖先生をお招きし、お二人の先生にグループディスカッションやグループワークなども交えながらの形式で各先生に 60 分×2 セッションの形式で、ご講演を実施していただきました。

講演①として、関西学院大学の相川聖先生に「研究から実践への応用」というテーマでご講演していただきました。2020 年に博士後期課程を修了された相川先生が、博士前期課程から博士後期課程を修了されるまでのこれまでの研究を紹介していただきながら、どのような経緯で研究を進めていったのか、研究を進めていく中で研究で得られた知見をどのように実践に応用していくのかといったことについて先生のこれまでのご経験をお話いただいた後に、各グループに分かれ、自身の研究テーマは、将来的にどのように実践へ応用していくことができるのか、また、どのような研究を進めていくことで実践に応用していくことができるのかについて、一人で考えるのではなく、グループで意見交換を行いながらセッションを進めていただきました。最後には、グループで話し合った意見を全体に発表をし、相川先生からもコメントをいただくといったセッションを実施していただきました。SMT の実践だけではなく、自身の研究に関しても今一度振り返ることができ、より学びを深めることができるセッションとなりました。

講演②としては、筑波大学の雨宮怜先生に「第三世代のメンタルトレーニングとしてのマインドフルネスとその実践方法」というテーマでご講演していただきました。認知行動療法の変遷を基に、マインドフルネスがどのように考えられ、どのよ

うにして広がってきたのか、マインドフルネスがどのような理論をベースにしているのか、これまで実証されているマインドフルネスの効果などについてご紹介していただくだけでなく、ここをコントロールすることが難しいということを経験することができるワークなども取り入れながらセッションを実施していただき、その後に、実際にマインドフルネスを経験するセッションを実施していただきました。マインドフルネスの体験セッションでは、ただ単にマインドフルネスを経験するだけではなく、実際にマインドフルネスを担当する講師視点でどのような点に気をつけてセッションを実施するかなどについてご講演していただきました。そして、相川先生の講演同様、セッション内でもグループディスカッションの形式で、自分自身の体験をグループ内でシェアする時間を設けていただき、学びをアウトプットする時間をいただけたことで、より学びを深めることができるセッションを実施していただきました。

先生方の講演に加えて、4 年ぶりの対面開催ということで 1 日目のセッション終了後には、懇親会という形で、参加者の皆様で食事をとりながら、セッションで感じたことや自身の研究テーマなどについて、参加者間で交流をはかることができる場を設けることもでき、研究会以降も続いていく参加者間の交流のきっかけになったのではないかと感じています。

次年度の第 17 回学生 SMT 研究会は、今年度同様、大阪体育大学と日本体育大学が主幹となり、日本体育大学世田谷キャンパスでの開催が決定しています。今後も大阪体育大学、日本体育大学だけでなく、様々な大学の皆様との連携していくに加え、これまで学生 SMT 研究会に携わられてきた OBG の方々との連携もはかりながら、より良い研究会を目指していきたいと考えております。次年度以降も、SMT 指導士や心理サポートに興味のある方の参加を心よりお待ちしております。



著者略歴：大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士前期課程修了。修士（スポーツ科学）。現在、公益財団法人日本ハンドボール協会 情報科学スタッフとして活動。男子ハンドボール日本代表 U19 アナリストを務める。研究テーマは、指導者・アスリートのリーダーシップの成長について



Ⅲ. 研究室紹介

1. 自己紹介

2014年より東京成徳大学応用心理学部健康・スポーツ心理学科の教員として、教育研究活動に従事しています。大学までのサッカー経験をもとに、「上手い選手はどこを見て、何を考えてプレーしているのか」、「どんな練習をすれば判断の良いプレーができるようになるのか」を考え、状況判断を養う効果的なコーチングを研究してきました。新潟医療福祉大学サッカー部で秋山隆之先生（当時のサッカー部監督）の指導を受け、サッカーを科学的に研究することを勧められたことが研究に興味を持つきっかけでした。学部3年次から大学院修士課程までの4年間は山崎史恵先生の研究室に所属し、研究のイロハを指導していただきました。そのなかで研究の面白さに気づき、大学での研究職を目指す決意をしました。博士後期課程からは筑波大学大学院コーチング学専攻のサッカー方法論研究室に所属し、浅井武先生（筑波大学名誉教授）、中山雅雄先生にご指導いただきました。文武両面で目立つ実績もない私が今こうして大学教員として働けるのは多くの方々の支えがあってのことです。環境や人に恵まれたことに感謝しています。

2. 東京成徳大学の特徴

東京成徳大学は1926年（大正15年）に創設された王子高等女学校を母体とし、1993年（平成5年）に東京都北区に開学されました。2026年には学園創立100周年を迎えます。私の所属する健康・スポーツ心理学科は2009年（平成21年）に応用心理学部の1学科として千葉県八千代市のキャンパスに設置され、2020年（令和2年）より東京キャンパスに移転しました。現在、東京成徳大学は子ども学部、経営学部、国際学部、応用心理学部（臨床心理学科、健康・スポーツ心理学科）の4学部5学科で構成され、約2000人の学生が在籍しています。

3. 健康・スポーツ心理学科での教育活動

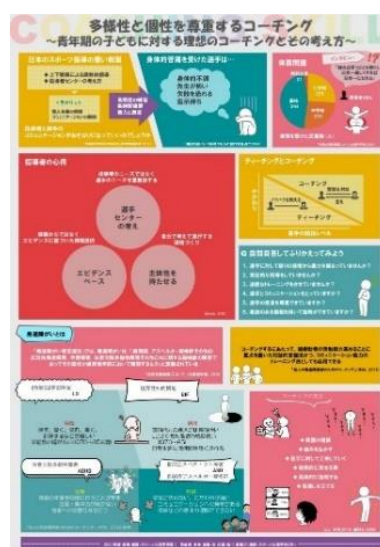
健康・スポーツ心理学科は、その名に「スポーツ」が冠されながらも、いわゆるスポーツ・健康系の学科ではなく、心理学を中心にスポーツ心理学、ポジティブ心理学、健康心理学の3分野を基盤として、人々の心身の健康支援に関する知識と技能を身に付ける人材育成の学科です。そのため、スポーツ実践者としての技術向上よりも、スポーツや心理学を通じて心身の健康を促進する方法に関心を寄せる学生が多くみられます。2023年現在、スポーツ心理学分野を担当する教員は佐々木文予先生と私の2名です。

私は主に、「スポーツ心理学（1年生対象）」、「コーチング論（2年生対象）」、ゼミと呼ばれる「健康・スポーツ心理学演習Ⅰ・Ⅱ（3年生対象）」、「卒業演習（4年生対象）」を担当しています。また2024年度からは、「スポーツ心理学特講」、「スポーツ心理学演習」の2科目を新たに追加し、スポーツ心理学領域の充実を図っています。私は大学での学びを通じてスポーツ心理学に興味関心を抱き、その面白さや奥深さを知りました。今後は私自身が多くのスポーツ心理学の面白さや魅力を伝えたく、学生を教育することを心がけています。

4. ゼミ活動

2023年度は3年生5名と4年生9名の合計14名が所属し、卒業研究に向けて研究活動を行っていました。ゼミ活動の様子を少し紹介します。3年生の前期では、実践的

に活用するために必要な専門知識を深めることを目的とした活動を行っています。単に論文抄読するだけでは学生がスポーツ現場をイメージしづらいようなので、スポーツ心理学やコーチング学を専門的に学んだことがない方にもわかりやすく情報を伝えるためのアカデミックポスターを作成することを到達目標とし、ポスターの構成から内容、デザインに至るまでの全てをゼミ生たちで議論しながら取り組んでいます。3年生後期では、卒業研究に必要なスキルを身につけるために、調査・実験等を行い、ショートレポートをまとめる「ミニ卒研」を実施しています。そして4年生では、各自で設定したテーマに関する研究を行います。特に印象に残っている研究として、サウナ浴の効果を調査したものがあります。非常に行動力のある学生で、銭湯を経営している知り合いに依頼してサウナ施設を借りて実験し、その成果を日本心理学会第87回大会で発表しました。この一例に限らず、運動学習研究を行っている私にとって、これと異なるテーマに取り組む学生との研究活動は、私自身に新たな気づきをもたらしてくれる貴重な機会になっている気がします。



図：スポーツ指導者のあるべき姿に関するポスター

5. おわりに

このような形で研究室活動を続けてきましたが、未だに誤行錯誤の連続です。教育と研究を両輪とする研究室活動の在り方を模索しながら、今後も多くの方々とつながりを大切にして教育と研究に取り組んでいきたいと思っています。今後とも皆様のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

著者略歴：筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程コーチング学専攻修了。現在は東京成徳大学応用心理学部健康・スポーツ心理学科に所属。状況判断やコーチのリーダーシップなどを研究テーマにしている。



IV. サテライト企画：学位論文発表

Foot trajectory when crossing over irregularly shaped obstacles 不定形障害物を跨ぐ際の足部軌跡

三浦有花（武庫川女子大学）

ヒトは歩行環境が、今までに経験のない環境や予測不可能な環境であっても、環境に応じて歩行を適応させることができます。このような適応的歩行を行うためには、歩行経路に現れる障害物の形状を視覚情報から瞬時に判断し、跨ぐ障害物の形状に応じて下肢を制御しなければなりません。先行研究から、障害物跨ぎ越し歩行における下肢の運動制御は、障害物の形状に応じて、エネルギーコストの最小化と障害物との接触リスクのトレードオフ及び、反対側の四肢の運動を考慮した制御を行うことが示唆されています。これらの知見から、下肢の運動は、反対脚が通過する障害物の高さ、反対脚の運動といった両脚を含む障害物全体の形状を考慮して、下肢を上下・左右方向に制御していると考えられます。本博士論文では、障害物を歩行中に跨ぐ課題を用いて、歩行運動は、反対脚も含んだ障害物全体の形状の影響を受けるかどうかを明らかにすることを目的として以下に紹介する2つの実験を行いました。

研究1: 左右で高さの異なる障害物を用いて、一方の障害物を越える際の足部の挙上高、反対脚が跨ぐの障害物の高さに影響されることを明らかにすることを目的としました。対象は健康な若年成人16名とし、歩行中に障害物を跨ぐ課題を実施しました。障害物の高さを2種類（低、L, 9.0cm, 高、H, 22.5cm）に設定し、それらを組み合わせて4つの障害物条件を設定しました。LL条件では両方の障害物が低く、LH条件では先行脚に低い障害物、後続脚に高い障害物が配置されました。同様に、HL条件とHH条件も配置しました。条件間の障害物から第一中足骨までの鉛直方向の距離であるクリアランスを比較しました。研究1の結果、HL条件ではLL条件よりも後続脚のクリアランスが大きくなりました。また、先行脚のクリアランスはLH条件でLL条件よりも大きくなりました。この結果から、下肢の運動制御は足部直下の障害物の高さのみによって決まるのではなくむしろ、反対脚の障害物の高さを含む総合的な情報が、障害物横断時の下肢の運動制御に利用されていることが示唆されました。

研究2: 跨ぐべき障害物の形状によっては足部の挙上位置は同じであっても、左右方向の足部の位置に応じて、障害物との接触リスクが異なる可能性があります。そこで研究2の目的は、障害物の形状に応じて足部が左右方向にも制御されるかを明らかにすることとしました。健康な若年成人16名を対象に、歩行中に前額面から見て台形の障害物と長方形の障害物の2つの形状の障害物を跨ぐ課題を実施しました。その結果、台形の障害物を跨ぐ際は、障害物の高さが低くなる左右方向の制御を行うことでクリアランスを確保していることが示されました。研究2の結果から、障害物跨ぎ越し歩行における下肢の運動は、鉛直方向だけではなく左右方向の足部位置の制御も行うことで、障害物との接触リスクを下げる戦略をとることが示唆されました。

本博士論文で得られた知見は、以下の3点です。(1) 障害物跨ぎ越し歩行における下肢の運動は、反対脚が跨いだ障害物の高さや、反対脚の運動の影響を受ける。(2) 不定形な障害物を跨ぐ際には、下肢の運動は鉛直方向だけではなく左右方向の制御も含めた制御を行う。(3) 下肢の運動は、足部直下の障害物の高さではなく、反対脚を含む障害物全体の形状によって決まるということです。本博士論文は、「下肢の運動は反対

脚が跨ぐ障害物の高さや反対脚の運動の影響を受けて制御がなされている」ということと、障害物跨ぎ越し歩行における下肢の運動制御は、「障害物全体の形状に応じて、足部の挙上だけではなく左右方向の足部位置の制御を行うことで障害物との接触リスクを下げる」ということを示唆するものであり、この知見は高齢者の転倒問題解決やヒトの歩行制御メカニズム全容の理解に繋がることが期待されます。

当日は、オンライン上で運動学習や筆者と同じように、障害物跨ぎ越し歩行研究に取り組んでいらっしゃる3名の方からご質問をいただきました。主に運動学習や制御についての質問でした。質問者との議論を通じて筆者が考えたことは、本博士論文で得られる知見の社会的意義を考えることの重要性です。本発表では、学術的意義については詳細に述べましたが、「この研究はどのように社会へ貢献するのか?」については具体的に明言しておらず、質問の中でもご指摘いただきました。研究は研究者のためにあるものではありません。研究者である方もそうでない方も含む全ての方々が過ごす社会全体をより良いものとするためにあると筆者は考えています。今後は「この研究が社会にどのように貢献するのか?」ということを意識して研究に取り組んでいこうと深く反省しました。また、発表中にネット環境のトラブル等がありましたが、司会者の方が上手くフォローをしてくださったお陰で事なきを得ました。ありがとうございました。発表や質問では、筆者自身の力不足が原因で全体を通して、聞きづらく、見苦しい所があったと反省しております。当日オンラインで聞いてくださった皆様、誠に申し訳ございませんでした。ですが、この企画があったからこそ、筆者自身に不足している発表スキルや、改善するための方法について深く分析することができました。

当日、出席してくださった皆様にとって有益な知見が提供できたのかどうかは分かりませんが、少なくとも本企画で発表をさせていただいたからこそ、筆者自身に足りない研究スキルに気付かせていただき、更なる自己研鑽に繋がった、大変素晴らしい経験をさせていただいたと筆者自身は感じております。

今後は高齢者や子供の転倒問題解決を目指して研究を行うことを考えております。具体的には、若年者だけではなく、高齢者は子供（未就学児）も含めた歩行運動の発育発達、老化過程を明らかにしていきたいと考えております。

最後に、学位論文発表企画での発表という大変名誉な機会を与えてくださった先生方、企画・運営をくださった関係者の先生方、そしてご参加いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

著者略歴: 広島大学大学院博士課程後期修了（2023年3月）、博士（学術）の学位取得。現在の所属は武庫川女子大学健康・スポーツ科学部嘱託助手。現在の研究は、障害物跨ぎ越し歩行課題を用いて、柔軟で迅速な適応を可能にするヒトの歩行適応方略の解明。



2023年11月17日にオンライン形式で行われた体育心理専門領域サテライト企画「学位論文発表企画」において、大阪体育大学で取り組ませていただいた学位論文を発表させていただきました。このような発表の機会をいただき、博士論文発表会での緊張を思い出しながら、これまで博士課程で取り組んできた研究を先生方に知っていただく貴重な場として、感謝の気持ちを感じながら発表させていただきました。今回は、学位論文の概要や発表後に議論させていただいた内容、そして今後の研究の展望などについて報告させていただきます。

学位論文のテーマは、「競技スポーツにおける心理社会的スキルの般化の特徴と要因」でした。チームメートや指導者とコミュニケーションを取りながら日々厳しい練習やトレーニングを行い、技術や記録の向上を目指しアスリートとしての目標達成に向けた活動である競技スポーツは、ライフスキル（WHO, 1997）を効果的に獲得できる機会の一つであると考えられています。そして、そのライフスキルを獲得するプロセスにおいては、競技スポーツ場面において活用されている心理社会的スキル（例えば、目標設定スキルやコミュニケーションスキルなど）がスポーツ以外での生活場面に般化することが必要であると考えられています（Holt et al., 2017; Pierce et al., 2017; 洪倉ほか, 2018）。そのため、日々競技スポーツに取り組む大学生アスリートは、効果的にライフスキルを獲得できていると考えられる一方で、学業と競技生活の両立やキャリアの獲得などに様々な問題を抱えていることが報告されています。そのため、大学生アスリートには競技スポーツを通じたライフスキル獲得のための教育支援が必要であり、特に競技スポーツにおいて活用されている心理社会的スキルの般化を目的として支援を行うことが効果的であると言えます。そのため、本研究では、競技スポーツを通じたライフスキル獲得プロセスにおける心理社会的スキルの般化に着目し、大学生アスリートを対象としたライフスキル獲得のための教育支援に有益な情報となる基礎的な知見を定量的アプローチにより得ることを目的としました。

定量的なアプローチを行うために、まず、心理社会的スキルの般化を測定できる「大学生アスリート用競技スポーツにおける心理社会的スキルの般化尺度」を作成しました。本尺度は、心理社会的スキルが学修、進路選択、競技スポーツ以外の人間関係、経済活動や衣食住などの生活といった場面や環境に般化している程度を測定できる尺度であり、一定水準の信頼性と妥当性も確認されました。続いて、本尺度を使用し、大学生アスリートの心理社会的スキルの般化の特徴について、先行研究から関連があるとされる個人属性や、般化への気づきの程度との関係を検討しました。その結果、本尺度の一部の側面において性別、学年が関連し、全ての側面において競技スポーツ場面で取り組む課題と競技スポーツ以外の場面で取り組む課題間の類似性や心理社会的スキルが競技スポーツ以外の場面に般化の可能性への気づきが関連することが明らかとなりました。そして、心理社会的スキルの般化の要因を明らかにするために、LDI/BNT model (Hodge et al., 2013) や自己決定理論 (Ryan and Deci, 2017) に基づいて、指導者からの欲求支援・阻害行動と基本的心理欲求の充足・不満が心理社会的スキルの般化に及ぼす影響について検討しました。その結果、本尺度の全ての側面に関して競技スポーツにおける基本的心理

欲求の充足が促進し、一部の円滑な人間関係を築くことに関連するスキルの般化に関して競技スポーツにおける基本的心理欲求の不満が阻害することが示唆されました。また、競技スポーツにおける基本的心理欲求の充足には指導者からの欲求支援行動、競技スポーツにおける基本的心理欲求の不満には指導者からの欲求阻害行動がそれぞれ要因となることが示唆されました。

発表後は参加者の先生方と質疑応答を行わせていただきました。研究内容について様々なご示唆やご質問をいただくことが出来ました。その中でも、「本研究の内容を中学生や高校生の部活動に所属している生徒を対象に実施するべきではないのですか？」というご質問をいただき、改めて自分が取り組んできた研究テーマについて深く考え直すことが出来ました。もともと私が本学位論文のテーマを考えるきっかけになったのは、大学院に進学する前に勤務していた中高一貫校での運動部活動の指導経験でした。指導している生徒は様々な心理社会的スキルを部活動では発揮しているのに、どうして授業など部活動以外の場面ではその様子が見られないのだろうか、と疑問に感じていました。この質問をいただいたことでそのことを思い出し、改めて今回の研究テーマは中学生や高校生といった年代でも検討していく事の重要性を感じました。中学生や高校生といった年代から、「心理社会的スキルは般化する」ということに気づくことが出来ることで、それ以降の年代でもより効果的にライフスキルを獲得することに繋がり、競技スポーツ以外の人生もより充実させることになるかもしれないからです。

そのため、今後は大学生だけではなく中学生や高校生といった年代も対象に、競技スポーツにおいて活用される心理社会的スキルの般化がどのような要因によって促されるのか明らかにしていきたいと考えています。それにより、競技スポーツに一生懸命取り組むことの意義や、ライフスキル獲得のための教育支援に有益な知見を示唆していきたいと考えています。また、般化の要因については、様々な中でも特に指導者のコーチング方法に着目し、心理社会的スキルの般化を促す指導者の関わり方についてさらに検討を重ねていきたいと思っています。最後にはなりますが、今回このような企画をご準備いただき、貴重な発表の機会を与えてくださった体育心理学専門領域の先生方、実行委員の先生方、また本企画に参加いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

著者略歴：奈良教育大学教育学部卒業後、私立帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校に保健体育の常勤講師として勤務。その後、大阪体育大学スポーツ科学研究科博士前期課程、博士後期課程を経て、現在は京都先端科学大学健康医療学部嘱託講師。大学生や高校生を対象に、競技スポーツや体育を通じたライフスキルの獲得を支援するために、心理社会的スキルの般化に着目した研究や実践を行っています。



V. 学位論文紹介

条件統制下における運動負荷が起床時コルチゾール反応に及ぼす影響

小笠原佑衣 (大阪公立大学国際基幹教育機構)

学位：博士 (スポーツ科学), 授与機関：大阪体育大学

取得日：2023 年 3 月 19 日, 指導教員：土屋裕睦教授

本研究の目的は起床時コルチゾール反応 (cortisol awakening response, 以下「CAR」と略す) に影響を及ぼす運動負荷の条件の一端を条件統制下での実験から明らかにすることであった。運動が CAR に及ぼす影響に関するこれまでの知見から, CAR は単発および慢性的な過負荷を伴う運動負荷に対して増加あるいは減弱という二極性の変化を示し, その変化から運動に対する適応と不適応を解釈しうる指標となる可能性が推察されている (Anderson and Wideman, 2017)。また, 単発の運動負荷に対する CAR の変化には, 運動強度の閾値が存在する可能性があることも推察されている。しかしながら, これらの知見はすべてフィールド研究によって検証されたものであるため, CAR に影響を及ぼしうる多数の交絡因子が制御されておらず, かつ対象者が実際に完了した作業量が示されていない。すなわち, 先行研究において示されている運動負荷が実際に CAR に影響を及ぼしたかは明らかではないことが課題であった。したがって, 本研究では, まずは先行研究を踏まえて推察された (1) CAR が変化する運動強度の閾値と, 先行研究において知見が不足している (2) レジスタンス運動が CAR に及ぼす影響に着目し, これらの影響を条件統制下の実験から明らかにすることを目的とした。この目的を達成するために 2 つの研究課題を設定した。以下に各研究の概要と主要な結果を示す。

研究 1 では, CAR が変化する運動強度の閾値の条件を明らかにするために, 異なる強度の運動の実施が翌日の CAR に及ぼす影響について検討した。対象者は健康な男子大学生 14 名とし, (1) 座位安静セッション (Control) と 3 つの運動セッション (最大酸素摂取量 [以下「VO₂max」と略す] の (2) 40% [Low-intensity], (3) 60% [Moderate-intensity], (4) 80% [High-intensity] の強度) からなる 4 つの実験プログラムを各日程でランダムな順序で実施した。唾液サンプルは, 実験前と実験直後, 10 分後, 20 分後, 30 分後, 実験日の 21 時と 23 時, 実験翌日の起床直後, 15 分後, 30 分後の 10 時点で採取した。その結果, 実験当日のコルチゾール濃度は High-intensity 条件のみで上昇し, 実験日の夜の時点で回復した。実験翌日の起床時では Control 条件と比較して High-intensity 条件において CAR が高値を示した (図 1)。一方で, 他 2 つの条件は Control 条件との間に有意な差がみられなかった。このことから, CAR は 80%VO₂max の運動負荷によって増加することが示され, CAR が変化する運動強度の閾値の条件が条件統制下の実験において初めて実証された。

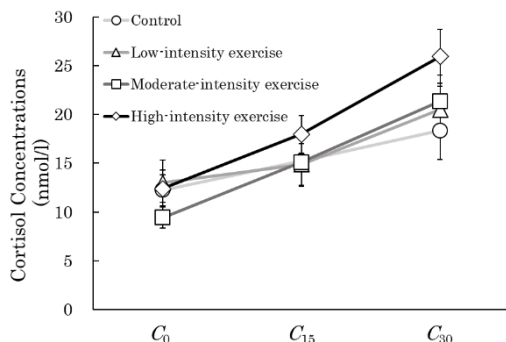


図 1 実験セッション翌日の起床時コルチゾール反応 (Mean $\pm$ SE, $n = 14$)

研究 2 では, レジスタンス運動に対する CAR の応答を明らかにするために, 多くのレジスタンス運動のプログラムで一般的に用いられている種目と負荷設定であるベンチプレス運動と最大挙上重量 (以下「1RM」と略す) の 75%の強度に着目し, 翌日以降の CAR に及ぼす影響について検討した。対象者は健康な男子大学生 12 名とし, 2 日間の座位安静セッション (Control) と 75%1RM のベンチプレス運動を疲労困憊まで実施するレジスタンス運動セッション, Recovery セッションからなる連日 4 日間の実験プログラムを行った。各日程における対象者の唾液サンプルは研究 1 と同様の時点で採取したが, Recovery セッションは起床時のみ唾液採取を行った。その結果, レジスタンス運動セッションによって実験当日のコルチゾール濃度の変化は生じなかったが, 翌日から翌々日にかけて CAR が増加 ($n = 6$: Responders) と変化なし・減弱 ($n = 6$: non-Responders) の 2 つの反応に分かれた (図 2)。また, CAR の曲線下面積のピーク増加率と身体疲労および筋肉痛のピーク増加量との間に有意な負の相関がみられた (図 3)。このことから, 75%1RM での疲労困憊に至るレジスタンス運動実施後, CAR は Responders と non-Responders の反応に分かれ, それぞれ過負荷を伴う運動負荷に対する CAR の二極性の変化を反映している可能性のあることが明らかになった。

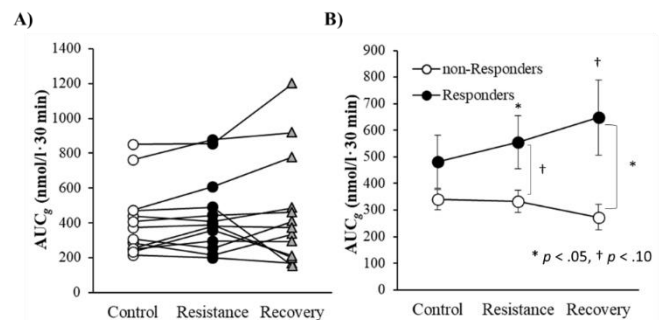


図 2 CAR の曲線下面積の増加率による群分けの結果 (Mean $\pm$ SE, Responders: $n = 6$; non-Responders: $n = 6$)

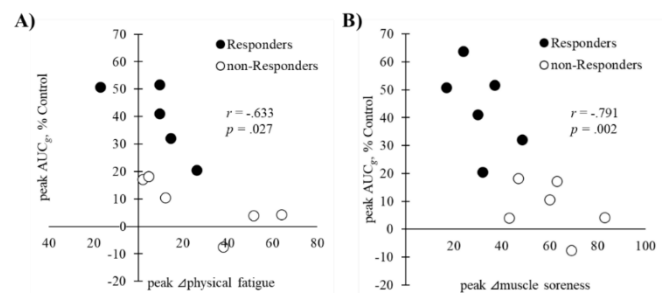


図 3 CAR の曲線下面積のピーク増加率と身体疲労・筋肉痛のピーク増加量の関係 ($n = 12$)

以上より, 本研究の結果から以下の結論が得られた。

1. CAR が変化する運動負荷の条件には運動強度の閾値が存在し, CAR は 80% VO₂max の運動負荷によって増加する。
2. 75%1RM の疲労困憊に至るベンチプレス運動によって, CAR は Responders と non-Responders に分かれる。

本研究により, CAR に影響を及ぼす運動負荷の条件の一端が明らかになったことで, 運動負荷に対する CAR の変化につ

学位論文紹介

いて基礎的知見が提供できたと考えられる。この知見は、今後 CAR を運動負荷に対する身体の適応過程のモニタリング指標として提案する際の有益な情報になる可能性があるとともに、他の領域において CAR を評価する際の理解の促進にも繋がる可能性がある。また、本研究を通して運動負荷に対する CAR の変化を捉えうる実験プロトコルが確立したことで、今後、運動負荷が CAR に及ぼす影響について、さらなる理解を追求する研究にも繋げられる可能性があると考えられる。

【著者略歴】

大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科修了。博士（スポーツ科学）。現在は、大阪公立大学国際基幹教育機構にて特任助教として勤務している。運動負荷が起床時コルチゾール反応（CAR）に及ぼす影響や、そのメカニズムに興味を持って研究を続けている。



運動部活動と徳性の強みの関係性に関する基礎的研究

霜島駿太（帝京大学）

学位：博士（体育スポーツ学）、授与機関：筑波大学

取得日：2024 年 3 月 25 日、指導教員：木内敦詞教授

背景および目的：スポーツに関わる指導者は、スポーツを通して人としての成長を促す指導を行うことが必要である。しかし、スポーツを通じた人の成長を客観的な指標を用いて検証した研究はこれまであまり進められてこなかった。そこで、スポーツを通じた人の成長を測るひとつの指標として徳性の強みを用いることができると考えた。なぜなら、徳性の強みとは、哲学書や経典を基に 6 つの美德と 24 個 Character Strength（以下 CS）に整理した概念であり、人間の普遍的な長所・強みを測定することができるからである。徳性の強みを測定する尺度には、日本版 VIA-IS（大竹ほか、2005）がある。徳性の強み向上には、スポーツへの参加（体験、経験）が関係していると考えられるが、その点について調査した研究は少なく、その関係性は不明である。そこで本研究では、運動部活動と徳性の強みの関係性を検討することを目的として、4 つの研究課題を設定した。本研究は、スポーツが人の成長に貢献することを示唆する基礎的な資料となり、昨今のスポーツの不幸事による不安を軽減させることが期待される。

研究課題：研究課題 1 では、体育スポーツ系の学部をもたない大学の学生 828 名を対象に、日本版 VIA-IS の妥当性を構成概念妥当性を検討した。その結果、適合度指標は、GFI=.829、AGFI=.806、CFI=.776、RMSEA=.054 となり、許容範囲内の適合度が示された。さらに、類似尺度との相関により併存的妥当性が確認された。RMSEA については、0.05 以下であれば当てはまりが良いと判断される（小塩、2018）が、本研究では RMSEA=.054 と近似値であったことから、適合度は許容範囲内であると判断した。尺度として許容範囲内の妥当性が確認された。

研究課題 2 では、研究課題 1 の調査対象者に国立 C 大学の運動部活動に現役で取り組む学生を加えた 1049 名（1～大学院生）を対象とした。そして、研究課題 1 にて信頼性と妥当性が確認された日本版 VIA-IS（48 項目）を用いて、徳性の強みと個人的属性（性別、学年、スポーツ経験年数）との関係を検討した。その結果、徳性の強みの性差について、男性より女性の方が「人間性」「超越性」の得点が高く、先行研究（大竹ほか、2005）を追認する結果であった。しかしながら、性差の確認された徳性の強みは 6 因子中 2 因子であり半数以下であること、それらの効果量が小さいことから全体として性差がないと判断した。次に、学年差については、現役で運動部活動に取り組む者 215 名（1 年生～4 年生）を対象に分析をした結果、すべての徳性の強みにおいて、学年による差はみられなかった。続いて、運動部活動経験年数による徳性の強みの得点差については、経験年数が上がるほど全ての徳性の強みが高いことが確認された。このことから、運動部活動を継続する中で徳性の強みが向上することが推察された。すなわち、徳性の強みには、運動部活動経験年数による差があることが示唆された。

研究課題 3 では日本版 VIA-IS を用いて、大学生 828 名の過去の運動部活動の継続性と徳性の強みの関係を検討した。その結果、クラスター分析により、CL1～CL4 に分類することができた。CL1 は全ての徳性が最も低い極低群、CL2 は全ての徳性が低い低群、CL3 は「節度」のみ低い中群、CL4 は全ての徳性が最も高い高群であった。続いて、中学のみ運動部に所

属した者は、CL2（低群）に多く、CL3（中群）に少ないことが示された。また、「勇気」「人間性」「明朗性」は男性よりも女性の得点が有意に高いこと、男女ともに複数の徳性の強みにおいて異種目継続型より同一種目継続型の方が有意に高かった。中高同一の種目へ継続的に取り組むことが、徳性の強みのいくつかの側面を高める可能性が示唆された。

研究課題 4 では、運動部活動の具体的な体験や経験と徳性の強みの関係に関東の国立 A 大学の野球部、蹴球部、陸上競技部に所属する 221 名（男性：195、女性：26 名）を対象に検討した。まず、改訂版スポーツドラマチック体験尺度（阿南ほか、2010）の下位因子と運動部活動経験評価尺度（島本ほか、2008）の下位因子との相関分析の結果から、多くの因子間においては低い関連であったことから、運動部活動の体験と経験は同一ではないと判断した。続いて、改訂版スポーツドラマチック体験尺度、運動部活動経験評価尺度と徳性の強みのパス解析の結果から、体験、経験による複数の徳性の強みへの正の影響が確認された。改訂版スポーツドラマチック体験尺度の下位因子である「激励体験」、「フロー体験」、「チーム内問題解決体験」が複数の徳性の強みを規定することが確認された。また、運動部活動経験評価尺度の下位因子である「自己開示」、「挑戦達成」、「努力忍耐」、「周囲からのサポート」が複数の徳性の強みを規定することが明らかになった。これらの結果から、運動部活動の体験と経験の具体的な内容が、複数の徳性の強みに影響することが推察された。

総括：本研究の結果から、運動部活動に内包される体験、経験は徳性の強みに影響していることが明らかになった。具体的に本研究の成果は次のように整理される。研究課題 1 では、日本版 VIA-IS の信頼性と妥当性を確認した。続く研究課題 2 では、徳性の強みには、運動部活動経験年数による差があることが示唆された。さらに研究課題 3 では、徳性の強みと運動部活動を継続して取り組むことの正の関係性が示唆された。最後に研究課題 4 において、運動部活動の体験、経験と徳性の強みの関連がみられた。運動部活動の体験については、他者から応援された、練習や試合に没頭した、チーム内の問題を解決した体験が複数の徳性の強みに影響していた。また、運動部活動の経験については、自己開示や挑戦達成、そして周囲からサポートされた経験が複数の徳性の強みに影響していたことが明らかになった。すなわち、本研究において運動部活動に内包される体験や経験が徳性の強みに関係することが示唆された。以上より、本研究はスポーツと人間形成の関係を探る研究進展に寄与する基礎的知見を提供するものといえる。

著者略歴：1994 年生まれ。群馬大学大学院教育学研究科修了、筑波大学大学院人間総合科学研究科修了、博士（体育スポーツ学）学位取得。現在の所属は、帝京大学沖永総合研究所。総合基礎科目「質問力を磨く」、「コミュニケーション力を磨く」を担当。研究テーマは、「スポーツは本当に人を育てるのか」をリサーチクエストとした徳性の強み（VIA-IS）研究。



高山 彩 (福岡大学)

学位：博士 (学術)、授与機関：広島大学

取得日 2024 年 3 月 8 日、指導教員：関矢寛史教授

【背景と目的】青年期後期である大学生は、アイデンティティの確立や親からの自立といった課題に直面するため、ストレスやメンタルヘルス不調を感じやすい (e.g., 厚生労働省, 2022). このようなストレスやメンタルヘルス不調を解消するためのセルフケアとして、自己の感情をコントロールする力が必要と考えられる。本研究では、感情のコントロール方法として、身体と心は密接に関わっていると身体化理論 (e.g., Barsalou, 2008) に含まれる、姿勢・動作が認知や感情などの心理状態に影響を及ぼすという体性フィードバック仮説 (Price & Harmon-Jones, 2015) に着目した。先行研究では、覚醒度と快適度を 2 軸にとらえ、高覚醒・快、高覚醒・不快、低覚醒・快、低覚醒・不快の 4 つのカテゴリに区切られるという感情の 2 次元説 (Russell, 1980) を基に、身体を大きく広げたハイパワーポーズと身体を小さく縮こまらせたローパワーポーズを相対的に比較した研究がなされており、前者は高覚醒・快感情を導き、後者は低覚醒・不快感情を導く (e.g., Nair et al., 2015). また、スキップ動作や背筋を伸ばした直立姿勢での歩行と背中を丸めた前傾姿勢での歩行を相対的に比較した研究では、前者は高覚醒・快感情を導き、後者は低覚醒・不快感情を導く (e.g., Hackford et al., 2019). 一方で、これらの先行研究では、高覚醒・不快、低覚醒・快感情を導く姿勢・動作は明らかになっていない。さらに、姿勢・動作間の相対的比較をしているため、各姿勢・動作が導く感情が覚醒度と快適度の 2 軸で表される座標上のどこに位置づけられるかは明らかになっていない。そのため、本研究では、姿勢・動作が感情、特に心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響について探索的に明らかにすることを目的とした。

【結果の概要】実験 1 では、座位姿勢に着目し、座位姿勢が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を二次元気分尺度 (TDMS; 坂入ほか, 2009) の覚醒度と快適度を用いて探索的に検討した。覚醒度と快適度の 2 軸の交点をニュートラル感情とし、そのニュートラル感情と姿勢保持後の覚醒度と快適度を比較した結果、「腰に手を当て、胸を張る姿勢」は高覚醒・快感情を導き、「手を頭に置き、肩を上げ、顔を下に向ける姿勢」は高覚醒・不快感情を導き、「瞑想姿勢」は低覚醒・快感情を導いた。ただし、座位姿勢のみの比較では、心理的効果が小さかった。

実験 2 では、実験 1 の結果から、立位姿勢によってより大きな心理的効果が得られると考え、座位姿勢だけでなく立位姿勢を加え、それらが心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を TDMS の覚醒度と快適度を用いて探索的に検討した。ニュートラル感情と比較した結果、実験 1 と同様に「瞑想姿勢」は低覚醒・快感情を導いた。ただし、座位姿勢と立位姿勢の心理的効果は小さく、さらにそれらの心理的効果に違いはみられなかった。

実験 3 では、実験 2 の結果から、動作によってより大きな心理的効果が得られると考え、姿勢のみでなく動作を加え、それらが心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を TDMS の覚醒度と快適度を用いて探索的に検討した。さらに、自由回答によって姿勢・動作中の感情を調査することで、これまでの実験で使っていた TDMS の質問項目に含まれている感情以外にどの

ような感情が生起しているのか質的に調査した。ニュートラル感情と比較した結果、「スキップ動作」は高覚醒・快感情を導き、「瞑想姿勢」と「仰臥位姿勢」は低覚醒・快感情を導いた。一方で、高覚醒・不快や低覚醒・不快感情を導く姿勢・動作は同定されなかった。ただし、質的調査である自由回答による感情の抽出では、TDMS の質問項目にはない「緊張」、「焦る」、「暗い」などの不快感情を感じた実験参加者がいる姿勢・動作があり、それらが TDMS では測定できない感情を導く姿勢・動作である可能性が示唆された。

実験 4 では、実験 3 の結果から実験参加者に覚醒度と快適度を 2 次元上で直接回答させる Affect Grid (Russell et al., 1989) を使用し、姿勢・動作が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を探索的に検討した。さらに、実験 3 と同様に量的調査だけでなく、姿勢・動作中にどのような種類の感情が生起していたのかを質的に調査した。ニュートラル感情と比較した結果、「スキップ動作」は高覚醒・快感情を導き、「瞑想姿勢」は低覚醒・快感情を導いた。また、ニュートラルな覚醒度で不快な姿勢が同定され、量的にも不快感情を導く姿勢が示された。さらに質的調査の結果として、高覚醒・快感情を導く動作では、「楽しい」という快感情を生起させた実験参加者がおり、低覚醒・快感情を導く姿勢では、「楽」、「落ち着く」などの快感情を生起させた実験参加者がいた。

【まとめと今後の課題・展望】本研究では、姿勢・動作を変化させることで心を変化させるという感情のコントロール方法に着目した。その結果、一貫して、「スキップ動作」を行うことで高覚醒・快感情を導き (実験 3, 4), 「瞑想姿勢」をとることで低覚醒・快感情を導いた (実験 1-4). 姿勢や動作を 1 分間実施することで異なる快感情を導くという本研究の結果は、自己の身体をコントロールすることで感情の改善を可能とすることを示した。本研究の限界点として、すべての実験で姿勢・動作実施間に 2 分間の直立座位姿勢を保持させたことが、覚醒度と快適度の評価に影響を及ぼした可能性が挙げられる。また、参加者の普段の姿勢や歩行速度が異なり、それが結果に影響を与えた可能性もある。さらに、実験者効果や研究対象が日本人大学生に限定されている点も、結果の一般化に影響を与える可能性がある。また、ストレスやメンタルヘルスについて測定をしていないため、それらへの影響は推測の域を出ない。そのため、今後の研究では、実験参加者の普段の姿勢や歩行速度を考慮し、実験者効果を排除する二重盲検試験を採用し、多様な背景を持つ実験参加者を対象とすることが必要である。また、感情だけでなくストレスやメンタルヘルスへの影響も併せて調査する必要がある。

著者略歴：熊本大学教育学部卒業。広島大学大学院総合科学研究科博士課程前期修了。2023 年 9 月に同大学院博士課程後期を単位取得満期退学。2024 年 3 月 8 日に同大学院にて博士 (学術) を取得。熊本県立大学環境共生学部 (研究室助手) を経て、現在の所属は福岡大学スポーツ科学部 (助教)。



体育授業における回避的態度と学習成果との関係

當山貴弘（久留米大学）

学位：博士（教育学）、授与機関：九州大学

取得日 2024 年 3 月 25 日、指導教員：杉山佳生教授

【研究の背景と目的】

体育授業における回避的態度は、運動技能の低さを理由とした回避的態度（例：「運動がうまくないので、言われたことができなくても仕方がない」と心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度（例：「仲間から笑われるので、自分から練習しようとしなない」）が存在する。体育授業において運動課題を回避し続けることで、能力の獲得に不確実性が生じ、適切な課題設定ができないことで、成功体験が減少する恐れがある。また、体育授業の教育目標を達成するために、優れたカリキュラムや指導法を用いても、学習者が取り組もうとしなければ十分な学習成果は得られない。

ところで、体育授業において育むべき資質・能力として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」がある（文部科学省,2018）。特に、「学びに向かう力・人間性等」は、体育科において重要視されており、他教科とは異なった期待がかかっている（神奈川県立体育センター,2018）。當山ほか（2021）は、この「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果として学習方略を取り上げ、体育授業における回避的態度との関係を検討した。その結果、体育授業における回避的態度が「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を低下させる可能性があることを示唆した。しかしながら、この研究は、回避的態度を独立変数、学習成果を従属変数に附置したモデルの検討であり、「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を獲得するプロセスに回避的態度がどのように関わるのかについては検証されていない。また、回避的態度と「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果との因果関係についても、明らかにされていない。

以上のことから、本論文では、「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果として体育適応感と運動有能感を取り上げ、体育授業における回避的態度が学習成果獲得プロセスとどのように関わっているのかを明らかにした。第 1 章では、体育授業の好意度、回避的態度、体育適応感との関係について検討した。第 2 章では、3 時点の交差遅れ効果モデルに基づいて、体育授業における回避的態度と運動有能感の相互影響関係について検討した。

【結果の概要】

1) 体育授業に対する好意度は、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を低下させ、回避的態度の低下は、体育授業内の仲間との対人関係に対する適応感と体育授業の学習内容や教師との関わりに対する適応感の向上と結びついていることが確認された。

2) 小学校高学年男子では、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、努力すればできるという有能感に負の影響を及ぼすことが確認された。また、小学校高学年女子では、運動技能の低さおよび心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、仲間から受け入れられている有能感を低下させ、その有能感が低下することで回避的態度が増長する負の循環的な影響関係が認められた。加えて、小学校高学年の男女ともに、運動技能の低さを理由とした回避的態度が、努力すればできるという有能感を低下させることが、また、運動能力に対する有能感、運動技能の低さおよび心理・社会・身体的要因を

理由とした回避的態度を低下させることが示された。一方、中学 1 年生男子は、運動技能の低さおよび心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度が、全ての種類の運動有能感（身体的有能さの認知、統制感、受容感）を低下させ、その運動有能感が低下することで、回避的態度が増長するという負の循環的な影響関係が示された。また、中学 1 年生女子では、運動技能の低さを理由とした回避的態度が、運動能力に対する有能感および仲間から受け入れられている有能感を低下させ、それらの有能感が低下することで運動技能の低さを理由とした回避的態度を増長するという負の循環的な影響関係が確認された。中学 1 年生女子ではさらに、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度は、仲間から受け入れられている有能感を低下させることが、また、運動能力に対する有能感と努力すればできるという有能感は、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を低下させることが示された。

【まとめ】

第 1 章では、体育授業に対する好意度、回避的態度、体育適応感の関係について検討を行った。その結果、体育授業内の仲間との対人関係に対する適応感と体育授業の学習内容や教師との関わりに対する適応感の両方の低下を防ぐためには、特に心理・社会・身体的要因を理由に回避的態度を示す学習者への配慮が必要であることが示唆された。

次に、第 2 章の結果を用いて小学校高学年及び中学 1 年生の心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を抑制する心理的要因について述べる。小学校高学年では、運動能力に対する有能感が心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を抑制することが確認された。また中学 1 年生男子では、初期段階で運動有能感（身体的有能さの認知、統制感、受容感）を高めることで、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を抑制することが示された。最後に、中学 1 年生女子では、努力すればできるという有能感を高めることで、心理・社会・身体的要因を理由とした回避的態度を抑制することが示唆された。

【今後の課題】

1) 「学びに向かう力・人間性等」にかかる学習成果を獲得するためには、体育授業における回避的態度を抑制する必要があることが示唆された。しかし、実際の学校現場において、多項目からなる質問紙を用いた調査等を通じて回避的態度を抱く者を捉えることは必ずしも容易ではない。そのため学習者の行動的な特徴から回避的態度を抱く者を把握する方法について検討することが必要と考えられる。

2) 本研究では、体育授業における回避的態度や体育適応感、運動有能感という個人内の要因に着目したが、学習内容や指導方略を加えた検討を進めることで、体育授業における回避的態度が体育適応感や運動有能感に及ぼす負の影響を緩和させるような学習環境づくりを提案できると考えられる。

著者略歴：2023 年より、久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科で助教として着任。現在に至る。久留米大学では保健体育科教育法、スポーツ指導論、体育実技などを担当。現在の研究の興味は、体育授業における回避的態度と学習行動。

Temporal and Spatial Structure of Collective Pass-Chaining Action Performed
by Japanese Top-Level Field Hockey Players

三澤孝康（山梨学院大学カレッジスポーツセンター）

学位：博士（生命医学）、授与機関：山梨大学

取得日 2024 年 3 月 22 日、指導教員：木島章文教授

<目的>

ホッケーやサッカーの試合において得点場面は稀であり、攻守の膠着状態が多く時間を占めている。この膠着状態はチーム内でのパスの連鎖とその断絶を繰り返している状態と理解できるが、その時間的・空間的構造はこれまで明らかにされていない。本研究は 3 対 3 スモールサイド（小規模）ゲームにおいて守備者がパスコースに対してかける圧分布を計算することで、パス連鎖の時間的・空間的構造を数理的に検討したものである。

<方法>

実験参加者は山梨学院大学ホッケー部に属する選手 24 名とした。全日本代表チームに所属した経験がある Expert (Ex) 群 12 名とその経験がない Intermediate (Im) 群 12 名とに分割した。そして双方の群に同じ競技レベルの他チームと 3 対 3 のスモールサイドゲームを行わせた。そして、撮影した映像からボールおよび選手の 2 次元座標位置を算出した。1 試合あたりのインプレー時間、テクニカルアクションの出現頻度を算出し、群間のゲームの質的相違を確認した。また選手 1 名あたりのボール保持時間を算出すると共に、Kijima et al (2014; Eur. Phys. J.) の方法を用いて 3 名の守備者がパスの軌道にかかる圧を算出した。選手 1 名あたりのボール保持時間について、2 要因分散分析を用いて群間の統計的有意差を確認した。加えて攻撃者が放った全てのパスそれぞれの軌道に 3 名の守備者がかけた圧を求め、圧がかかった時点と地点について群間の差を確認した。次に、成功パスと失敗パスの軌道それぞれにかかる守備者の圧力を別個にプールし、成功パスと失敗パスそれぞれについて圧がかかった時点と地点に関する群間の差を比較検討した。

<結果>

成功パスの本数と失敗パスの本数、およびシュート本数について群間に有意差が見られた。成功パスの本数とシュート本数は Ex 群が有意に多く、失敗パスの本数については Im 群が有意に多かった。選手 1 人あたりのボールキープ時間に関しては両群ともに全てのタッチの約半数が 2 秒以下で完了した。Im 群では 1 秒以上 2 秒未満の時間をかけてボールを操作した頻度が有意に高かったが、Ex 群では 1 秒未満でボール操作を完了させた頻度も同程度に高かった。これらの結果は、Ex 群の選手が Im 群の選手と比較して 1 秒未満という著しく短い時間でボールをリリースすることが多いことを示している。守備者が攻撃者のパスにかけた圧を分析した結果、両群ともにパスがレシーブする前に比べてパスを出す直後にかかる圧が高かった。またレシーブ前の時点はパスとレシーバー間の中間付近に高い守備圧がかかり、パスの直後にはパスに付近に高い守備圧がかかっていた。次に成功パスと失敗パスとを分けて分析した結果、失敗パスについてのみ圧のかかり方に群間の差が認められた。レシーブ前の時点でパス軌道にかかっている守備圧は、Im 群に比べて Ex 群の方が高い傾向があった。一方で Im 群ではレシーブ前の時点ではなく、パスが放たれた直後にパス軌道全体に高い守備圧がかかっていた。選手 1 人あたりのボールキープ時間を成功パスと失敗パ

スそれぞれについて比較した結果から、こうした群間の差は Im 群におけるボールキープ時間の延長によるものと考えた。

<考察>

両群ともにパスがボールを受け取る前から、守備者はパス軌道の中間地点付近に圧をかけられる位置を取り、パスにボールが渡る時点でパスに近づき、パスが放たれる瞬間にパス自身に強い圧をかけている。この攻守の関係性が連鎖することでパスを繋げている。この仕組みは両群に共通していたが、パス連鎖が途切れるメカニズムは群間で異なっていた。Ex 群の守備者は、パスがレシーブする前から継続的にパス軌道に対して高い圧をかけており、さらにパスがボールをレシーブする時点で激しくパスに接近することによってパスを断ち切っていた。対して Im 群では、パスを出す時点のみに守備者がパス自身に高い圧をかけてパスを断ち切っていた。パス連鎖が途切れる場面における両群のボールキープ時間は、Ex 群が平均で 1.02 秒で Im 群が 1.35 秒であった。こうした Im 群の遅延から、今後彼らが全日本選抜水準のゲームでパスをつなげるには、ボールキープ時間を 1 秒未満に抑える必要があることがわかった。現にパスが通った場合のボールキープ時間は Ex 群が 0.81 秒、Im 群が 0.99 秒であった。したがって、全国トップレベルの競技においては「1 秒以内での」ボールコントロールがパス連鎖の動的秩序を安定させる条件である。こうした方針で Im 群のパス連鎖能力を鍛えるには、ピッチを狭く制限しつつ、コーチ自身がピッチに入り、レシーブからパスまでの一連の動作を 1 秒以内に遂行させるように絶えずパスコースに圧を与え続けることが必要となる。

<結論>

パスを受けてから放つまでの動作を 1 秒未満で遂行することにより、ボールを出す時点で自身にかかる集中的な守備圧をパスが回避でき、継続的なパス連鎖を創発できる。こうした攻守の膠着を動的に安定させられることが国際水準のプレーヤーに要求されることが明らかになった。

詳細は以下を参照されたい。

Mizawa, T., Okumura, M., & Kijima, A. (2022). Temporal and Spatial Structure of Collective Pass-Chaining Action Performed by Japanese Top-Level Field Hockey Players. *Frontiers in Sports and Active Living*, 4, 867743.

著者略歴: 山梨学院大学カレッジスポーツセンター 専任講師。山梨学院大学卒。山梨学院大学在籍中の 2005 年から 2012 年までの 8 年間、男子ホッケー日本代表選手として活動。競技引退後、山梨大学大学院に進学し、自身の経験と研究的視点を融合させたコーチングを追求している。現在は山梨学院大学男子ホッケー部監督を務める。また、2024 年 4 月から男子ホッケー日本代表チームマネージャーに就任し、2028 年ロサンゼルス五輪出場に向けた強化を担っている。



競技スポーツにおける心理社会的スキルの般化の特徴と要因

藪中佑樹（京都先端科学大学健康医療学部）

学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：大阪体育大学

取得日 2023 年 9 月 15 日、指導教員：土屋裕睦教授

1. 背景と目的

競技スポーツを通じて、日常生活における課題や困難を乗り越えることを促すライフスキルを効果的に獲得できると考えられている。そのプロセスについて、競技スポーツ場面に於いて活用されている心理社会的スキルがスポーツ以外での生活場面に般化することでライフスキルになると考えられている（Holt et al.,2017；Pierce et al.,2017；渋谷ほか,2018）。そのため、競技スポーツに取り組む大学生アスリートは、心理社会的スキルを般化させることでライフスキルを効果的に獲得できていると考えられる。その一方で、ライフスキルと関連が見られる学業や進路の選択などに様々な課題を抱えていることが指摘されている（e.g.小野ほか,2017）。従って、大学生アスリートを対象とした心理社会的スキルに般化に関する知見に基づいたライフスキル獲得のための教育支援が必要であると考えられる。しかし、それらの知見は主に質的アプローチにより検討されたものが多く、定量的アプローチによりそれらの知見を補完していく必要があることが指摘されている（Mossman et al.,2021）。

そこで、本研究の目的は、競技スポーツを通じたライフスキル獲得プロセスにおける心理社会的スキルの般化に着目し、大学生アスリートを対象としたライフスキル獲得のための教育支援に有益な情報となる基礎的な知見を定量的アプローチにより得ることであった。本研究の目的を達成するために、以下の研究課題を設定した。はじめに、心理社会的スキルが般化すると考えられる競技スポーツ以外の具体的な場面や環境を定義し、それらに基づきながら心理社会的スキルが般化している程度を評価する尺度を作成する（研究課題 1）。そして、その尺度の信頼性、妥当性を検討し（研究課題 2）、大学生アスリートの心理社会的スキルの般化の特徴について、先行研究から関連があるとされる個人属性や、般化への気づきの程度との関係を検討する（研究課題 3）。具体的には、性別や競技種目、学年による差や、競技スポーツ場面で取り組む課題と競技スポーツ以外の場面で取り組む課題間の類似性や心理社会的スキルが競技スポーツ以外の場面に般化の可能性への気づきを取りあげる。最後に、心理社会的スキルの般化の要因を明らかにするために、Life Development Intervention/ Basic Needs Theory model（Hodge et al., 2013）や自己決定理論（Ryan and Deci, 2017）に基づいて、指導者からの欲求支援・阻害行動と基本的心理欲求の充足、不満が心理社会的スキルの般化に及ぼす影響について検討する（研究課題 4）。

2. 結果の概要

まず、心理社会的スキルが般化する場面や環境に、学修、進路選択、人間関係、生活の 4 つを定義した。そして、心理社会的スキルがそれらに般化している程度を評価できる項目を作成するために、先に定義づけた 4 つの場面や環境を想定して、アスリートに求められるライフスキルの枠組み（島本ほか, 2013）に基づき項目を作成した。作成した項目を使用し、大学生アスリート 262 名（男子：162 名、女子：100 名）を対象に調査し、アスリートに求められるライフスキルの 10 側面ごとに 4 項目ずつ、合計 40 項目を選定した。

大学生アスリート 391 名（男子：234 名、女子：154 名、そ

の他：3 名）を対象に、選定した 40 項目を使用し調査を行った。

その結果、アスリートに求められるライフスキルと対応する構造である 10 因子 30 項目で構成され、一定水準の信頼性と妥当性が確認された尺度が作成された。そして、本尺度を、大学生アスリート用競技スポーツにおける心理社会的スキルの般化尺度と命名した。競技スポーツを通じたライフスキル獲得プロセスにおける心理社会的スキルの般化について、定量的アプローチによる実証研究が可能になった（研究課題 1, 2）。心理社会的スキルの般化の特徴について、性別による違いでは、男性が女性よりも「目標設定」の得点が高く、女性が男性よりも「感謝する心」と「礼儀・マナー」の得点が高い傾向であった。学年による違いでは、1, 2 年生は 3 年生よりも「ストレスマネジメント」の得点が高い傾向であった。種目による違いでは、本尺度の全ての下位因子において関連が認められなかった。本尺度の全ての下位尺度において、課題間の類似性と般化の可能性への気づきの程度との間に関連が見られた。

すなわち、心理社会的スキルの般化の特徴は、大学生アスリート用競技スポーツにおける心理社会的スキルの般化尺度の一部の側面において性別、学年に関連し、全ての側面において課題間の類似性と般化の可能性への気づきに関連することが明らかとなった。一方で、競技種目は心理社会的スキルの般化と関連しないことが明らかとなった（研究課題 3）。

大学生アスリート 228 名（男子：163 名、女子：65 名）を対象に調査を行った。その結果、「欲求支援行動」が「基本的心理欲求の充足」、「基本的心理欲求の充足」が心理社会的スキルの般化の 10 側面全てに正の影響を及ぼしていた。そして、「欲求阻害行動」が「基本的心理欲求の不満」に正の影響を及ぼし、「基本的心理欲求の不満」が心理社会的スキルの般化の「ストレスマネジメント」、「感謝する心」、「コミュニケーション」、「礼儀・マナー」に負の影響を及ぼしていた。すなわち、心理社会的スキルの般化の要因について、全ての側面に於いて競技スポーツにおける基本的心理欲求の充足が促進し、一部の円滑な人間関係を築くことに関連するスキルの般化に関して競技スポーツにおける基本的心理欲求の不満が阻害することが示唆された。また、競技スポーツにおける基本的心理欲求の充足には指導者からの欲求支援行動、競技スポーツにおける基本的心理欲求の不満には指導者からの欲求阻害行動がそれぞれ要因となることが示唆された（研究課題 4）。

3. まとめ

以上の結果から、大学生アスリートを対象に、心理社会的スキルの般化の特徴や要因について定量的アプローチにより明らかにすることが出来た。これらは、競技スポーツを通じたライフスキル獲得プロセスの一端を実証することが出来たと考えられる。そして、これらの知見は、大学生アスリートと日常的に関わる機会のある指導者や、SMT 指導士をはじめとする大学生アスリートの心理支援に関わる人などに対して、大学生アスリートを対象としたライフスキル獲得のための教育支援を行う上での有益な情報を示唆しているだろう。

著者略歴：p.34 の右段を参照

VI. 海外情報

岩崎 晋 (Fort Lewis College)
 荒木香織 (順天堂大学・(株)CORAZON)

2015年よりテニユアトラックの Assistant Professor としてアメリカ、コロラド州デュランゴ市にある Fort Lewis College の Health and Human Performance 学部就任し、その後テニユア審査をクリアし 2022 年より Associate Professor として教鞭をとっている。

Fort Lewis College は、リベラルアーツ教育を担う、学生数約 3,400 名の州立大学である。大学の主な特徴として、まずは人種の多様性が挙げられる。例えば、研究系の大規模大学などでは、有色人種学生の割合は 2 から 3 割であるが、本学では全学生数の半数以上が有色人種であり、特にアメリカ原住民が大多数を占める。また学部においては 55、大学院においては 5 つの専攻が存在するなか、終身雇用教授の 99% が博士課程を修了、そして、一教科の受講者数は 20 名以下とクラス運営が手厚い。さらに学部生の研究の支援体制も充実し、学部間の共同研究や地域との連携も盛んである。加えて学会参加や研究費の補助を積極的に推進している。

学部内には Sport Administration, Exercise & Health Promotion, Exercise Physiology, Exercise Science K-12, Nutrition の 5 専攻がある。卒論のテーマは学生それぞれである。もちろん将来の仕事や進路先を見据え、各専攻の内容に精通した内容をテーマにする学生もいるが、これらの 5 つの専門分野をまたいだもの、または学部を越えた共同研究なども散見される。例えば、バイオメカニクスと心理学それぞれの教授が MTB 操縦の心理・運動学的研究の共同指導をすることもある。

教員活動は教育・研究・サービスの三本柱である。私は、教育と研究の二つの分野のつながりは切っても切れない関係であると考えている。もちろん授業で教科書等を全く使用しないわけではないが、教育教材の中に自らの研究結果を織り交ぜた授業展開は自分の教育理念が願うところである。実験や調査研究の結果は必ずしも理論や仮説を支えるものに限らないかもしれないが、少なくとも理論と現実の議論の切り口を提供する内容であるべきと考える。

教育活動については秋・春学期において、合計 8 科目 24 単位を担当する契約である。ただし本大学では、研究のための時間を確保するために、終身雇用教員は秋もしくは春学期に 1 科目 3 単位の教育活動を免除される。私の担当科目は Sport & Exercise Psychology, Motor Learning & Control と Research Design and Method である。秋学期と春学期共にこの 3 科目を担当している。さらに春学期は Sport & Exercise Psychology を追加で担当する。

Health and Human Performance 学部の学生が履修する授業のうち Research Design and Methods は特徴的である。学内のほとんどの学科がこの授業に科目提供し、全学生が学期末に学内発表を行って完結する。私自身もこの学内発表の企画運営を分担している。学内発表は、Undergraduate Research Committee で企画運営され、ほぼ全学部学科の学生が口頭・ポスター発表で自身の研究を披露する。一日が

かりの学内学会は、学長あいさつと投票による優秀賞などの授与式にて閉幕し、懇親会にて終了となる。このように全学部学科の学生が参加し、努力の結晶を学内全体に披露する機会を設けることは指導教授らにも刺激的かつ有意義な機会と感じられる。

現在、サバティカル制度を活用して 2023 年 7 月下旬から一年間の予定で大阪大学大学院スポーツ医学研究科に在籍している。主な目的は教育関連の職務から離れ、研究活動のみに時間を使って成果を上げることである。Fort Lewis College では、着任後 6 年が過ぎたのち終身雇用が認められ、7 年目にサバティカルを申請できる。申請においては、研究計画及び本大学にもたらす利益を申請書に記述する。サバティカル期間として一学期間か二学期間（一年間）を選択できる。承認されれば翌年にその機会を得ることができる。研究拠点を問われないため、私は母国である日本での活動を希望した。学部内の委員会と学部長の審査、大学全体の委員会及び Dean の審査、そして、評議委員会の審査をクリアし、学長の承認を得ることができた。

大阪大学を拠点に、ウェアラブルデバイスを用いた身体活動促進プロジェクトやスポーツ傷害予防と心理・認知的要因の検討プロジェクトなどに携わり、加えて研究と実践の情報共有を目的として他機関との共同研究もすすめている。特に、動機づけ理論、ユーススポーツにおける動機づけ、及びウェアラブルデバイスを用いて心理的要因と運動行動変容の関係性を解明する研究に取り組んでいる。

2024 年 8 月まで日本に滞在し、この原稿を執筆した時点で 4 か月の滞在を残すのみとなった。滞在中には、日本人でありながら、日本と米国との教育体制の違いに頻繁に気づかされた。日本における研究と応用実践の現状と今後の発展を考え、現場で活躍する選手やコーチ、支援スタッフ、研究者を交えた対話の大切さを改めて感じた。今回をきっかけに、今後は日本のスポーツ心理学の仲間と協力して領域の発展に貢献していきたいと考えている。

著者略歴：

岩崎 晋：Associate Professor, Department of Health and Human Performance, Fort Lewis College, Durango Colorado, USA
 荒木香織：順天堂大学スポーツ健康科学部客員教授、(株)CORAZON チーフコンサルタント



VII. 事務局報告

2023 (R5) 年度 体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：木島章文（事務局庶務担当理事）

日時：2023(R5)年8月18日(金) 11:00AM~12:30PM

場所：WEB 会議システムによるオンライン開催

出席者（敬称略）：杉山佳生（会長）、兄井 彰（理事長）、樋口貴広、國部雅大、田中美吏、笹場育子、坂入洋右、村山孝之、木島章文、中本浩揮（以上、理事）、横山慶子（以上、監事）、中須賀巧（以上、幹事）

欠席者（敬称略：委任状あり）：荒井弘和、荒木香織（以上、理事）

欠席者（敬称略：委任状なし）：内田若希（理事）、森 司朗（監事）、山崎史恵、上野耕平（以上、2022 年度応用（領域横断）研究部会員オブザーバー）、沖 和砂、筒井香（以上、2023 年度応用（領域横断）研究部会員オブザーバー）

【報告事項】

1. 前回理事会（2023(R5)年度第1回理事会）議事録確認（事務局）
兄井理事長より資料1が提示され、承認された。
2. 会員の異動、会費納入状況（事務局）
兄井理事長より、2023年5月時点で名誉会員21名、正会員552名が在籍し、2023年7月17日時点で432名から2,000円ずつ864,000円の会費が納入されていることが報告された。
3. 2023・2024年度政策検討・諮問委員、若手研究者委員、応用研究部会委員の推薦について（事務局）（資料2）
兄井理事長より資料2が提示され、政策検討・諮問委員に星野聡子氏（奈良女子大学）、若手研究者委員に雨宮怜氏（筑波大学）、応用（領域横断）研究部会員については資料2に記載の会員を推薦したことが報告された。
4. 会報35号（通巻63巻）の発行（広報委員会、事務局）
木島庶務担当理事より、2023年7月31日に領域HPに掲載されたことが報告され、理事会後にメール経由で全会員に周知する予定であることが示された。
5. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回について（学会大会委員会、事務局）（資料3）
兄井理事長より第73回大会が以下の要領で開催されるとの報告があり、プログラム素案が示された。
 - 日時：2023年8月30日(水)、31日(木)、9月1日(金)
 - 場所：同志社大学今出川校地良心館・寒梅館
 - 演題：口頭発表13題、ポスター発表73題、キーノートレクチャー2題
6. 日本体育・スポーツ・健康学会第74回について（事務局、学会大会委員会）（資料4）
兄井理事長より資料4が提示され、第74回大会が以下の要領で開催されるとの報告があった。
 - 日時：2024年8月29、30、31日
 - 場所：福岡大学
7. その他
樋口大会委員長より9月1日当日欠席の報告があり、当日の運営・管理業務を田中美吏委員が代行する旨の報告があった。加えて国際会議との演題乗り入れにかかる要請があった。

【審議事項】

1. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回のキーノートレクチャー、司会、座長への謝金について（資料5）
兄井理事長より資料5が提示され、杉山会長より示された以下の訂正要求が承認された。
訂正）キーノートレクチャー司会への謝金0円を5000円に訂正
2. 2023(R5)年度補正予算案（資料6）
中本会計担当理事より資料6が提示され、承認された。
3. 2024(R5)年度事業計画案（資料7）
兄井理事長より資料7が提示された。杉山会長・國部理事より以下の修正が提案された。
 - 表題：「R5をR6」に
 - 第1項：「第73回大会」を「第74回大会」に
 - 第4項：「4頃、8頃」を「4月頃、8月頃」に
 - 第5項：「9月頃」を「8月」に
 - 第6項として役員選挙を挿入し、以降を第7、8、9項と後ろ倒しに以上の全ての案が承認された。
4. 2024(R6)年度予算案（資料8）
中本会計担当理事より資料6が提示され、承認された。
5. 2023(R5)年度総会議事次第（資料9）
兄井理事長より資料9が提示された。杉山会長より以下の修正が提案された。
 - 第IV項1. (1)：「2023年3月31日」を「2025年3月31日」に
 - 第IV項2. のあとに第3項として名誉会員推薦（阿江美恵子氏）の報告を挿入

- 第Ⅳ項 3. : 本項を第Ⅳ項 4 とし、任期を「2021-2022 年度」から「2023-2024」に修正。「竹之内隆志名」を「竹之内隆志」に修正。
 - 第Ⅳ項 4. : 本項を第Ⅳ項 5 とし、応用（領域横断）研究部会員の「荒井弘和」を「筒井香」に
 - 第Ⅴ項 1. : 「令和 2 年度」を「令和 4 年」に
 - 第Ⅴ項 3. : 「2023 年度事業計画案」を「2024 年度事業計画案」に
 - 第Ⅴ項 3.(1) : 「第 72 回大会」を「第 74 回大会」に
 - 第Ⅴ項 3.(3) : 「会報第 35 号」を「会報第 36 号」に
 - 第Ⅴ項 3.(5) : 「9 月頃」を「8 月」に
 - 第Ⅴ項 3.(6)として「役員選挙」の項目を挿入し、以降 (7)、(8)、(9)へと後ろ倒し
- 以上の全ての案が承認された。

6. 会報 36 号（通巻 64 巻）の作成準備について（資料 10）

兄井理事長より資料 10 が提示された。杉山会長と坂入理事から以下の修正案が提示された。

- a. 研究会活動報告について：公募日程の「2023/8/18 から」を「2023/5/18 から」に
- b. 学位論文報告について：「公募日程」と「備考」の項を削除し、「原稿締切」の項を「原稿受付期間」と修正した上で「2024/03/31」を「2024/04/01 から 2024/04/10」に

以上の全ての案が承認された。次いで木島庶務担当理事より、36 号会報の取りまとめについて以下の提案がなされた。

- 1) 執筆者の選定方法と原稿締切日時について、事務局裁量となる記事については、プログラムが公開された時点から事務局裁量で執筆者に検討をつけ、大会前には原稿の依頼を完了する。
 - 2) 原稿締切日について、大会関連記事ならびに他の事務局裁量で取り扱われる記事については 10/31 とする。
 - 3) 大会参加記の執筆者選定について、第 2 回理事会前の 8 月初旬を目処に公募を締め切り、理事会の審議を経て決定された執筆者（助成対象）に対して、大会前までに原稿執筆の依頼を完了する。
- 1)案と 2) 案について承認が得られた。3) 案について杉山会長から「大会後の追加募集を考慮して事務局で案を検討し、2025 年度第 1 回理事会で提案すべき」との意見があり、これが承認された。

7. その他

- 1) 坂入広報委員長より、研究室紹介と海外情報の執筆者選定にかかる情報提供の依頼があった。
- 2) 理事会終了後（8 月 18 日理事会当日）、兄井理事長より本稿【審議事項】の 1. と 3. ならびに 5. 項で承認された修正を反映させた 2023 年度体育心理学専門領域第 2 回理事会修正資料（案）が提出され、追加承認を受けた。
- 3) 理事会終了後の 8 月 21 日に、樋口大会委員長より 2023 年度体育心理学専門領域第 2 回理事会追加審議が提出され、杉山会長より学位論文発表に関する追加審議が提案された。これを受けて 9 月 24 日に兄井理事長から理事会に向けて追加審議が行われ、原案が承認された。これに伴い令和 5 年度補正予算案と令和 6 年度予算案の「学会大会・特別企画関連経費／セミナー・ランチョンイベント費用」を 6 万円に修正することで、本年度内の学位論文発表の実施が可決された。

2023（R5）体育心理学専門領域総会議事録（案）

日時：2023 年 9 月 1 日（金）9:00～9:50

会場：同志社大学 今出川校地【RY107】

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

杉山会長より開会の挨拶があった。

III. 議長選出

兄井理事長より石倉忠夫氏（同志社大学）が指名され、会場の承認をもって議長に選出された。

IV. 報告事項

(1) 2023・2024 年度体育心理学専門領域役員

兄井理事長より提案があり、2023 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日を任期とする 2023・2024 年度役員が以下のよう
に承認された。

- 会長：杉山佳生
- 事務局：兄井彰（理事長・事務局長）、木島章文（庶務担当）、中本浩揮（会計担当）
- 理事：樋口貴広、荒井弘和、國部雅大、田中美吏、笹場育子（以上、学会大会委員）、坂入洋右、荒木香織、内田若
希、村山孝之（以上、広報委員）
- 監事：森司朗、横山慶子
- 幹事：中須賀巧

(2) 2023 年度事業について

1) 理事会

兄井理事長より、2023 年 4 月 4 日（火）に第 1 回理事会が、2023 年 8 月 18 日（金）に第 2 回理事会が、それ
ぞれオンラインで開催されたことが報告された。

2) 体育心理学専門領域会報第 35 号

兄井理事長より、2023 年 8 月 26 日付でオンライン発行されたことが報告された。

3) 日本体育学会第 73 回大会における専門領域の活動

兄井理事長より、キーノートレクチャー 2 題、一般発表 86 題、うち口頭発表 13 題、ポスター発表 73 題の発表
があったことが報告された。

4) 学術／社会貢献企画

兄井理事長より、日本スポーツ心理学会との合同企画で中高生・市民のための入門講座が実施されたことが報告
された。

5) 研究会等活動支援

兄井理事長より、運動学習研究会、学生 SMT 研究会、臨床スポーツ心理学研究会の 3 件を助成対象としたこと
が報告された。

6) 会員異動

兄井理事長より、2022 年 8 月の会員数は 581 名であったことに対して、2023 年 5 月 15 日（月）付けの名簿よ
り 2023 年 5 月の会員数は 573 名、うち名誉会員 21 名であることが報告された。

(3) 2024 年度の日本体育・スポーツ・健康学会名誉会員の推薦について

阿江美恵子氏（平成 11-12 年度評議員、平成 13-14 年度評議員、平成 21-22 年度代議員、平成 23-24 年度理事、平成
25-26 年度理事、平成 27-28 年度理事、平成 29-30 年度監事、令和 1-2 年度監事、令和 3-4 年度監事）が推薦されたこ
とが報告された。

(4) 2023・2024 年度学会賞選考委員および学会誌（体育学研究, IJSHS）編集委員の推薦について

体育心理学専門領域から推薦した下記会員が、2023・2024 年度の委員に選出された。

- 学会賞選考委員：竹之内隆志 氏
- 体育学研究編集委員：奥村基生 氏、内田若希 氏、西野明 氏、手塚洋介 氏、煙山千尋 氏
- IJSHS 編集委員：平田智秋 氏、中須賀巧 氏、直井愛里 氏

(5) 2023・2024 年度各種委員会等委員の推薦について

体育心理学専門領域から推薦した下記会員が 2023・2024 年度委員に選出された。

- 1) 政策検討・諮問委員：星野聡子 氏
- 2) 若手研究者委員：雨宮 怜 氏
- 3) 応用（領域横断）研究部会員
 - i. スポーツ文化研究部会：沖 和砂 氏
 - ii. 学校保健体育研究部会：木島章文 氏
 - iii. 競技スポーツ研究部会：筒井 香 氏
 - iv. 生涯スポーツ研究部会：田中美吏 氏
 - v. 健康福祉研究部会：樋口貴広 氏

(6) 日本体育・スポーツ健康学会第 74 回大会

2024 年 8 月 29 日 (木)、30 日 (金)、31 日 (土) に、福岡大学七隈キャンパス A 棟ほかにて開催されるとの報告があった。

(7) その他

なし

V. 審議事項

1) 2022 年度 (令和 4 年度) 決算報告 (資料 1)

兄井理事長より資料 1 の説明があった。監事の佐々木氏、山崎氏の総会欠席により、山崎監事が作成した報告書を兄井理事長が代読するかたちで監査報告がなされ、承認を得た。

2) 2023 年度補正予算案 (資料 2)

兄井理事長より資料 2 の説明があり、承認された。

3) 2024 年度事業計画案

i. 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会の体育心理学専門領域の企画・運営

兄井理事長より、キーノートレクチャー、ポスター・口頭発表に加え、学会大会委員会の采配で学位論文発表企画を立ち上げる提案があり、承認された。

ii. 学術／社会貢献企画

兄井理事長より、日本スポーツ心理学会との合同企画等として中高生・市民のための入門講座を催す提案があり、承認された。

iii. 会報第 36 号の発行

兄井理事長より、2024 年 8 月発刊を目処に随時原稿を募集する提案があり、承認された。

iv. 理事会

兄井理事長より、4 月頃、8 月頃を目処に 2 回の理事会を開催する提案があり、承認された。

v. 総会

兄井理事長より、日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会期間中に開催する提案があり、承認された。

vi. 役員選挙

兄井理事長より、2024 年度中に役員改選選挙を行う提案がなされ、承認された。

vii. 日本体育・スポーツ・健康学会への若手研究者参加支援

兄井理事長より、事務局采配で第 74 回大会に際して若手研究者支援対象者の公募を行う提案がなされ、承認された。

viii. 研究会等活動支援

兄井理事長より、事務局采配で研究会等活動支援を行う提案があり、承認された。

ix. 学位取得者のオンライン発表

兄井理事長より、学会大会委員会発案で学位取得者のオンライン発表を行う提案がなされ、承認された。なお 2023 年度中にも当該企画を実施する提案があり、学会大会企画委員会の采配で実施計画・運営されることについても承認された。

x. その他

なし

4) 2024 年度予算案 (資料 3)

兄井理事長より資料 3 の説明があった。Web 選挙を実施するにあたって 300,000 円を計上する提案があり、承認された。

5) その他

なし

VI. 議長退席

VII. 閉会の辞

令和4年度決算報告

令和4年度決算報告(自 令和4年4月 至 令和5年 3月)

○収支決算書

令和4年度補正予算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)		1,144,700	1,238,707	△ 94,007
前期繰越収支差額		1,097,593	1,097,593	0
収入合計(B)		2,242,293	2,336,300	△ 94,007
支出の部				
当期支出合計(C)		1,211,908	1,050,218	161,690
次期繰越収支差額(B)-(C)		1,030,385	1,286,082	△ 255,697
支出合計		2,242,293	2,336,300	△ 94,007

○収入の部

款	項目	予算	決算		備考
・前年度繰越金		1,097,593	1,097,593	0	
・年度会費		1,000,000	1,094,000	△ 94,000	2千円×547名(3月27日現在)
・郵便貯金(利息)		5	12	△ 7	
・体育学会専門領域補助金		144,695	144,695	0	
・令和4・5年度代議員選挙発送費		0	0	0	
○収入合計(B)		2,242,293	2,336,300	△ 94,007	

○支出の部

款	項目	予算	決算		備考
・専門領域会報関連費用	小計	300,000	261,405	38,595	第34号発行および第35号作成
	印刷費	150,000	133,565	16,435	第34号印刷費+振込手数料
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	127,840	22,160	第34-35号(25名)
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	0	0	0	
・学会大会関連経費	小計	80,000	81,915	△ 1,915	第72回大会
	司会・演者謝礼	55,000	56,155	△ 1,155	演者2名、司会者5名+振込手数料
	会員外交通費補助	0	0	0	
	国際会議関連費	0	0	0	
	セミナー(プレ、ランチョン)費用	0	0	0	
	大学院生学会参加助成	25,000	25,760	△ 760	5,000円×5件+振込手数料
・研究会活動支援金	小計	191,000	150,680	40,340	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	60,165	39,835	20,000円×3件+振込手数料
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	90,495	505	30,000円×3件+振込手数料
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・令和4・5年度役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	292,768	292,933	△ 165	web選挙費+振込手数料
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	50,000	0	50,000	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	30,000	0	30,000	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,305	△ 165	HP管理費+振込手数料
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,211,908	1,050,218	161,690	
・予算外(B)-(C)		1,030,385	1,286,082	△ 255,697	
○支出合計		2,242,293	2,336,300	△ 94,007	

△は超過

令和4年度特別会計決算報告(自 令和4年4月 至 令和5年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)	令和4年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		7	13	△ 6
前期繰越収支差額		1,600,046	1,600,046	0
収入合計(B)		1,800,053	1,800,059	△ 6
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)-(C)		1,800,053	1,800,059	△ 6
支出合計		1,800,053	1,800,059	△ 6

*会員数昨年度592名から581名へと11名減(名誉会員20名含む、令和4年8月8日現在)

令和5年 3月 31日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

佐々木 万史
山崎 史郎

2023(令和5)年度補正予算案

令和5年度予算案(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収入の部

↓ 令和5年度の予算案

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,030,385	1,286,082	255,697	昨年度決算を反映
・年会費		1,000,000	1,000,000	0	2千円×500名
・郵便貯金(利息)		5	7	2	
・体育学会専門領域補助金		144,695	145,318	623	今年度入金分
・当期収入合計(A)		1,144,700	1,145,325	625	
○収入合計(B)		2,175,085	2,431,407	256,322	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	320,000	307,665	△ 12,335	第35号発行および第36号作成
	会報編集費等	150,000	137,665	△ 12,335	第35号発行・編集費
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	150,000	0	
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	220,000	220,000	0	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	
	大学院生学会参加助成	100,000	100,000	0	1名につき5千円
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	0	0	0	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,079,140	1,066,805	△ 12,335	
・予備費(B)－(C)		1,095,945	1,364,602	268,657	
○支出合計		2,175,085	2,431,407	△ 256,322	

△はマイナス

令和5年度特別会計予算案(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収入の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,800,059	1,800,059	0	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,000,066	2,000,066	0	

○支出の部

款	年度	予算案	補正予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,000,066	2,000,066	0	
○支出合計		2,000,066	2,000,066	0	

2024(令和6)年度予算案

令和6年度予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部

↓ 令和5年度の補正予算案

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,286,082	1,364,602	78,520	
・年会費		1,000,000	1,000,000	0	2千円×500名
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・体育学会専門領域補助金		145,318	145,318	0	
・当期収入合計(A)		1,145,325	1,145,325	0	
○収入合計(B)		2,431,407	2,509,927	78,520	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	307,665	320,000	12,335	第36号発行および第37号作成
	会報編集費等	137,665	150,000	12,335	
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	150,000	0	
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	220,000	220,000	0	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	
	大学院生学会参加助成	100,000	100,000	0	
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	0	300,000	300,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,066,805	1,379,140	312,335	
・予備費(B)－(C)		1,364,602	1,130,787	△ 233,815	
○支出合計		2,431,407	2,509,927	△ 78,520	

△はマイナス

令和6年度特別会計予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,800,059	2,000,066	200,007	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,000,066	2,200,073	200,007	

○支出の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,000,066	2,200,073	200,007	
○支出合計		2,000,066	2,200,073	200,007	

2024（令和6）年度 体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

日時：2024（令和6）年4月1日（月） 10時～

場所：WEB会議システムによるオンライン開催

出席者：杉山佳生（会長）、兄井彰（理事長）、樋口貴広、荒井弘和、國部雅大、内田若希、村山孝之、木島章文、中本浩揮（以上、理事）、森 司朗、横山慶子（以上、監事）、中須賀巧（幹事）、沖 和砂（オブザーバー）

欠席者（委任状）：田中美吏（途中参加）、笹場育子、坂入洋右、荒木香織（以上、理事）、筒井 香（オブザーバー）

【報告事項】

- 2023年度第2回理事会及び総会議事録（事務局）〈資料1-1、1-2ならびに総会資料1、2、3〉
兄井理事長より、資料1-1と1-2の確認依頼があり、承認された。軽微な疑義等については木島（事務局庶務担当理事）まで連絡する旨の依頼があった。
- 会員の異動（事務局）
木島事務局庶務担当理事より、2024年3月4日現在において587名が在籍している旨の報告があった。
- 会報第36号（通巻64号）の準備状況（広報委員会、事務局）
- 木島事務局庶務担当理事より、3月31日締め切り分の手稿は数本を残して大方収集できていること、学位論文紹介については4月1日より同月10日までの期間で原稿を募集している旨が報告された。
- 名誉会員の推薦（事務局）〈資料2〉
兄井理事長より資料2の説明があり、3名が本部から推薦された旨が報告された。
- 社会貢献イベントの実施状況（事務局）〈資料3〉
兄井理事長より資料3の説明があり、記載の通りに進行していることが報告された。
- 日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会について（学会大会委員会、事務局）〈資料4-1、4-2、4-3〉
 - 応用研究部会企画
兄井理事長より資料4-1の説明があり、記載の通り開催される旨が報告された。
 - 専門領域企画
兄井理事長より資料4-2の説明があり、本部の采配で大会1日目と3日目が配当されている旨が説明された。また樋口学会大会委員長より補足説明があり、企画を増やすのではなく、企画の数はそのままに3日目を早く切り上げることで、多くの会員が最後まで参加できる体制を整えたことが説明された。また樋口委員長よりキーノート演者の選定方針について説明があり、豊富な研究成果を骨太にまとめている研究者として山田憲政氏（中京大学）、気鋭の若手研究者として筒井香氏（株式会社BorderLeSS）を推挙した旨が示された。
- その他

【審議事項】

- 2023年度決算案（事務局）〈資料5〉
中本事務局会計担当理事より資料5の説明があり、承認された。
- 2024年度事業計画案確認（事務局）〈資料6〉
兄井理事長より資料6説明が確認された。加えて杉山会長より、180,000円程度の黒字が見込まれることからイベント・企画の増発が提案された。
- 2024年度大会参加助成および研究会助成について（事務局）〈資料7〉
兄井理事長より資料7について説明があり、それぞれの募集計画について説明があった。加えて杉山会長から2023年度の応募・寄稿状況について質問があり、木島事務局庶務担当理事から6件の応募・寄稿があったこととその募集手続きが示され、承認された。
- 学位取得者のオンライン発表について（学会大会委員会、事務局）〈資料8〉
兄井理事長から資料8について説明があり、概ね承認された。樋口学会大会委員長から当該企画のコンセプトに関する補足説明と実施報告があり、教職員と学生の割合が半々程度で約40名の参加があったこと、演者に対して会報へ報告寄稿を依頼する計画であったことが報告された。¹
- 2025-2026年度役員選挙（事務局）〈資料9〉
兄井理事長より資料9について説明があり、承認を得た。
- その他
國部理事より各応用研究部会の部会員に対して、各部会の実施状況について説明を求める提案があった。スポーツ文化応用研究部会について沖部会員、学校保健体育応用研究部会について木島部会員、生涯スポーツ応用研究部会について田中部会員、健康福祉応用研究部会について樋口部会員から、各部会の運営状況について説明があった。

¹ 樋口学会大会委員長より事務局と大会委員で理事会終了後にオンライン会合をもつ提案があり、樋口（大会委員長）、兄井（理事長）、國部、田中（以上、学会大会委員）、木島（事務局庶務担当理事）で資料8に沿った手続きをとることについて共通理解を得た。

令和5年度決算報告

令和5年度決算報告(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収支決算書

令和5年度修正予算案

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)		1,145,325	1,275,332	△ 130,007
前期繰越収支差額		1,286,082	1,286,082	0
収入合計(B)		2,431,407	2,561,414	△ 130,007
支出の部				
当期支出合計(C)		1,066,805	801,780	265,025
次期繰越収支差額(B)－(C)		1,364,602	1,759,634	△ 395,032
支出合計		2,431,407	2,561,414	△ 130,007

○収入の部

款	項目	予算	決算		備考
・前年度繰越金		1,286,082	1,286,082	0	
・年度会費		1,000,000	1,130,000	△ 130,000	2千円×565名(3月19日現在)
・郵便貯金(利息)		7	14	△ 7	
・体育学会専門領域補助金		145,318	145,318	0	
・令和5・6年度代議員選挙発送費		0	0	0	
○収入合計(B)		2,431,407	2,561,414	△ 130,007	

○支出の部

款	項目	予算	決算		備考
・専門領域会報関連費用	小計	307,665	260,635	47,030	第35号発行および第36号作成
	会報編集費等	137,665	137,665	0	第35号印刷費+振込手数料
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	122,970	27,030	第35-36号(24名)+振込手数料
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	220,000	66,650	153,350	第73回大会
	司会・演者謝礼	60,000	51,155	8,845	演者2名, 司会者6名+振込手数料
	会員外交通費補助	0	0	0	
	国際会議関連費用	0	0	0	
	セミナー(プレ, ランチオン)費用	60,000	0	60,000	
	大学院生学会参加助成	100,000	15,495	84,505	5,000円×3件+振込手数料
・研究会活動支援金	小計	191,000	211,090	△ 20,090	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	120,595	△ 20,595	20,000円×6件+振込手数料
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	90,495	505	30,000円×3件+振込手数料
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,100	△ 100	積立+振込手数料(100円)
・令和5・6年度役員選挙実施費	web選挙費用	0	0	0	web選挙費+振込手数料
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	0	50,000	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	30,000	0	30,000	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,305	△ 165	HP管理費+振込手数料(165円)
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,066,805	801,780	265,025	
・予備費(B)－(C)		1,364,602	1,759,634	△ 395,032	
○支出合計		2,431,407	2,561,414	△ 130,007	

△は超過

令和5年度特別会計決算報告(自 令和5年4月 至 令和6年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)	令和5年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		7	14	△ 7
前期繰越収支差額		1,800,059	1,800,059	0
収入合計(B)		2,000,066	2,000,073	△ 7
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)－(C)		2,000,066	2,000,073	△ 7
支出合計		2,000,066	2,000,073	△ 7

*会員数昨年度581名から587名へと6名増(名誉会員21名含む, 令和6年3月19日現在)

令和6年 3月 31日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

森 司朗
横山 慶子

2024(令和6)年度予算案

令和6年度予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部

↓ 令和5年度の補正予算案

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,286,082	1,364,602	78,520	
・年度会費		1,000,000	1,000,000	0	2千円×500名
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・体育学会専門領域補助金		145,318	145,318	0	
・当期収入合計(A)		1,145,325	1,145,325	0	
○収入合計(B)		2,431,407	2,509,927	78,520	

△はマイナス

○支出の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	307,665	320,000	12,335	第36号発行および第37号作成
	会報編集費等	137,665	150,000	12,335	
	会報送料	0	0	0	
	原稿料	150,000	150,000	0	
	会報送付用封筒代	0	0	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会/特別企画関連経費	小計	220,000	220,000	0	
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	0	0	0	
	セミナー・ランチョンイベント費用	60,000	60,000	0	
	大学院生学会参加助成	100,000	100,000	0	
・研究会/社会貢献活動支援費	小計	191,000	191,000	0	
	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	100,000	0	
	中高生・市民向け講座講師謝礼	91,000	91,000	0	1名につき3万円
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	web選挙費用	0	300,000	300,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会、委員会開催費用	30,000	30,000	0	
・広報費	HPの管理・充実のための費用	63,140	63,140	0	HP管理費
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計(C)		1,066,805	1,379,140	312,335	
・予備費(B)－(C)		1,364,602	1,130,787	△ 233,815	
○支出合計		2,431,407	2,509,927	△ 78,520	

△はマイナス

令和6年度特別会計予算案(自 令和6年4月 至 令和7年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度補正予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,800,059	2,000,066	200,007	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		2,000,066	2,200,073	200,007	

○支出の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)－(C)		2,000,066	2,200,073	200,007	
○支出合計		2,000,066	2,200,073	200,007	

VIII. 編集後記

編集後記

体育心理学専門領域会報第 36 号（通巻第 64 号）が完成しました。ご多忙中、原稿執筆の労を惜しまず会報に寄稿してくださった多くの先生方、ならびに、原稿の収集から編集までご尽力いただいた体育心理学専門領域事務局の木島先生（山梨大学）をはじめとする関係の先生方のお力により、最新の研究状況がよくわかる充実した内容の会報になりました。広報委員会として、心より感謝申し上げます。

今回の掲載内容は、日本体育・スポーツ・健康学会第 73 回大会関連の報告に加え、研究会の活動報告、研究室紹介、学位論文の発表・紹介、海外情報、そして事務局報告と、体育心理学専門領域に所属する会員の活動についての幅広い情報が網羅されています。

第 73 回大会は、同志社大学今出川キャンパスにて、5 つの応用研究部会と 16 の専門領域別に多くの研究発表が行われ、盛大に開催されました。専門分野を横断したテーマについては、この会報においても、これからの保健体育の授業のあり方、大学及び高校の運動部活動、生涯スポーツに関する政策と個人や地域での活動、運動やスポーツを通しての健康の維持増進や福祉社会の実現など、幅広い内容の議論が報告されています。また、後半に掲載されている体育心理学領域の博士論文をみると、それぞれの内容が、歩行運動、競技スポーツ、運動部活動、姿勢や動作、体育授業、プレーの構造など、多岐にわたる幅広いものになっており、体育心理学という領域自体が、そもそも狭い専門性に限定されない多様で包括的な学問領域であることがわかります。

体育心理学専門領域は、基礎研究から応用実践まで、心・技・体の多様な分野の異質なメンバーが、多様な方法を用いて研究を推進してきました。今大会の 2 つのキーノートも、複雑な運動に潜む規則性の解明に挑む実験的な研究と、アスリートの誇りの様相を明らかにした調査的研究の両面から成り立っています。また、口頭発表では、インドからスポーツ心理学者が多数参加して研究を発表しており、国際的な交流も盛んに行われました。また、本会報では、海外情報として、アメリカ合衆国コロラド州にある Fort Lewis College についても詳しく紹介されています。今後さらなる国際的な交流や研究の発展が期待されます。

さらに、統合的な研究だけでなく、地域ごとの研究活動や、より専門的な領域での研究会活動も活発に行われており、関西体育心理学例会、スポーツ視覚研究会、臨床スポーツ心理学研究会、運動学習研究会、スポーツ動機づけ研究会、学生スポーツメンタルトレーニング研究会などの活動も報告されています。

第 73 回大会のテーマは「知徳体を育む体育スポーツの未来」でしたが、本会報を読んで、体育心理学専門領域は、包括的で国際的な活動と専門的で地域に即した活動の両面が活性化している点で、これからの体育スポーツの発展の方向性を先取りしていると感じました。

広報委員会委員長 坂入 洋右

日本体育・スポーツ・健康学会体育心理学専門領域会報 第36号（通巻第64号）

発 行 令和6年8月10日 発行（非売品）
発行責任者 兄井 彰（代表）
発 行 所 日本体育・スポーツ・健康学会体育心理学専門領域事務局
〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1 福岡教育大学
TEL 0940-35-1448
E-mail : taiiku_shinri@ihs.kyushu-u.ac.jp
URL : <https://www.psychology-jspehss.jp>

印 刷 株式会社ネクストビジョン
